戦国魔神ゴーショーグン 番外篇
幕末豪将軍
作/首藤剛志
絵/さかもとえみ
AM
JuJu

戦国魔神ゴーショーグン　番外篇
幕末豪将軍

首藤剛志

'49年8月18日生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。以後さまざまな職を経験し、現在に至る。代表作はTVシリーズの「ゴーショーグン」「ミンキーモモ」。小説家としては「ゴーショーグン」シリーズ、「永遠のフィレーナ」などで活躍中。

さかもとえみ

?年9月17日生まれ。「ドルバック」「ダンクーガ」「吸血鬼ハンター"D"」などの原画を担当。ビデオの「戦国魔神ゴーショーグン・時の異邦人」で宣伝用ポスターの原画を描いたことが、今回の仕事のきっかけとなった。現在もアニメーターとして活躍中。

誠
カー!
殺

戦国魔神ゴーショーグ

番外篇 幕末豪将軍

首藤剛志

目次

口絵・本文イラスト／さかもとえみ

前口上

おぼえていますか？
何年か前のことです。
地球を陰で牛耳っていた巨大な悪の組織、ドクーガと対決して、少しだけ派手めに戦った数人の連中がいました。
彼らは、ゴーショーグンというロボットを操って戦いはしたものの、多勢に無勢……とても勝ち目はなさそうでした。
ところがなんのはずみか、天下無敵のはずのドクーガを打ち破り、滅ぼしてしまったのです。
そして、これまた、なんのはずみか、彼らはロボット、ゴーショーグンと別れ、地球を飛び出し、広い宇宙のさまざまな星をさまようはめになってしまいました。
要するに、今、彼らは宇宙をフラフラとただよう浮き草のような存在なんです。
でもまともにさまよっていては、星から星へ移るのに何万年もかかります。
これでは、人間の一生どころか、地球の人類の歴史を使いきっても追いつきません。
そこで彼らは冷凍冬眠しながら、肉体的な歳をとらずに宇宙船に乗るとか、またあるときは、瞬間移動という、俗にワープとか時空飛行と呼んでもいいような、要するに、あっという間に、遠くの地点に移動する方法で、時間のロスを補っているのです。

でも、彼らは、難しい理屈のついた宇宙船や装置を使って瞬間移動しているわけではなく、まして、彼らに、テレポートなんて超能力があるわけでもありません。

彼らは普通の人間です。

けれど、今までさすらった数々の星で起こった事件の成り行きで、彼らとは別の誰かさんの力（パワー）で、瞬間移動させられてしまうのです。

誰かさん……。

そう、誰かさんとしか言いようがないけれども、無理矢理名づけるなら「宇宙の意志」……そのころ、地球では、その名称を「ビッグ・ソウル」といい、その意志が発動する際のエネルギーを「ビムラー」と呼んでいました。

まあ、名前をつけたところで、わけの分からない誰かさんであることには違いありません。

とにかく、彼らの行く先は誰かさん任せ……というのは、彼らにとってあまり面白いことではありません。

自由に、気ままに生きたいと思っている彼らには、誰かさんの力で操られるのは、迷惑このうえないことなのです。

……ほっといてくれ！　俺たちは好きにしたいんだ！……

しかし、誰かさんは、まだまだ彼らに何かをさせたいようなのです。

……いいかげんにせぇよ……。俺たちはリタイア志願……。そろそろ地球に帰りたくなってきたしな……

浮き草稼業が身についているとはいえ、彼らも地球の人間です。里心もちょっぴり出てきた今日このごろです。

でも、彼らが今いるのは、宇宙のどこか……、いつ地球に戻れるかは見当もつきません。

おまけに、時空を超えて、ぶっ飛んでいくんですから、彼らの感覚では、数年前に SEE YOU AGAIN と言ってお別れした地球が、実際の地球時間でどれくらいたっているかも分からないのです。

いったい彼らは、これからどうなってしまうのでしょうか?……。

おっと、もう一つ、彼らの名前を紹介しておきましょう。

北条真吾にキリー・ギャグレー。そして、レオナルド・メディチ・ブンドル。さらに、スグーニ・カットナルとヤッター・ラ・ケルナグール。

名前は、ほとんど冗談に思えますが、これは、男たちの真面目な本名です。

この五人の男たちと、もう一人、二十歳を少しだけすぎたことを、ほんのちょっぴり気にしているレミー・島田という若い女性の（注　ここ強調＝レミー談＝）あわせて六人の仲間たち。

長いさすらいの旅の中で、いつしか、彼らは、自分たちのことをゴーショーグン・チームと呼んでいました。

序幕

時空を超えて あるいは……

「いつもどおりに」

……今度はどこに行くの？
瞬間移動中のレミーは、いつものように、誰に語るでもなく、そう思った。
瞬間移動中なのに、そんなことを思う時間があるというのは変な気もするのだが、千里（四千キロ）の道もひとっ飛びという心の時間だ。
実際の時計の動きとは別ものらしいと、レミーは勝手に納得していた。
いつのまにか、一緒に飛んでいるはずの仲間の気配は消えている。
……みんな、どこへ行ったの？……
……ま、いいわ……
レミーは肩をすくめた。
……ほんと、みんな、それぞれ勝手な生き方が好き……
……でもどうせ、みんな一緒に瞬間移動を始めたんだもん。辿り着く先も、お互い、そう遠くないはずよね……。きっと SEE YOU AGAIN ……、うん……
レミーは、自分に頷いた。

……なんとかなるわよ。いままでだって、なんとかなってきたんだから……

レミーは、落ち着いていた。

いささか、瞬間移動に悪慣れしているのかもしれなかった。

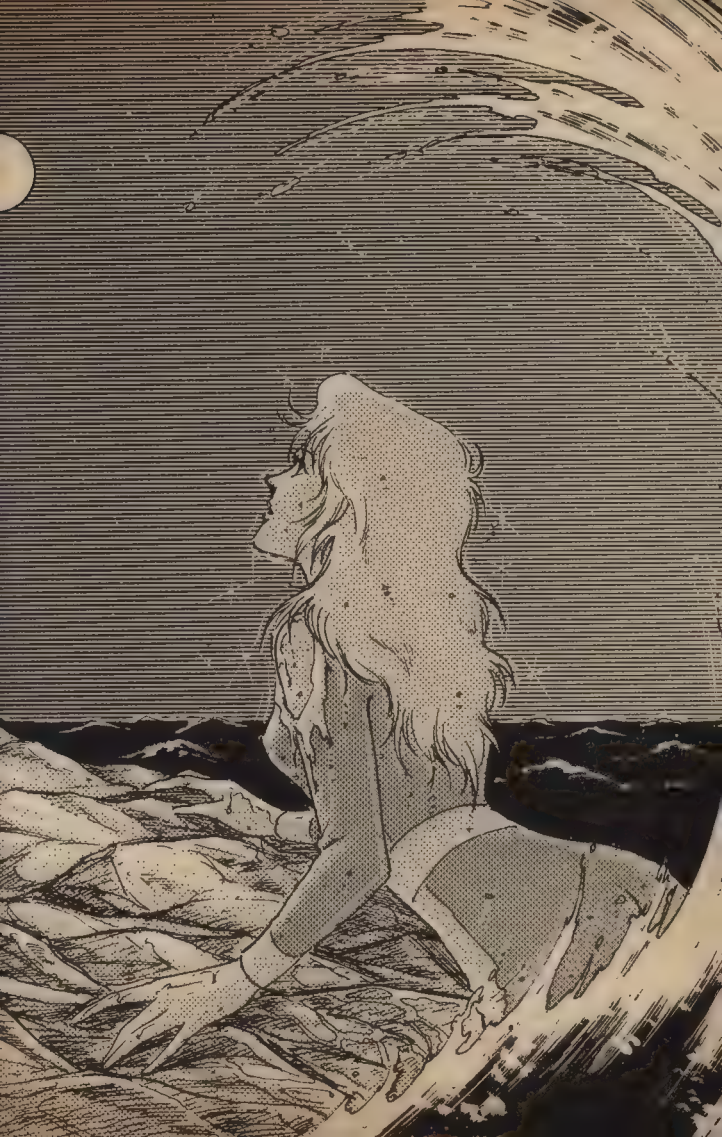
おや、前方に明かりが見えてきました。

……ようし……、出口が見えてきた……。今度はどんなところかな……

それがどんなところだって、レミーは、生き抜いていける自信があった。

……いままで生きてこれたのだから、これからだっていけますよね……

レミーは、そう思うことに決めていた。

だが、そこは、いつもとは違っていた。そこは、ゴーショーグンの世界とは、いまいち別の、番外地だったのだ。

第一幕

ここはどこ？あるいは……

「見知らぬ剣客」

満月が一つ、夜空に浮かんでいた。

夜空に雲一つなく、輝く無数の星はおだやかな光を降らしていた。

だが、下界は違っていた。

強風が吹き荒れ、海はのたうち、泡立つ波が月の光を浴びて、獲物に食らいつく野獣の牙(きば)のように激しく交錯(こうさく)し、光っていた。

夜空が天国なら、今、海は地獄だ。

いつもなら、今日の星空のように、漁師の小舟の漁(いさ)り火(び)が浮かぶはずの海だったが、今は風と波だけがわがもの顔で暴れまわっている。

だが、いきなり、唐突(とうとつ)に、——風と波の世界に、別のものが割り込んできた。

泡だつ海面の一カ所が、まるでスポットライトを当てられたようにおだやかになった。

そこだけ、風が止んだ。

逆巻く波の中で、そこだけが鏡のように動かない。

星空が、そんな海の鏡に映しだされた。

次の瞬間——。
星の彼方から、凄まじい速さで、光の矢のようなものが落ちてきた。
光の矢が、海の鏡に吸い込まれたとたん、鏡の部分は消え、再び海は元の荒れ狂う風と波の世界に戻っていた。

＊

「いくらなんでも、こりゃないわよ！　あんまりだわ！」
思わず叫び声をだそうとしたレミーは、あわてて口を閉じた。
口から、鼻から、塩辛い水が、どっと流れ込んできたのだ。
……たまらん……。なによこれ……。塩水……。えっ……、ここ海の中？……
そう、光の矢は、瞬間移動したレミーが、この世界に現れたときにできた時空のゆがみだった。
……なんとかなるわ……なんて、のんびりしてちゃいられないわ……
レミーはあわてた。
……なんとかしなきゃ、水膨れしちゃって、レディメイド（既製服）が着れなくなっちゃう……
さまざまな星を、着のみ着のままでさまよってきたレミーにとって、オーダーメイドの服しか着れないスタイルになっては、なにかと不便だ。

……オーダーメイドを着るお金なんて、持っちゃいないしね……。あれ？　わたし、何を考えているんだろう……。レミー、あなたは溺れかかっているのよ……

レミーは、必死に手足をばたつかせた。

海面に頭が出た。

とたんに、波にはじかれ、海面に叩きつけられた。

波は、レミーの体を激しくもてあそぶ。

……こりゃ、体力勝負だわ……

水泳なら、二日ぐらい海に浮かんでいられる自信のあるレミーだが、大荒れの海となれば話は別だ。

……陸は……、陸はないの？……

レミーは波にもまれながら、懸命に陸の影を探した。

波の谷間の向こうに、ひときわ泡立ち、くだけ散る波頭が見えた。

レミーは、目を凝らした。

月明かりにぼんやりと断崖のようなものが、見える。

さらに、崖から少し離れたところに、まるで人間の立ち姿のように突っ立っている一本の岩が見えた。

レミーの位置から見て、おそらく高さが五十メートルは超えようという巨大な自然の立像だ。

何万年もの波と風の侵食作用で、硬い岩石でできたそこだけが海面にとり残されたのだ。

……あそこまで行ければ……
レミーは、ときに波に身をまかせ、あるときはがむしゃらに手足を動かし、少しずつ岩の立像に近づいていった。
……もう少し、もう少し……。わしゃ往生際が悪いんじゃ！……
レミーは、呪文のように同じ言葉を繰り返した。
そして、その言葉が何万回か、唇を通りすぎたとき――、
……あれ？……お水がない……
レミーは、岩場の上で手足をばたつかせている自分に気がついた。
泳いだというより、波に打ち上げられるようにして、一本岩の岩場に辿りついていたのだ。
……着いたなら、着いたとアナウンスしてほしかったな……
レミーは無我夢中になっていた自分に、少し照れてから、あたりを見回した。
もとより、到着をアナウンスしてくれるような人影などない。
風と波のうなり、ほえる声しか聞こえない。
レミーは、ふっと夜空を見上げた。
満月が一つ――。
レミーは思わず息を飲んだ。
……この月は見たことがある。あの月の模様は……、そう、忘れもしない……、地球の月とそっくりだ……

レミーはさらに、星空を追った。
三つ並んだ星――。
オリオン座がある小熊座の尾の先には、北極星が光っている。
……ここは地球……それも北半球の……
北という言葉が頭に浮かんだとき、かすかに吹き荒れる風の冷たさが身に染みた。
レミーの着ている戦闘服が、速乾性の防寒防熱服でなかったら、とっくにこごえ死んでいたかもしれない。
だが、まだレミーには、そこが地球であるかどうか、確信できなかった。
あまりに星が見えすぎていたからだ。
レミーの知る二十一世紀の地球では、大気汚染で、これほど澄みきった夜空はどこにもなかったのだから――。
レミーは、腕時計に目をやった。
その腕時計には、時間のほか、計算機や、通信機能、温度や湿度などの測定機能等、さまざまな機能が備わっている。
レミーは、腕時計の電波受信装置のスイッチを入れた。
どの周波数に合わせても、自然発生で起こる電波の騒音以外のものは聞こえなかった。
受信装置の感度は半径、五百キロ――。
少なくとも、地球上のどこであれ、ラジオやテレビ、さまざまな通信、電波をひとつもキャ

ッチ出来ない土地など、あるはずがなかった。
そして、それは、半径五百キロ以内に同じ通信装置を持ったレミーの仲間たちもいないことを意味していた。
レミーは、どっと襲いかかってくる疲れに、気が遠くなりながら呟(つぶや)いた。
……ここ、どこ？……地球じゃないの？……みんなどこにいるの？……

＊

九月――。
その町は秋とは呼べぬほど暑かった。
しかも、その夜は雨が降ったことも手伝って、蒸し風呂のような暑さだった。
そのためか、庭の雨戸を開け放した部屋の中で、裸の男女が抱き合って眠っていた。
二人とも汗まみれだ。
男は泥酔して、高いびきをかいている。
女は暑苦しくなったのか、男の腕を払って、寝返りをうった。
そのときだった。
ドカドカ――。
廊下を走る足音が聞こえた。
四、五人の足音だ。

足音が部屋に飛び込むと――。
ズザッ！
女の傍らで骨を鉈でたち切るような音がした。
絶叫――。
「何者だ！　卑怯な！」
二人の寝ている布団を取り囲んで五人の影が立っている。
男は、枕元にある刀架に手をやった。
しかし、刀架は刀を振りかぶった影に蹴られ、畳に転がった。
「はかったな、おのれ！」
男の血を吐くような声には何も答えず、さらにたて続けに肉を貫く刀の音が、女の隣で響く。
男の体から吹き出した血が、女の顔にほとばしった。
女はとっさに立ち上がると、転がった刀架から刀を引き寄せ、男に渡そうとした。
「あんた、これを！」
「女！　死ね！」
影の振り下ろした刀が、女の首すじに食い込んだ。
女の首は皮一枚残して垂れ下がり、体はその場に崩れ落ちた。
血まみれの男は、障子を蹴破って廊下に出る。
その背中に、刀が次々に斬り込まれる。

たまらず倒れた男の上に、影たちが交互に刀をつきたてた。
男は、ついにこと切れた。
刀から血をしたたらせながら、影の一人が静かに呟いた。
「終わった」
「長居(ながい)は無用！」
もう一人が言った。
五人は頷(うなず)くと、縁側から庭へ飛び出した。
そのときだった。
ピカッ！
稲光が走り、庭の松の木が弾け飛んだ。
落雷！
影たちは思わず刀を放り出すと、身を伏せた。
しかし、雷につきものの轟音(ごうおん)が聞こえない。
影たちは、怪訝(けげん)そうに顔を上げた。
粉々になった松の木の前に、人が一人、立っていた。
長い髪、長身――。なによりも目立ったのは、身につけているのが、影たちが着ている着物と違って、体型がはっきり分かる点だった。
影たちも、こんな服を知らぬわけではなかった。

異国人の服に似ていた。
一瞬、影たちは、その人間を異国人の女と見違えた。
だが、異国人だとしても、長い髪の女が着るには妙だった。
普通、異国の女たちはすかあとかこるせっととか、下の広がった着物をつけるはずだった。
髪の長い人間は、投げ出された刀の一本を拾い上げた。
影たちは身構えた。
「日本刀か……ここは、いったいどこなのだ……」
そいつは、影たちを見つめて呟いた。
やはり異国の言葉だった。だが、なによりも影たちが驚いたのは、その声が男の声だったことだ。声は、呟き続けた。
「映画のロケかとも思ったが、どうやら、この刀は本物……すると、ここは……」
影の一人。リーダー格の男が、長髪の男の前に進み出た。
「何者かは知らぬが、われわれを見られた以上、生かしておけぬ」
いきなり刀を突き出し、踏み込んできた。
ガシン！
火花が散った。
リーダー格の刀は、男の拾った刀で見事にかわされていた。
「馬鹿な、俺の突きがかわされるとは……」

リーダー格がうめいた。
「気迫は見事だが、乱暴なだけの太刀筋だな」
長い髪の男が、日本語で言った。
「へえ、この異人さん、この国の言葉が喋れるんだ。見事なもんですね」
影の中の一人。一番若く見える男が言った。
「郷に入っては郷に従え。ここが日本なら、日本語を使わずばなるまい」
男は正確なアクセントの日本語で答えた。
「異人さんが、みんなそういうふうに謙虚だといいんですけれどね」
若い男は、そう言って肩をすくめた。
リーダー格がわめいた。
「何をつまらぬ問答をしている。みんな早く叩き斬れ」
取り囲んでいたうちの二人が、鋭い気合いで突っこんでくる。
長い髪の男は苦もなく躱すと、リーダー格に言った。
「おぬしたち、このわたしをレオナルド・メディチ・ブンドルと知っての狼藉か？」
いうまでもなく、レミーと同じゴーショーグン・チームの一人だ。
相手がそれを知っているはずもなかったが、日本元祖のハラキリニンジャ時代劇の決め文句を使えるまたとない機会だと思ったのだ。
「ぶんどるだか、かっぱらいだか知らぬが、われわれの姿を見られた以上、おぬしに明日はな

い」
「そうまで言うのなら、お相手、つかまつろう」
ブンドルは、刀を正眼に構えた。
まったくすきがない。
リーダーと二人の男は、刀をふりかざしたまま動けない。
若い男の傍らで、刀も抜かず腕組みをして、ブンドルを見つめていたもう一人の男が呟いた。
「北辰一刀流か……」
ブンドルは、チラリとその男を見て、
「分かるか？……ほかにこういうのもある」
ブンドルは、刀を下段に構えた。そして、ゆっくりと、体の前で円を描くように、刀を動かし始めた。
「奇妙な……異国の剣法か……」
「いや、眠狂四郎の円月殺法だ……。知らぬのか？」
「知らぬ、だが、さぞかし手だれの剣法者であろうな」
男は真顔で答えたが、もちろん円月殺法は架空の剣法である。そこには、隙ができる。
「その剣法、破れたり！」
抜刀していた男の一人が、上段から斬りかかる。

「甘い！」
ブンドルの声が凛と響く。
ブンドルは、逃げもせずに前に踏み込んだ。
刀の峰を返すと、男の小手をパシンとうった。
グキッ！　峰打ちとはいえ、男の手首の骨を折るには十分だった。
刀を落とし蹲る男には見向きもせず、ブンドルはリーダー格に向かって正眼に構えた。
「すこし遊びがすぎた。もう怪我人は出したくない。正統な剣法でいこう」
「このお！　舐めやがって！」
リーダー格が刀を振りかざした。
「やめたほうがいい」
ブンドルをじっと見つめ腕組みしていた男が、リーダー格に言った。
抑揚のない冷たい声だ。
「なに？」
「強すぎる。あんた死ぬぞ」
「死にゃしませんよ」
若い男が、明るい声で言った。
「なぜなら、その人は刀の峰を返している。もっとも、峰打ちにしたって、十日は再起不能でしょうけれどね」

「いや、全快まで一カ月はかかるだろう」
「賭けましょうか？　何日で治るか」
この二人、まるでひとごとのように話している。
リーダー格は、ポカンと口をあけて二人を見た。
「そんなに強いのか、こいつは」
「うん、強いですよ。相当なもんだ。さっきから感心しています」
若い男がニッコリ笑った。
「おまえら、どっちの味方なの」
リーダー格が情けなさそうに聞いた。
「明日の局長になる男に無駄な怪我をさせたくないだけです」
冷たい口調の男がきっぱりと言った。
リーダー格が、血まみれの刀を見つめて答えた。
「だが、今宵の虎徹は血に飢えている」
虎徹とは、どうやらリーダー格の刀の銘であるらしい。
男は突き放すように言った。
「刀が人を斬るのではない。人が人を斬るのです。早い話が、格が違いすぎるんですよ。この異人さんは……残念ですけどねぇ」
若い男が頷いた。

「では、どうすればいいのだ」
「われわれがここで怪我をして動けなくなり、見回りにでも見つかってごらんなさい。今宵の下手人が世間に知れることになる」
「困りますよね、これ、ほんとに困ります」
若い男の口調は相変わらず明るい。
「それはそのとおりだが……」
リーダー格は不満げに刀を引き、懐紙(かいし)で刀の血のりを拭(ふ)いて鞘(さや)に納めた。
「どうやら話がついたようだな」
ブンドルはつかつかと若い男の傍らに近づくと、手に持った刀を手渡した。
刀は、雷を怖れた若い男が投げ出したものだった。
若い男は、血のりを拭きながら、
「しかし、たいした自信ですね、この異人さん、刀なしでもわたしたちに勝てるつもりでいるらしい」
「勝つだろう。おそらくその腕前ならな……」
手首を折られて蹲っている男を立たせながら、冷たい声の男が言った。
そして、ブンドルの顔をみすえた。
「今宵の出来事は、内密に願いたい」
ブンドルは、男を見つめかえした。

「わたしには関わりのない世界だ。関わりのないものに関心はない」
「わしらの目は、おぬしがどこにいようと光っている。刀でなくても人は殺せることを忘れぬように……」
ブンドルは苦笑して、腰からレーザー銃を抜いた。
「これを使ってかね？」
引き金をひいた。
庭石が、一瞬のうちに音もなく蒸発した。
ブンドルを取りまいていた五人は、息を飲んだ。
「そちらもさっきの言葉を忘れぬように……」
ブンドルは銃を収めると踵(きびす)を返して庭から出て行こうとした。
そのとき、家の中が騒がしくなった。
「芹沢(せりざわ)先生が……」
「局長が殺された！」
男たちの叫び声が聞こえ、家の灯が次々ともされていく。
リーダー格が、冷たい声の男に言った。
「歳(とし)さん、もう出なおしてくる暇(ひま)はないな」
「うん、下手に見つかるより出ていったほうがいい。ただし、その羽織は着換えねばな」
リーダー格の羽織は、先刻(せんこく)殺した男女の返り血を浴びている。

それに比べて、冷えた声の男の羽織は、あれほどの惨劇の後でも血の染みひとつついていなかった。
猪突猛進型のリーダー格とまるで違う、男の冷静で慎重な性格を見事に表していた。
「これを着て行くといい」
男は羽織を脱ぐと、リーダー格の羽織と交換した。
そして若い男に言った。
「総司、山南君を頼む」
その声を聞いたブンドルの足が止まった。
……総司……
そして、山南とは、ブンドルが峰打ちをした男の名らしい。
「分かっています」
総司と呼ばれた若い男は、山南に肩を貸した。
痛みが激しいらしく、呻き声が絶えまない。
「山南さん、ごめん」
若い男は、山南のみぞおちに当て身を食らわした。
呻き声が消えた。
気を失ったのだ。
「これで痛みを感じずにすむ」

「では最後の仕上げにいくか」
リーダー格は、着換えた羽織りの襟を正し、家のほうへ歩きだした。
「いや、どうも、どうも、近藤です……」
……近藤？……
ブンドルは振り返った。
近藤と名のったリーダー格は、いけしゃあしゃあと、
「いったい誰が局長を殺したのだ。仇は、この近藤がきっととってみせます」
そう言いながら、今さっき殺したばかりの男の部屋に、ずかずかと入っていった。

*

雨はかわらず、降り続いている。
「近藤……あの男が新撰組の近藤勇か……」
気を失った山南を肩にかついで歩いていた若い男は、その声を聞いて立ち止まった。
声は続いた。
「新撰組とは、幕府が腕のたつ浪士を集めて、京の都の治安を守るために作った集団――。幕府を倒そうと目論む尊皇攘夷派の弾圧で知られ、京の街では鬼のように恐れられている。
……そうだったね」
若い男の傍らに、いつの間にかブンドルが立っていた。

「知っていたんだ。やっぱり……」
そう呟いた若い男の体には、いままで感じられなかった殺気が漲っていた。
ブンドルは、それを知ってか知らずか、話し続けた。
「そして、先刻一度も刀を抜かなかった男が、土方歳三……おぬしは沖田総司だな」
「だったらどうします」
沖田の右手が刀の柄にかかった。
ブンドルは、ぼそりと答えた。
「確かに、おぬし、なかなかに美青年だ」
「あん？」
拍子抜けした沖田は思わず咳こんだ。
「雨は体に毒だ。病弱を美しいというは、悲しい。気をつけるがよろしかろう」
「ええ……まあ……はい」
沖田は、なんとなく、ブンドルに対する殺意を失ってしまった。
「しかし諸君の剣は、相当なものだった」
ブンドルの口調は皮肉にしか聞こえない。
沖田は、フッと笑った。
「ええ、相当ですよ。ほとんど自己流の喧嘩殺法ですから……」
「天然理心流とはよく言ったものだ」

天然理心流は、近藤、土方、沖田の習った剣の流派だった。千葉周作の北辰一刀流がメジャーなら、天然理心流はどマイナーなアングラ流派といえる。
沖田は肩をすくめた。
「そこまで知っているんですね？　あなた、異人なのに、どこでそれを……」
「司馬遼太郎は、よく読んだ」
「はあ……？」
沖田総司は首をひねった。
日本の中世文化に、人並み以上の興味を持つブンドルにとって、宮本武蔵と並んで、新撰組ものは愛読書のひとつだった。
ブンドルは、ぼそりと呟いた。
「新撰組……滅びの美学か」
「滅びちゃうんですか？　わたしたちは……」
「ん、いや……それはまだ分からぬ。分からぬということにしておこう」
沖田はニッコリ笑って言った。
「まるで水晶玉の予言者みたいですね。西洋には、よくあるんでしょう？」
「気を悪くしたかな」
「いえ、ものみないつか滅びますよ。でも、滅びるのなら、綺麗にいきたいな」
沖田は、胸の病気に罹っていた。

沖田は、このころから、すでに自分の体が、病に蝕(むしば)まれているのに気づいていたようだ。
沖田は、明るく言った。
「ま、成るようにしか成りませんけどね……」
ブンドルは、知りうる限りの日本の幕末期の歴史を思い返してみた。
もし、ここが、本当に幕末の日本だとしたら……。
ここは、京都郊外の壬生(みぶ)という村だ。
年代は、よく覚えていないが、近藤勇が、新撰組の局長、芹沢鴨(せりざわかも)を暗殺し、次の局長になろうとした。その日が今日なのだ。
ブンドルの知っている歴史を、本当にこの青年たちは辿っていくのか？
だが、この歴史の中では、いるはずのないブンドルが新撰組と接触してしまった。あってはならぬものが紛れ込んでも、歴史はやはり歴史のまま変わらないのだろうか。
ブンドルにとって興味深い疑問だった。
ブンドルは、沖田に言った。
「ときに……沖田どの……わたしは、この世界にある、どこの国の異人でもない」
「でしょうね」
沖田は、こともなげに答えた。
「分かるのかね」
「あなたの持っていた飛び道具ですよ。そして、あなたの現れ方……普通じゃないですよね。

確か、あなた、レオナルドさんっていいましたね」
沖田は、名前を聞き返した。
「ブンドルと呼んでくれ」
「じゃあ、ブンドルさん……竹取の翁の話、知っています？」
「この国最古の文学か……」
「文学？　いえ、月の世界にわれわれと違う人間がいるっていう、まあ、子供の御伽噺ですよ。でもね、この世界だって、われわれだけじゃない。あっちこっちの国に異人たちがいる……。月にいたって、おかしかありませんよね……。月だけじゃない、空に見える星にだって、いや、野原の草の陰にだって、われわれと別の誰かが、いるかもしれない。わたしはね、子供のころから、そんなことを考えるのが好きだったんです。やっぱり、おかしいかな、わたしは……」
沖田は、少しだけさびそうに微笑した。
「わたしが月から来た人間だとでも言うのかな」
ブンドルが、聞くでもなく言った。
「さあ……でも、そういう人といつ会えても、わたしは驚かないつもりでいましたからね……あなたにも驚かない。ただ、できるだけ……その、わたしが滅びる前に……」
沖田はふっと微笑した。
「いろんなものと会ってみたいと思いましてね……だから、近藤さんや土方さんの後について、

関東の田舎から京の都にやって来たのかもしれません」
「わたしも、いろいろな人と会ってみたいものだ」
ブンドルはそう呟いてから沖田を見た。
「沖田殿……」
「沖田総司です。……総司でいいですよ」
「ならば総司君、新撰組には、異人は入隊できないという規律はあったかね」
「はあ？」
沖田はキョトンとした顔でブンドルを見つめ、それから愉快そうに笑った。
「異人が新撰組にね……そんなこと考えたこともなかった……誰もね……だって、異人がわたしたちのことを犬のように思っているように、この国の人間のほとんどが、内心では異人を追っ払ってやろうと思っていますからね。とくに、新撰組なんて、そんな頭の硬い田舎者の集まりですよ……おっと言いすぎ、言いすぎ……かな？」
「わたしは無理だと思うかね」
「さあ……なにしろ初めてのことですからね。でも、大変ですよ。新撰組は。……ちょっとしたいざこざや不始末で、すぐに処分されてしまう。今日の芹沢局長のようにね……あ、これは内緒だったっけ……」
沖田は、こめかみをぽりぽりとかいた。
「新撰組に、わたしを処分できる誰かがいるかな？」

ブンドルが言った。

「本気なんですねぇ……知りませんよ……わたしは」

沖田は面白そうにブンドルの顔をのぞき込んだ。

「本気だ」

ブンドルはきっぱり言った。

＊

芹沢鴨が近藤勇たちに暗殺され、ブンドルが京都に現れたその日は、通常の歴史によれば、文久(ぶんきゅう)三年（一八六三年）九月十八日だった。

第二幕

北の国から
あるいは……

「草鞋(シューズ)を脱いだ狼」

朝がやってきた。
レミーが目を醒ましたとき、海はおだやかに波打ち、昨日の荒れ模様が、うそのようだった。
レミーは、海面につき立った岩場に立ちあがると、海のむこうを見つめた。
鼻をくすぐる潮の香りには、なつかしい甘さがある。
……やっぱり、ここは地球なのかもしれない……
そのときだった。レミーは、いきなり、腰の拳銃、四十四口径マグナムを抜くと、後ろをふりかえった。
……誰かが見ている……
そう感じたのだ。
だが、海面をへだてて背後に切り立った崖には、何の姿も見つけられなかった。
……気のせいかな？……
レミーは首をひねった。
……そうよね、わたしの背中に目があるわけではないし、超能力があるはずもない普通の女

の子だもん……。後ろから誰かが見ていたってわかるはずないわ……
レミーは気を取りなおして、マグナムを腰へ戻した。
ともかく、この海面につっ立っている岩場から抜け出し、あの崖の上に登らなければ、どうにもならない。
レミーは、海面に飛び込むと、崖に向かった。
そして、崖下にへばりつくと、一歩一歩、慎重に登りはじめた。
遠目には切りたって見える崖も、近くにくればさまざまな割れ目があり、ロッククライミングの経験のあるレミーにとって、よじ登るのは、そう難しいことではなかった。
だが、レミーは、今、別のことが気になっていた。
やはり、誰かの視線を感じてしまうのだ。
……いったい、誰が？……少なくとも、仲間の誰かではない……。なぜなら、崖をよじ登っていくかいいいい弱い女の子？　を放っておくはずがないじゃないか……
といっても、レミーには悪意を持つ何者かの視線だとも言いきれない。
崖を登る今のレミーは無防備だ。
攻撃をするならもってこいのはずなのだ。
それが何も仕掛けてこない。
ともかく早く上へ登らなければ、崖にしがみついて両手のふさがったレミーには、銃も抜けないのだ。

レミーは、誰かの視線に追われるように、崖をよじ登った。
そして、崖の上に首を出したとき、
そこに、わなわなとふるえて、へたり込んでいる男の後ろ姿があったのだ。
「あっ！」
レミーは、思わず声をあげた。
この男がレミーを見つめていたに違いない。
だが、今は、レミーに背を向けている。
なぜ？　と考える余裕などなかった。
男の向こう側に、レミーをにらみつける二つの目があったのだ。
それは人間のものではなかった。
こげ茶色の巨大な熊だったのだ。
崖っぷちからレミーを見つめていた男の背後に熊が現れ、男は腰を抜かし、身動きできないでいるのだ。
熊にとっても、おそらく偶然、男に出会ってしまったのだろう。なぜなら男を襲うつもりなら、とっくに前足の一撃で男の体などばらばらにしていたからだ。
だが、今は違う。
男の後ろに、いきなりもう一人の人間、レミーが現れたのだ。熊に興奮するなというほうがおかしい。

低いうなり声をあげ、あきらかに熊は攻撃姿勢に変わった。
昔、アフリカで動物保護官をやっていたレミーにとって、取るべき手は一つだった。
……こんなとき、逃げたらやられる……
レミーは、男に小声でささやいた。
「ドント、ムーブ（動かないで）」
何語で話したらいいか分からないから、とりあえず英語だ。
そして、ゆっくりと男の傍らに立ち上がると、大きく両手を開いて、腰の銃を抜いた。
そして、手をひらいたまま男の前に立ちふさがり、熊をにらみつけた。
けっして熊の目から視線をはずしてはいけない……。レミーは、いままでどんな男にも向けたことのない、精いっぱいのきびしい視線を熊の目にあびせかけた。
そして、ちょっぴり後悔もしていた。
……やばい……。こいつは熊は熊でもヒグマだ……。熊の中でも、最も獰猛な種類の一つだ……。こんなにらめっこで、勝てるだろうか……
しかも、崖の上の木々の葉は紅く染まり、それは季節が秋なことを物語っている。
……熊が冬眠前の最も餌を食べなければならない時期なのだ……
レミーは本当に死んだふりでもしたくなった。だが、熊に出会ったとき、死んだふりをすればよいというのは、とんでもない俗説だ。
死んだふりをしたために、かえって頭をかじられ殺された人間の話を、レミーは何度も聞い

ていた。

今は銃を撃つのも危険だった。たとえ、レミーの四十四口径マグナムが熊の急所を直撃しても、断末魔の熊が、最後の力でレミーと男を引き裂くには、充分すぎる距離だった。

それほど、近いのだ。

レミーの顔に、冷や汗がにじみ出る。

息づまる数分がすぎた。

やがてレミーは、ヒグマの目からするどさが消えていくのを感じた。

……勝負よ、ここが……。甘い顔を見せちゃいけない……

レミーは、まばたきさえこらえるようにして、ヒグマをにらみつけ続けた。

眼球がとびだしそうで、痛いぐらいだ。

そのときだった。

いきなり、熊はくるりと背を向け、歩きだした。

無雑作なぐらいあっけない仕草だった。

熊は、ゆうゆうと茂みの中へ姿を消した。

……勝っちゃった……、にらめっこ……

フーッと肩の力を抜いたレミーは、それからちょっぴり首をかしげた。

……わたしの眼ってそんなに恐ろしいかな……

……これじゃ、お嫁に行けないのは、男が悪いからなんて言いわけ、通らないじゃない。困

ったもんよね……

溜め息をついたレミーの後ろから、男の声が聞こえた。

「やっぱり、おばさんは女郎子岩の生まれかわりだ。そうでしょ？」

……あん？　おばさん!?……

レミーはこけた。

……誰がおばさんじゃと、怒!!……

ムカッときたレミーだったが、

……ん？　あれっ？……

すぐに気分は変わってしまった。

なぜなら、男の発声した言葉は地球の言葉だったのだ。

……地球の言葉！　それも『おばさん』は、日本語のはず……

「ここ……、日本？……」

レミーは、男の顔をはじめて、しげしげと見た。

十四か十五の少年だ。

薄汚れたドテラのような着物を着ている。

「にっぽん……って？」

少年が聞きかえした。

「ここ……」

「ここはエゾ地だよ」
「エゾ地？」
レミーは、日本の地図を頭に浮かべた。
……そんな地名、日本にあったかいな……。そういや、二十一世紀初頭に絶滅したけれど、エゾシカなんて鹿の一種はいたわよね……。でも、ヒグマがいるってことは……、日本の動物分布地図でいくと……、ホッカイドー……
「そか……、ここは北海道のどこかなんだ」
「ホッカイドー？　それ、女郎子岩の国の言葉なの？」
少年が聞いた。
……どうも、話が見えんなあ……
「女郎子岩ってなあに？」
「えっ？　おばさんがやって来た、あの岩のことだよ」
……おばさんじゃないっちゅうに……。でも、ま……、ここは耐えて、状況を把握せねば
……
レミーは気を取り直して聞いた。
「あの岩が？」
それは、レミーが泳ぎついた、海面につき立った岩だ。
「あの岩は、昔、ヨシツネってお侍がこの土地に来たとき、村の娘と愛しあってさ……。で

も、ヨシツネは海を渡って、むこうの国へ行っちゃったんだ。で、その娘は、あの岩のところに立って待ち続けて、とうとう岩になっちゃったんだって……」

確かにいわれてみれば、その岩は女性の立ち姿に見えぬこともなかった。

「でも、その生まれかわりが、どうしてわたしなわけ？……」

「だって、おばさんも、あそこでじっと海のむこうを見ていたし、それに、熊をにらめっこで追っ払っちゃったでしょ。普通の女の人じゃ、とてもできないよ」

……そりゃまあ、普通の女は、めったにあんなことはしないわよね……

「でも、私は、普通の女の子なの」

それから、レミーはつけ加えるのを忘れなかった。

「おばさんじゃなくてね……」

「だったら、どこから来たの？」

……ウーン、時空を超えてなんて言っても、今度は宇宙人だなんて、よけいな混乱を招くだけよね……

「うん……。海のむこうの国……かな？」

「なんだぁ……。じゃあ、ロシアの人だね。そか、それで背も高いし、髪の毛も違うし、着物も違うんだね。で、船が難破したの？」

少年が聞いた。

「ロシア人じゃないけれど、ま、そんなところかな……」

少年は、何度も頷いて、
「だいじょうぶ、だいじょうぶ。きっと帰れるよ。ロシアの船はね、最近、このあたりによく来るもの。二年か三年もすれば、国へ帰れるよ」
少年は、海のむこうを見つめた。
「いいなあ……。おいらたち、誰もこの国から出ていけないんだもん。お役人様に捕まっちゃうもんなぁ……」
「お役人様に捕まる？……」
「うん。ほかの異人さんはこっちに来るのに……おいらは行けない……。だから、おいら、ここに来て、海のむこうを見るのが癖になっちまって……。まるっきり男の女郎子岩だよね……」
少年は、フッと微笑した。
「女郎子岩はともかく……」
レミーは、ズバリと聞いた。
「今、何年なの？」
「何年って？」
「西暦でも、いいえ、それがわからなければ、昭和や明治の元号でもいいわ」
「知らない……。おいらには、今が何年かなんて関係ないもん。畑仕事して、魚を採って、一年一年がすぎて、歳をとって死んでいくだけさ……。それより、異国の話を聞かせて下さい。

ジンギスカンって知っている？」
……ジンギスカン？……えと……、羊の焼き肉……、北海道名物・ジンギスカン料理……。
やっぱり、ここは北海道……。それもずいぶん昔の……。なにしろ北海道って呼び名がないほど昔の……。まいったなぁ……。どうしよう、わたし……
レミーが黙っていたので少年が続けた。
「ここから海を渡ったヨシツネは、海のむこうではジンギスカンって呼ばれたんだって」
「あ、焼き肉じゃないほうのジンギスカン!?　その人なら有名人。でも、日本人だって話は聞かないなあ」
それは、日本各地に残る義経（よしつね）伝説の一つだったが、フランス育ちのレミーが知るはずがなかった。
……ジンギスカンかあ……
レミーは溜め息をついた。
急にお腹が減ってきた。

＊

少年は、レミーを村に案内した。
村といっても、広場の回りに数軒の掘っ立て小屋があるだけだ。
小屋から出てきた村人たちは、レミーをなめるように見つめた。

無理もなかった。
レミーは、村人たちに比べて、目立ちすぎる肢体をしていたのだ。
村人たちは、男も女も、身長が百五十センチから、背の高い男でも百六十センチどまり……、
レミーの背丈から見れば子供だった。
おまけに、彼らの顔も、みんな童顔だった。
まるで、年寄りがどこにもいないようだった。
「若い人ばかりね」
少年は、こともなげに答えた。
「ここは気候も厳しいし、仕事もつらいもん。年寄りは生きていけないよ」
「それにしたって、これじゃボーイスカウトのキャンプだわ。若すぎるわよ、みんな」
「どうして?……ここの連中の寿命はいいとこ三十歳だよ」
……三十歳!……
レミーは、思わず指を三本だして、しげしげと見た。
……それじゃ、わたしがおばんと呼ばれても、しゃあないわけか……
レミーは、ポッと溜め息をついた。
少年は、レミーを自分の小屋に招いた。
出された食事は、ジンギスカンならぬ、小さな身欠きニシンの切り身だった。
少年は話を続けた。

「この女はね、十二、十三で嫁にいくんだ」
「十二、十三!?……」
「でないと、いい子が生まれないんだ。歳をとってからじゃ、母親の体が持たないもの」
「フーン」
レミーは、なんとなくわかる気もした。
昔の人間は、確かに平均寿命が低かった。
栄養が取れないのと、病気になったときの治療法が少ないのが原因の一つだ。
「もっとも、子供が生まれすぎても困っちゃうけどね……。おいらたちの村には、スギサクって名がついたのが十一人もいるんだ」
少年が言った。
「あなたも？　スギサク君？」
「おら、ヌギサクのななだ。一、二、三の七。まぎらわしいから順番をつけているんだ」
「スギサクセブンってわけ……。でも、そんなに名前が一緒だなんて、もしかして、名前の由来になる杉の林でも近くにあるの？」
「エゾ地には、杉の木はないよ。スギは杉の木の杉じゃないんだ。このあたりじゃ、一家に子供は二人以上いない。いても食べさせていけないからね。だから、三人目の子供は作りすぎ……。名前をつけるの面倒だから、作りスギをひっくりかえして、スギサクさ……」
レミーは、噛みしめているニシンの硬い切り身をなおさら硬く感じた。

「生まれすぎのおいらたちは村にはいられない。だから、村を出てここで暮らしている。ここにいるのはみんな、そんな連中さ。へへ、ひどいもんでしょ」
スギサクのなないは、顔をゆがめて笑った。
「もともとおいらたちのご先祖さんは、本土で食いつめてエゾ地にやってきたんだ。そして土地を耕して、やっと楽に暮らせるようになると、商人やお役人様たちがドッと入り込んできた。そして、お金にものをいわせて、どんどん土地や魚をとる権利を買いしめちゃった。おかげでおいらたちはこのざまだ。おいらたちにはもう、こんなやせこけた土地しかないんだ」
レミーは黙って聞いているよりなかった。
なんとかしてあげたいとは思うが、今は、レミー本人が、これから食べていけるかどうかもわからないのだ。
レミーは立ちあがって、スギサクのなないに言った。
「どうもありがとう。わたし、行くわ」
これ以上ここにいて、スギサクたちのわずかな食べ物を食いつぶしたくなかった。
「行くあてがあるの？」
スギサクのなないが聞いた。
「お役所の場所を教えて……。まさか、お役人様だって、一人ぼっちの異人さんを取って食おうとはしないと思うもん」
そのときだった。

カタカタ……、小さな響きをあげ、レミーの腕時計が鳴った。
それは、レミーが仲間たちに連絡をとろうとして、昨日から感度を最高にしていた受信装置だった。
……仲間が近くにいる!?……
レミーは小屋から飛びだしたが、すぐに立ち止まった。
時計の反応の主がわかったのだ。
それは、木の枝の間をのびていく電線だったのだ。
……こんなとこに電線があっていいわけ?……
「これ、いったい何に使うの?」
スギサクのななは首を振った。
「さあ、それは番所のお役人様が持ってきて、ほかの村の者には言うなというんだ。そして、もし線が切れるようなことがあったら、すぐに知らせるようにと言われたよ」
レミーの腕時計の反応が強まった。
明らかに電磁波が通っている。
……あの電線は、電信用だわ……。そして今、電線を流れているのは、モールス信号……
スパイ出身のレミーに、それがわからぬはずもなかった。
だが、信号を読み終えたレミーは、
「こんなことって!」

悲鳴に近い声をあげた。

——ハコダテヘ告グ、シャコタン地区ハ牛耳ッタ……ドクーガ——。

レミーもハコダテが北海道の都市であることは知っている。

だが……、電信の最後の単語——、

「ドクーガ」

それは、地球の二十一世紀初頭に、レミーたちが地球の運命を賭けて戦い、そして滅ぼしたはずの巨大な敵の組織の名称だった。

……その名が、どうしてここに……

レミーは、呆然と立ちすくむよりなかった。

*

「さあ、入ります！　丁か半か！」

つぼ振りが、盆の上のつぼを開けた。

「四六の丁！」

どよめきが起こる。

「またかよ……」

客たちの目は、一人の男に注がれている。

男の前には、駒と呼ばれる木札が山のようだ。

さっきからこの賭場で、この男、勝ちっ放しなのだ。

男の体格はほかの客を威圧するように、がっちりとたくましかった。

ラフな着流し姿だが、なぜか頭には手ぬぐいをかぶり、あごの下で結んでいる。

夜、町中で会ったら、泥棒と勘違いされても仕方のない格好だ。

男は何も喋らず、ただ黙々と賭け続け、ただの一度も敗けないのだ。

勝ちの喜びすら顔に出さないから、なおのこと客を白けさせ、胴元の反感をあおりたてている。

だが、男の本心は、顔とはまるで裏腹だった。

……へへへ……、たまんねぇなあ……。偶数、奇数のサイコロ博奕……。日本のやくざは、なんてまあ、イージーなギャンブルをやっちゃってくれるんだ。ポーカーや、ルーレットじゃ、こうは勝てねぇぜ……。ラッキー！　ラッキー……

男は、チラリとあたりを見た。

……ま、勝ちすぎて雰囲気やばいけど、こっちは明日をも知れぬ身の上だ。勝てるときには勝たせてもらおう。かせぎに追いつく貧乏なしって……、ね……

「三六の半……」

つぼ振りが、うんざりした調子で言った。

「またかよう……」

客のどよめきは、ほとんど溜め息だ。

いうまでもなく、またあの男が勝ったのだ。
たまらず、胴元が男の傍にすりよった。
「えれえ景気じゃありやせんか……。お客さん、見かけねえ顔だが、どこからおいでなすった」
男は、ボソリと答えた。
「ぶろんくす」
「ぶろんくす？　聞かねぇなあ……。どのあたりなんです？」
「にゅうようく」
「にゅうようく？　これまた聞かねぇなあ……。まさか風呂屋の倅ってわけでもねえでしょう？……で、その、にゅうようくってとこは、この清水港のどっちにあるんですかい？」
男は、しばらく黙っていたが、ぼそりと、
「みなみ……」
胴元は、ジロリと男をにらみつけた。
「みなみィ？　おい、ふざけるねぇ……。この清水港の南といえば駿河湾、そのまた先は黒潮流れる太平洋だ。手前、何者でぇ！　どこの手先だ！」
胴元は、男のえり前をつかんだ。
だが、次の瞬間、胴元の手首は逆にひねられている。
「イテテ。なにするんでい」

男は、くせのあるアクセントの日本語で言った。
「俺はただの客……、サイコロのほか、興味はねえ。続けろ！」
賭場は殺気立ったが、手を取られた胴元は動けない。
「仕方ねえ、続けてやれ」
胴元は、つぼ振りに目くばせをした。
「入ります！　丁か半か！」
男は、つぼ振りの手の動きから目を離さなかった。
そして、つぼが置かれた瞬間、男の手からキラリと光るものが飛んだ。
ザクッ！　乾いた音をさせて、つぼの上に見慣れない刃物がつきささった。
男は刃物を引き抜くと、柄の中に刃を閉じた。
とたんに、つぼはまっ二つ。さらに、中のサイコロも二つに割れた。
男は、サイコロを摘むと、客たちに見せた。
「サイコロに重り……イカサマだ」
「イカサマ？」
「イカサマだと……」
客たちに動揺が広がる。
胴元があわてて叫んだ。
「畜生、因縁つけやがって！　もう許さねぇ。叩っ切れ！」

客たちを押しのけて、数人のやくざが男を取り囲んだ。
男は、ニヤリと笑って、さっき投げた刃物をふところから取り出した。
やくざたちが、匕首(あいくち)や刀を抜く。
パチン！　男のナイフの刃が飛びだした。
思わず、後ずさりしたやくざの一人がわめいた。
「な、なんでえ、その見慣れねぇ小刀(しょうとう)は……」
「ジャックナイフ……」
それから聞き慣れぬ言葉が口からもれた。
英語だった。
「ヤクザのけんかは、東南西北(トンナンシャーペー)、どこの国も変わらねぇ。先手必勝……頭(かしら)を狙(ねら)え！」
いきなり胴元に飛びつくと、首筋にジャックナイフをつきつけた。
胴元は青ざめ、すくみあがり、動けない。
そのときだった。
賭場の板戸(いたど)がサッと開かれた。
大刀を手にした用心棒らしい三人の侍(さむらい)を引きつれて中年の男が入って来た。
「お若えの、お待ちなせえ！」
賭場にどよめきが起こった。
「親分！」

胴元が叫んだ。

胴元から親分と呼ばれた男は、侍の一人に言った。

「先生、お願いしやす」

黙って頷いた侍は、ナイフの男と胴元のほうへ、ゆっくりと近づいて来た。

侍の目に殺意が見える。

……やる気だ。胴元を殺しても俺とやる気だ。……こうなりゃ人質は無意味だ。……自分は自分で守るしかない……

男は、ナイフを胴元の首筋からはなして身構えた。

「親分！　すまねえ」

胴元は、親分に駆け寄ろうとした。

侍の刀が光る。

一瞬、胴元は、信じられないという表情をした。

続いて——。

「グワッ！」

叫びと血を吐き出し、盆の上に倒れた。

侍はナイフの男ではなく、胴元の胸に刀をつきたてていたのだ。

「先生、ありがとうござんす」

親分は侍に一礼すると、賭場中に響く声で、

「俺の縄張りでイカサマは許さねえ！」
それから、ナイフの男に深々と頭を下げた。
「お若いの、すまねえ。ここは俺に免じてかんべんしてくれ」
ナイフの男は頷くよりなかった。
これ以上の戦いは多勢に無勢、いかにも不利だ。
「ときに、にいさん、なかなかいい腕をしてなさるが……名をお聞かせ下せえ」
「霧隠（きりイがくれイ）……」
男はぼそりと答えた。
「にいさん、異人さんですね」
親分がずばりと言った。
「ばれちゃあ仕方がねえ」
男は頭を隠していた手ぬぐいを取った。
天然パーマ風の金髪——いうまでもなく、ゴーショーグン・チームの一人、キリー・ギャグレーだ。
「どうしてエイリアン（外国人）だと分かった？」
「異人さんを知っているやつなら、誰が見たって分かりやすよ。ただ、ここにいるやつらは、異人さんを見たことがねえんでね。にいさんが何者だか分からなかっただけでさあ……それに、にいさんのもらした言葉の中にゃ、メリケン語が混じっている」

「あんた、英語が分かるのか」
「見損なっちゃ困りやす。やくざとはいえ、あっしは、この清水港を取り仕切る山本長五郎、人呼んで清水の次郎長でさあ……港といえば、異国への門……異人さんの言葉の一つや二つ、ますたあしねえでどうしやす。うえるかむ、うえるかむ、にいさん。これも何かの縁……次郎長一家にしゅうずを脱いでくれやせんか？」
「しゅうずを脱ぐ？」
「草鞋を脱ぐってことでさ。無料宿泊おっけぇってこと。だいいち、こんなところに異人さんがうろついているってえのは、よほどのわけがあるんでしょう。例えば、軍艦を脱走したとかねえ……」
次郎長は、キリーの顔をのぞき込んだ。
「いや、俺は……」
「けっこう、けっこう。あっしゃ何も聞きゃしませんよ。博奕打ちなんてもんは、どこかに傷を持っている。それを黙ってかくまうのがやくざの甲斐性でさあ。ま、好きなだけ、いてくだせえ」
「だがな、損になることはしないのもやくざだ。何が狙いなんだ？」
次郎長はニヤリと笑った。
「これからのやくざは、国内、および異国情勢にも明るくなけりゃあね。そのための人材でさあ……」

「やくざが海外情勢をね」
「そういう時代が来まさあ……この国にもね」
「そういうことなら……」
キリーも、ニヤリと笑った。
「ギブ・アンド・テイクだな……」
実際、キリーは困り果ててもいたのだ。
キリーが時空のゆがみから放り出されたのは、富士山の見える茶畑の中だった。
「キャーッ！　赤鬼！」
それは、キリーと出くわしたかわいい茶摘み娘の悲鳴だった。
……赤鬼？　俺が？　そりゃないよ……
相手がキュートな日本娘だっただけに、キリーの女性専用自意識過剰（俺はもてるという思い込み）が受けたダメージは計りしれなかった。
もっとも、外国人を見たことのない日本人には、金髪で背の高いキリーを鬼と見間違えても仕方がないのかもしれない。
……やばいぜ。このままじゃ、女の子に逃げられるどころか、鬼退治で殺されかねん……
キリーは、夜を待ち、街道筋の旅籠の物干しから着物を失敬し、一応、自分としては日本人に変装したつもりになった。
……さて、次は金の工面だ……

人種のるつぼ・ニューヨークでやくざとして育ったキリーは、日本のやくざ言葉もよく知っていた。
やくざはやくざを知る。
キリーは動物的ともいえるやくざ勘で、次郎長の賭場に辿り着いたのだった。
かつて、ニューヨークでブロンクスの狼と恐れられながら、ドクーガを打ち破り、一時は世界的な英雄になったこともあるキリーは、今、日本のやくざ・次郎長一家に草鞋を脱ぐことになった。
「俺は、どこに行っても結局、足を洗えないのかね」
キリーは肩をすくめ溜め息をつくしかなかった。

第三幕

北の毒蛾(どくが)あるいは……

「桃の節句は血の色で——」

……ドクーガがどうしてこんなところに……

確かに、二十一世紀に滅ぼしたはずのドクーガが、この時代にいてもおかしくはないのかもしれない。

……ここが、本当に過去の地球なら……。けど、だとしたら、まいっちゃうな……。仲間に会いもしないうちから、よりによって、いちばんやばいのに会っちゃった、どうしよう……

しかし、レミーはすぐに思いかえしてみた。

……考えてみりゃ、わたしたちがケンカしてたのは二十一世紀なんだから、昔のドクーガさんが、なにをやっていようと、しかと、しかと……。ウン、さわらぬ毒蛾に、かぶれなしよね……

元動物保護官をしていたレミーらしい表現だった。

……それに、あっちさんだって、こっちを知っているはずないもんね……。それに決定しよう……。ウン……

レミーは自分にそう頷いた。

だけど……、ほかの仲間は、これを知ったらどう動くだろう。
レミーは、彼らの出方を考えた。
ドクーガに敵対していた真吾やキリーは、およそレミーと同じようにしらんぷりを決めこむだろう。
血の気の多い二人だが、自分の身に火の粉がかからない限り、喧嘩をするタイプじゃないはずだ。
でも、ほかの三人は元ドクーガの幹部だった。
ドクーガが消滅したからこそ、ゴーショーグン・チームに加わったのだ。
いまさら再就職する気はないだろうが、この時代のドクーガに興味を持つのは確かだろう。
とすれば、遅かれ早かれ、ドクーガの周辺に彼らがうろつくのは目に見えている。
やれやれ……。
レミーは、溜め息をついた。
結局、彼らと手早く接近するためには、ドクーガをマークするのが近道のようだ。
レミーは、スギサクのなないに振りかえった。
「ハコダテの方向を教えて……」
「ハコダテへ行くんですか？」
「うん、仲間に会える手掛かりその一だもん」
「でも、ハコダテって、ニセコ越えて、ト〜ヤっていう湖越えて、山をいくつも越えて……」

レミーは、肩をすくめた。
「皆まで言わず結構。早い話がどれぐらいかかるわけ？」
「早くは着けませんよ。行ったことないからわからないけど、雪が降るまでに着ければいいほうかな？……おまけに、熊やオオカミも出ますしね」
「ほとんど、秘境探検か……。や〜めた」
　レミーはあっさりと言った。
「でもって、シャコタンっていうのは遠いの？」
「シャコタンは、ここですよ」
「あらら、話をずいぶん遠まわりさせたみたい……。ねえ、そのシャコタンのお役人様の住所、教えてくれない？」
「じゃあ、案内しますよ」
「迷惑じゃない？」
「どうしてです？　おいら、おばさんに会えてうれしいんです」
……また、オバンか……。かんべんしてほしいんだけどな……
「だって、おばさんの住んでいた国のこと、もっともっと知りたいんです」
　スギサクのなないの屈託のない顔を見ていると、オバン呼ばわりもそれほど気にならなくなっているレミーだった。
……ま、あんまり、言うなというのもしつこいかもね……。人間、いつかオバサンになるん

だし……。この際、かわいいオバンぶりっこの練習でもしておこうか……
などと思ってしまうのだった。
レミーは、そんな自分に苦笑してから、真顔になって電信用の電線を見つめた。
電信があるとしたら、およその時代の見当がつく。
……世界で最初の一般向けの電報が始まったのが、確か、一八四三年、イギリス……。ついでながら、イギリスのベルさんの最初の電話が一八七六年……。えっ？　なぜ知っているかって？……えっへん……、こう見えても、レミーだって女の子……、電話大好き少女だったのだ……
いつもお世話になっている電話さん、その出生の謎？　ぐらい知っておいてあげるのが礼儀だと思うのだ。
なぜなら、レミー自身の出生にはわからないところが多かった。
だからこそ、子供のころのレミーは、ものごとの始まりや起源に、ほかの子供以上の興味を持つ少女だった。
……なにが役に立つかわからないものね……
レミーは、苦笑した。
ドクーガはいつの時代にも、その時代の科学の最先端を使って行動を起こす。
それが、アマゾンの奥地でも、アメリカのＮＡＳＡでも、場所は問わない。
とくに、未開の土地で最新の科学を見せつけて、原住民の人たちの畏怖の情をあおりたてて

支配するやり方は、ドクーガの最も得意とするやり方だった。
そんなドクーガが、電信を使っていながら、電話を使っていない。
ということは、一八四三年から一八七六年あたりまでのいつかということになる。
そして、スギサクのないながが、電信電線の使い方を知らないなら、このエゾ地と呼ばれる北海道地方が、まだ電信を知らない時代……、文化の普及率からいって、イギリスの発明が東洋の辺境、日本に伝わるまでの時差……ほぼ二十年として、今は一八四三年から一八六三年ぐらいのいつかということになる。
ほとんどレミーの推理は当たっていた。
その推理で、レミーが考えなければならないこと——、レミーは腰の四十四口径の銃の使える弾数を数えた。
六連発のその銃の、しかし、ポケットに入っている弾数は十発、あらかじめ銃のシリンダーに入っている六発と合わせても十六発しかない。
この時代では、それ以上調達しようにもどこにもないのだ。
ファイターのレミーとしては、自分の持っている弾数を知っているのは常識だった。
それにしても……。
かよわい女の子が……かな?……ともかく、この過去の、しかも未知の日本で生き抜くには少なすぎる弾数だった。

＊

海際の切りたった断崖を食いちぎるように、平坦な土地がわずかだけ波にさらされている浜があった。
その浜に、木造としては巨大な建物が建っている。
そして、その傍らに小さな小屋……。
「あれが、ビクニのニシン屋敷と、お役人の番所です」
スギサクのなが、い、丘の上から浜を指して言った。
「ビクニ？……」
「美しい国って書くんです……。でも、おいらたちにとっちゃ、美しくもなんともない……。土地の皆が苦労してとったニシンを全部、安い値で買い取っちゃう。それを、信じられない高い値で、内地の商人に売りつけちゃう……。あの屋敷は、金持ちで汚い商人たちの、溜まり場さ」
「それ、ドクーガさんの、とってもシンプルなやり方ね……。で、お役人様は、質素なお家に住んでいるみたいだけど……、マジ、そうなわけ？」
「な、わけないでしょ……。あれは、あくまで形だけの番所さ……。連中は、商人たちとべったり……。ニシン屋敷で、ぜいたくにやってるんだ」
「それもパターンね」

そのときだった。
カシャンという音がした。
レミーは、その音がなんであるか忘れる女ではなかった。
銃の撃鉄をセットする音だ。
レミーは、物も言わずに身をひるがえすと、背後の男に飛びかかった。
本来なら男としては、「女、何者だ」ぐらいの台詞は言いたかったのだろうが、そんな暇はなかった。
引き金を引く時間すらなかった。
それこそ、スギサクのなながい、なにが起こったか理解できないほどの瞬間に、レミーは背後の男の懐に飛びこみ、銃を叩きおとしていた。
「な……なにものだ……」
男が、やっと口を開いた。
「人の後ろでは、火気厳禁がエチケット……。お願いね」
そう言ってから、レミーはその男が青い目をしているのに気がついた。
「あなた、日本人じゃないのね」
「そう言うおまえは、ロシア人か?」
「だったら?……」
突然、木立ちの中から声がした。

「殺せ！」
瞬間、レミーはスギサクのななの体を抱くと、丘の上から転げ落ちた。
いままでレミーの立っていたところに、銃弾が無数に叩き込まれた。
「追え！」
丘の上で、日本語や英語やフランス語、ドイツ語……、さまざまな国の言葉が飛びかう。
レミーはスギサクのななに首を振りながら、言った。
「ごめん！　なんか、まきこまれちゃったみたい」
スギサクのななは顔色を蒼くしながらも、無理をして、笑ってみせた。
「いいよ、なにもない暮らしより、だいぶ楽しいよ……。でも、どうして使わないの？……」
「ん？……」
スギサクのななは、レミーの腰の四十四口径を見つめて言った。
「鉄砲……、それ、鉄砲でしょう？」
「経済観念が発達しているの……。だからって、やるときはやるわ！」
レミーはいきなり四十四口径を抜くと、スギサクのななの背後に向けて撃った。
凄じい音だった。
スギサクのななの後ろに現われた日本人の手から、ウインチェスターの連発銃がはじき落とされた。
「ウインチェスター？……」

大昔、アメリカではやった西部劇の映画で、ジョン・ウェインという俳優が愛用していた長銃だ。
でも、レミーの現れたこの時代では、かなり最新式の銃と思われる。
それでも、レミーの持っている四十四口径マグナムの威力に比べれば差がある。
レミーの銃は、高級アメリカ車のボンネットぐらいぶちぬける破壊力があるのだ。
ウインチェスターをはじき飛ばされた男は、その反動の凄さに腰を抜かしてしまった。
もとより、レミーは、その男を殺す気はない。手に持った銃を狙っただけだ。
……それにしちゃ、弾がもったいなかったな……
レミーはちょっと後悔して、落ちているウインチェスターを拾いあげた。
……こういうモンは、現地調達に限るわ……
ガチャン！……ウインチェスターのレバーを動かし、弾を装塡してみる。
「OK……。ほとんど西部劇……」
レミーのその動きを呆然と見ていたスギサクのないが、思わず呟いた。
「凄いです……、おばさん……」
「少年少女は真似ちゃいけませんよ、こんなことは……」
すっかりおばさん口調で、ニッコリ笑ってから、レミーは目の前の茂みにたて続けに三発、ウインチェスターの銃弾をぶちこんだ。
茂みの中に隠れていた男たちが、数人、悲鳴を上げて逃げていった。

それぞれ、さまざまな国の言葉を発していた。
ニシン屋敷の方角が騒がしくなり、手に手に銃を持った男たちが出て来た。
「ロシアだ、ロシア人だ！……」
そう、口々に叫んでいる。
レミーは、うんざりと首を振った。
「なにがなんだか、わっかんないけど……、ロシア人じゃまずいみたいね……」
「もっと、まずいよ……。追っかけて来るやつ、あんなにいっぱい……」
確かに、レミーたちのほうに走って来る男たちの数は、四十四口径と拾ったウインチェスター銃の弾数より明らかに多かった。
「どうする？……スギサクのないない君なら……」
「海へ……、魚は鉄砲持ってないもん」
「OK！　行こ！」
二人は、丘の下から海辺に突きだした岬に走り、崖っぷちから海へ身を躍らした。

＊

美国の岬から少し離れた岩場に泳ぎついた二人は、思わず溜め息をもらした。
「ようするに……、わたしがロシア人じゃいけないらしいわ……」
レミーが呟いた。

「変だなあ……。エゾ地に来る異人さんは、いままでほとんどロシアの人だったのに……」

スギサクのななが首をひねった。

「それにしちゃ……、あなたは気がつかなかったかもしれないけど、あの人たちの言葉……、フランス、イギリス、ドイツ、イタリア……もちろん日本語も……、ほとんど万国博だわ」

「そんなにいっぱい、国があるんですか？……」

「うん。それが……、どうしてロシアじゃだめなのかな……」

レミーは、今の北海道のおかれている事情を知らない自分がもどかしかった。

とはいえ、スギサクのななががそれを知っているとも思えなかった。

……どっちにしても、ドクーガ北海道シリーズにまきこまれたことには違いなかった。

「ごめんなさい……」

レミーは、スギサクのななを見つめた。

「これ以上、迷惑はかけられないわ……」

スギサクのななは、ニッコリ笑った。

「へへッ、もう遅いよ……。さっき追って来た人たちの中には、お役人様もいたよ。おいらのこと、もう見られちゃってる。家に戻ったって、つかまるだけさ」

「そか……」

レミーはどうあやまっていいのか、わからなかった。

「気にしないで」

スギサクのなな（い）が、明るく言った。
「おいら、こういうの、待ってたんだ……。まわりのことが、どかんと変わる、こういうこと」
レミーは何も言わずに頷いた。
いまさら何を言っても遅い。なぐさめを言ってもしようがない……、そう思うタイプの女だった。
……むしろ、先を考えたほうがいい……
「どうしようか……、これから……」
「うん……」
スギサクのなな（い）は、頷いた。
「どこに行っても、お役人様の手が回っちゃうよ、このあたりじゃね……」
「手が回らないのは……」
レミーは、頰（ほお）づえしながら海を見つめた。
スギサクのなな（い）も、海を見て頰づえをついて言った。
「それっきゃないと思うよ」
「船は？」
「ビクニのニシン屋敷にいっぱいあるよ……。だけど……」
「だけど……？」

「一艘だけ盗んでもすぐばれちゃう。ほかの船に追いかけられたら、おしまいさ」
レミーはそれを聞いて、クスッと笑った。
「ほかの船が、なくなったら？……」
「えっ？……」
レミーは、頷いた。
「ウン……。けっこう過激って言われてんだ、わたし……」

＊

その夜――。
ニシン屋敷で異国の男が、電信を打っている。
……シャコタン地区ニ、ロシア人ガ、潜入シタモヨウ……。指示ヲ頼ム……
すぐに、返事が返ってきた。
……タダチニ、ショブンセヨ……。ドクーガ、ハコダテ支部……
「と、いうことらしい……」
電信文を日本人の役人に手渡しながら、その男が日本語で言った。
「ロシアは、まずいのですか？」
役人が聞いた。
「今はまずい……。せっかくプチャーチンどもの目をエゾ地から本土に向けたのに、ここでロ

シアが必要以上にエゾ地に興味を持っては困るのだ……。エゾ地は、ドクーガの意のままに動いてもらわねば困る……。ロシアには、ハコダテの開港だけで我慢してもらわねばな……」
プチャーチンとは、アメリカのペリーとほぼ同時期、幕末のころ、鎖国をしていた日本に開国をせまったロシア人である。
結局、ハコダテ、シモダ、ナガサキの開港を日本に認めさせた人物だ。
だが、そんな人物の名をレミーもスギサクのなないも知るはずもなかった。
「ともかく、ドクーガの息のかかっていない西洋人に、エゾ地をうろつかれては困る」
そのときだった。
ドカーン！
いきなりニシン屋敷の天井と壁、床が揺れた。ニシン屋敷の銃器庫が爆発したのだ。
飛び散った火花は、ニシン屋敷のニシンの油も手伝って、さらに燃え広がった。
そして、船着き場にあった数十隻の船に燃え移った。
異国の男と役人はニシン屋敷から飛び出したが、そこはもう火の海だった。
なにが起こったか、事態を把握できる者はいなかった。
なんのことはない。
レミーが四十四口径の銃弾を、おとくいのスパイ術でニシン屋敷の銃器庫に忍び込んで、火薬の樽にぶち込んだだけなのだが、火を消すことに夢中なニシン屋敷の人々は、それが、ロシア人ならぬフランス人と日本人の混血の女性、レミー・島田の仕業だと知る人はいなかった。

そして、炎上した船の中で、一隻だけ、船出した小舟のあることも……。

「どこ、行こうか……」

小舟の上で、レミーが呟（つぶや）いた。

「どこでも……」

スギサクのなな（い）が、答える。

「この舟じゃ、異国までは行けないけどさ」

「ハコダテ行っても、その人たちに捕まるだけよね」

「どうしよう……」

「スギサクのなな（い）君が知ってる、この国の有名地ってどこかしら？……」

「エゾ地のほか、知ってる土地っていったら……」

「うん……」

「エドか……キョートかな」

「ふむ……」

両方ともレミーの聞いたことがある土地だった。

「どっちにする？」

レミーが、スギサクのなな（い）に聞いた。

「どっちでも……。両方とも、でかい町でしょ……。おいら、町に出られるんなら、どこでもいいや」

「だったら……」
レミーは、ちょっとだけ考えて言った。
「キョート……」
なぜなら、ゴーショーグンの仲間たちも、行くんならキョートという気がしたのだ。
……エド……昔の東京より、京都……。わたしたちって、日本に来るなら、そこらあたり、行きたいって思いませんか？……だから、京都……
「でも……」
スギサクのなないが呟いた。
「エゾ地からキョートって、どれぐらいかかるんだろう……」
知るわけなかった。もちろんレミーも……。
「だからって、こうなったら行くべしよ」
できるだけ気楽に、レミーは言ってみた。
津軽海峡を越えて、東北を通りすぎて、関東中部を歩いて行く……。いくら狭い日本でも、一年以上かかるなどと思いもしなかった。
レミーは、スギサクのなないに言った。
「もう、スギサクのなない君って呼ばなくってよさそうね」
「どうして？……」
「だって、ここ、海の上……。ほかにスギサク君の一も、二も、三も、いないもん。スギサク

君だけでいけるわよね」
「ほんとだ……。おれ、スギサクだけでいいんだね……」
いかにもうれしそうに、スギサクのななは微笑した。

＊

江戸で――。
将軍が住むという城の傍らの屋敷に通されて、いささか緊張している異人がいた。
外は、雪がちらついている。
「待たせてすまなかった。貴殿のおかげで、病も晴れたようだ」
初老の男が、背後からきてそう言った。
「それは、なによりです」
異人が、たどたどしい日本語で言った。
異人は、片目だった。それよりなにより、肩の上にカラスを乗せているのが、日本人から見れば異様だった。
「政治家は、なにかと、たいへんです」
異人が、しみじみと初老の男に言った。
異人は二十一世紀に、医薬品メーカーの社長でアメリカ大統領になったこともある男だった。
そう……、ゴーショーグン・チームの一人、時空を超えてこの国に現れたカットナルだ。

初老の男はカットナルに頷いた。
「確かに……。しかし、やらねばならぬときには、やらねばならぬこともある。異人の貴殿には、計りしれぬかもしれんが……。しかし、異人の貴殿に病を治してもらえるとは……。やはり、この国の門戸を開いたことは、間違いではなかったのだな……」
初老の日本人が言った。初老といっても、この時代の基準だ。まだ、四十なかば……徳川幕府の実権を握っている大老という職に就いている男……井伊直弼その人だった。
いうまでもなく、当時、鎖国をしていた日本で、多かった反対を押しきって、開国を強引に実現させた代表人物である。
「だが、そのために……」
井伊は、口ごもった。
「なにをやったのか知りませんが、くよくよ考えるのが、あなたの病気には一番悪い……」
「開国を反対する者どもを処分したのだ……。処分という意味がわかるかな？」
カットナルは肩をすくめた。
「そういうときは、どこの国でも、あの世行きの船が満員になりますな」
「さよう。だが、処分の数がすぎたのかもしれぬ……。夜な夜な、枕元に現れて恨みごとを言う」
「その代表格が、ハシモトとか、ヨシダとか、ライとか……」
「貴殿、存じておるのか？　あの者どもを……」

井伊が政策の反対者を片端から取り締まり、処分した事件、世にいう「安政の大獄」をカットナルが知るはずもなかった。
だが、カットナルも、それが井伊に処分された人物の名であることは見当がついた。
「あれだけ、あなたがうわ言で叫べば誰でも名前を覚えますぞ」
「うわ言？……そうか、わたしともあろうものがふがいない……」
井伊は、溜め息をついた。
「橋本左内、吉田松陰、頼三樹三郎……。わたしに反対しなければ、この国を背負う優秀な人材になったであろうに……。二十代や三十代の前半で死なねばならぬ……。わしを呪って化けて出るのは当然であろうな」
「医者の立場としては、そういうのをノイローゼと言いましてな。わが社で作った精神安定剤が一番です。イライラしたら、効きめ一発、カットナライザー……、いい薬です」
カットナルは、思わず自社の薬のＣＭコピーを口ずさんでいた。

*

カットナルが、時空のゆがみからこの世界に現れたところ……そこは小さな小島だった。
幸いだったのは、数日のうちに、その島を訪れたアメリカの蒸気船に救助されたことだった。
船員に聞くと、その島は小笠原諸島の硫黄島というところだった。
「あれが、硫黄島？」

硫黄島では太平洋戦争当時、日本とアメリカの間で大激戦があり、日本軍は全滅したものの、アメリカ側にも多大な犠牲者が出た。
二十一世紀では、アメリカにとって伝説化した戦場だといえた。
なにしろ、それ以後の戦争で、アメリカが勝った戦いはめったになかったのだから……。
激しい戦闘で島の地形まで変わったといわれていたが、カットナルが写真などで知る戦後の硫黄島の地形とこの世界で見た地形は、あまりに違っていた。
カットナルを拾ってくれた蒸気船の古めかしさも手伝って、勘の良いカットナルは、すぐにここが太平洋戦争以前の地球らしいということに気がついた。
だが、船員たちに自分が二十一世紀の人間だなどと言うほど、軽率ではなかった。
アメリカの政財界でもまれたカットナルは、人間の社会が新しいものや見ず知らずのものに、どれほど警戒と敵意を燃やすか、よく知っていたからだ。
カットナルは自分を、難破したアメリカ船の乗り組み員だ——と言い続けて、船員たちを納得させた。
カットナルを乗せた蒸気船は、日本のシモダに向かう軍艦だった。
だが、その途中、嵐で帆柱が折れ、船員たちの数名が負傷した。
そのうちの三人が、傷口から菌が入り、破傷風になってしまった。
傷が手足なら、切断すれば命を助けることもできるが、三人の傷は腹や胸だった。
死にかかっている人間を放っておくわけにはいかない。

……高価な薬じゃし、量も少ないんじゃが……
カットナルは、手持ちの、地球上の菌にならほとんど万能ともいえる殺菌錠剤を三人に与えた。
……ペニシリンでもいいんじゃろうが、そんな古くさい薬は持っとらんし……。ま、この際、サービスじゃ……
そして、もともと薬に縁が薄いこの時代の人間たちだ。たちどころに効果が現れ、数日のうちに三人は治ってしまった。
こうなると、カットナルは魔術師、いや医者の神様あつかいだった。
船がシモダにつくと、停泊中のアメリカ艦隊中に噂が広まった。
そして、ある日、幕府から密使がやって来た。
幕府の重要人物の重病を、内密に治してくれ――というのだ。
その重要人物が、井伊直弼だったのだ。

＊

井伊の不眠症と幽霊恐怖症は、カットナルの精神安定剤のお陰で、どうにか治まったようだった。
「ノイローゼってやつは、現代では、もっとも治りにくい病気でしてな。なにしろ、人の心の問題ですからな……」

カットナルは、自慢の薬の能書きを井伊に言おうとしたが……、
「すまんが、城に行かねばならぬ時間じゃ……。話は後に願いたい」
「今日一日は、休養したほうがよろしいぞ。不眠の連続で、まだ体力が回復しておりません」
「だが、本日は三月三日、桃の節句。異人の貴殿にはおわかりにならぬでしょうが、城中で特別な催しもありましてな……。大老という役目上も、休める日ではありませぬ」
「桃の節句ですか……？」
井伊は、庭に降り積もる雪を見つめて頷いた。
「さよう。だが、もう三月というのに雪が……。江戸では珍しい……。白い桃の日か……」
そう呟いて、井伊は出ていった。
だが、その日は、けっして白い日ではなかった。
井伊の屋敷のすぐ目の前、江戸城桜田門外に積もった雪は血の色に染まった。
登城中の井伊の行列に、井伊の反対派の暗殺隊が襲いかかったのだ。
異変を知った井伊の屋敷から、応援隊が門の前に飛び出していったとき、そこには行列を守っていた井伊方の十七人の死体と、首のない井伊の体が残っていた。
時に、万延元年（一八六〇年）三月三日──。
この桜田門外の変という暗殺事件から徳川幕府の崩壊が始まるといわれているが、この日、井伊の屋敷にいた片目の異人は、いつの間にか江戸から姿を消していた。
もちろん、そんな異人がいたことすら、記録に残ってはいない。

異人にとって不案内な江戸の町からいったい誰が、カットナルを連れ出したのか、そのとき、知る者はほとんどいなかった。

そして、同じように時空を超えて京都に現れたブンドルが新撰組に入隊した年が、文久三年（一八六三年）――実に三年の差があることに、まだゴーショーグン・チームの誰も気がついていなかった。

第四幕

土佐の乙女あるいは……

「竜は鉄砲(ピストル)がお好き」

ゴーショーグン・チームで、いつも、運の悪い役回りといえばこの男だろう。
北条真吾……。
真吾が時空のゆがみから飛びだしたところは、高い崖の端だった。
しかも、その片足は崖の外、宙に浮いていた。
……どうなってるんだ？……
そう思う間もなく、真吾の体は崖下に落ちた。
とっさに受け身の姿勢をとったものの、崖はあまりに高かった。
崖下に叩きつけられたとき、両足で鈍い音がした。
……やっちまった。足が折れたな……
次第に意識が薄れていく。
そのとき、かすんでいく目の前に、立ちすくんでいる女がいるのに気がついた。
「……ここは？……」
女は、とまどいながらも答えた。

その声を聞いたとき、真吾はもう気を失っていた。

「……コウチ……、トサの……」

＊

どれほど気を失っていただろう。
真吾が気がつくと、そこは、薄いせんべい布団の中だった。
着せられている服も、いつもと違う肌ざわりだ。
さらりとした木綿の感触――浴衣だった。
……なぜ、こんなものを俺は着ている？……
折れた両足には、にぶい痛みが続いて、身動きがとれなかった。
昔、国連の破壊工作員だったころの習性から、真吾は銃のありかをさがした。
枕元に、真吾の服がたたまれてあった。
その上に、愛用のレーザー銃も置かれている。
真吾は、部屋の中の様子をうかがった。
部屋の隅に、ぼんやりと行灯の明かりが揺れている。
行灯の傍らで、着物の女性が静かに縫い物をしていた。
真吾は、声をかけようとして、思わず口ごもった。
女のうなじが、あまりに美しかったからだ。

真吾は、女のうなじが、今日ほどあざやかに目に映ったことはなかった。
　そのわけが、真吾にはすぐ分かった。女のヘアースタイルが普通と違うのだ。このうなじを隠さないヘアースタイルに真吾は見覚えがあった。日本の時代劇で見た女性たちの髪形だった。
　……するとここは……
　そのとき女が、ふっと、真吾を見た。
　目鼻立ちが整った顔立ちだ。
　……レミーを時代劇に出演させて、もう少しだけ歳(とし)をとらせ、落ち着きがでてきたら、こんな女になるかもしれないな……
　真吾は、勝手にそう思った。
　女は真吾に微笑して言った。
「あ、気がついたのですね。よかった」
　あわてて起きあがろうとした真吾は、体の痛みに顔をしかめた。
「無理はなさらないで下さい。あなたのお怪我(けが)では、五日は動けません。動けば、折れた骨が、もとに戻らなくなります」
　言葉に少し方言があるが、確かに日本語だ。しかも、一生懸命、標準語を使おうとしているようだった。
　女は、真吾を支えて、静かに寝かせた。
「どこの国の方か存じませんが、治られるまで、ここにおられてかまいませんから……。わた

誠

くし、傷の手当てには、いささか心得もございますし……」
真吾は、崖から落ちたときに、女が「トサのコーチ」と言ったのを思いだした。
……トサのコーチ？　やはりここは日本の土佐、高知県なのか？　それも昔の時代の……
日本人とはいえ、真吾は生まれたときからドイツ育ちだ。昔の高知県のことをまったく知らない。だが、日本人が浴室などでリラックスしたときよく歌う、日本のフォークソング（民族音楽）の中に、土佐の高知の歌があるのは知っていた。
見ず知らずの土地で、そこの人間たちとコミュニケーションするには歌がいいことを、真吾は知っていた。
真吾は、そのフォークソングを口ずさんでみた。
「トサのコーチのハリマヤバーシで……」
女は目を丸くした。
「この歌を知っているなんて、あなたは土佐の方なんですか？」
「え？　いえ……日本人であるには違いないのですが……」
「では、なぜ、あんな異国の服を着ていらっしゃるんです？……。もしや、異国に行って来られた方では……」
「異国？……。ええ、まあ……」
時空を超えたなどと言っても、分かってもらえるはずもない。
「そんな方が、どうして土佐の高知などに……どなたか知り合いでも……」

「いえ、別に……」
女は、何かをさとったように頷いた。
「そうですね。それをむやみに口にしては、危険ですものね。ここは……」
「危険？……」
幕末の土佐が、外国人を排斥しようとする攘夷論者の溜まり場であることなど、二十一世紀のドイツ育ちの日本人、真吾が知るはずもなかった。
女は、真吾に言った。
「ご安心ください。ここにいれば安全です。ここにいるのはわたし一人ですし、この小屋を知っているのも、わたしと弟だけですもの」
「弟？……」
唐突に弟という言葉が出てきて、真吾はとまどった。
「はい、でも、弟は異国の方や、異国帰りの方を嫌う者じゃありません」
「で、あなたは？……」
「あ……乙女と申します」
「乙女？」
「はい、わたしの名前です」
「あ……名前ですか……そうでしょうね……」
美しいとはいえ、その女は、乙女と呼ぶには大人だった。おそらく真吾よりも年上の女だろ

う。なんとなく成熟した色香が感じられるのだ。
乙女は微笑した。
「乙女じゃ、いけませんか?」
「え?……いや、そんなことは……」
乙女は、真吾の額の汗をふいた。
「熱が出ていますわ……。さ、今日はもうお休み下さい。何も気にせず、ぐっすりと……」
真吾は、とりあえず、乙女の言うとおりにするしかなかった。
それほど、自分が重傷なのも分かっていたのだ。

*

乙女の看病で、真吾の傷は目に見えて回復していった。
「なぜ、初めて会ったばかりのわたしに、こうまでしてくれるんです」
真吾は乙女に聞いた。
乙女は、ふっと微笑して言った。
「たぶん……弟に似ているからかもしれません……。弟とは、子供のころ、このあたりの野山を駆けまわったものですわ」
「弟さんと?」

「子供のころは、遊び相手は弟だけでしたわ……。いなかったんです、わたしには、おつきあいして下さる人が……」
「はあ？　でも、それだけ……あのう……美しいあなたが、なぜ？」
真吾は、美しいなどという台詞を喋ってしまった自分に照れながら言った。
「美しい？　どこがです？」
乙女は、うつむいた。なぜか傷ついたようだった。
真吾は、あわてた。
「いや、ほんとうですよ」
「見えすいた嘘は、おっしゃらないで下さい。五尺八寸もある大女のわたしが、美しいはずありませんわ」
……五尺八寸？……
身長百七十五センチである。
けっして、真吾の感覚では大きいとは思えない。レミーだって、それぐらいの身長はある。
二十一世紀なら標準といったところだろう。
キョトンとした真吾に、乙女は——。
「おまけに、目も大きいし、鼻も高い……。こんなわたしがどうして……」
乙女は、いきなり立ちあがると、小屋から飛びだしていった。泣いているようだった。
真吾は、どうしていいのか分からず、傷で体も動かせず、布団の中でじっとしているよりな

かった。

……やっぱり、俺には、美しいなんて台詞は似合わないのか……

この時代の日本美人の基準が、二十一世紀といかに違うか。

平安時代の宮廷画や、江戸時代の浮世絵の美人がどんな美しさだったか。真吾は気づいていなかった。

*

真吾にからかわれたと思って、一時は気を悪くした乙女だったが、怪我人を放ってはおけないと思ったのだろう。

口数は少ないものの、看病はかかさずやっていた。

そもそも、真吾の基準では乙女は美しい女だった。

乙女を見つめる視線が、好意的でないはずがない。

いつの時代も、女性はそんな視線に敏感だ。

乙女の気持ちも、次第にやわらいできた。

乙女が、縫い物をしながら、ぽつりと呟いた。

「真吾さまは、変わった方ですね。異国にいらしたからかしら……」

「えっ？」

「女の方の美しさがお分かりになっていないんですわ。それでは、よい嫁御を見つけられませんよ」

乙女は、まるで弟をさとすような口調で言った。

「わたしなんか、大女の醜女でしょ。負けん気だけが強くなって、女だてらに弟と武術の練習までしたものですから、なおさらみんなから煙たがられて……。かといって、いい歳になって嫁に行けないなんて、世間体が悪いし……。結局、親に無理矢理、相手を決められて、嫁がされたんです。背が低くて、顔中あばただらけの、普通なら嫁の来手のないような医者のところへね」

真吾は、呆然となった。

……人妻か……乙女さんは……

「でも、逃げたんです、わたし……」

「逃げた？」

乙女は、ぽつり、ぽつりと事情を話し始めた。

乙女の夫は、自分より背の高い妻が気に入らなかった。

劣等感のかたまりだった夫は、毎夜、毎夜、乙女の醜さをののしり、いじめ抜いた。

乙女はたまらず、家出をした。

といって、家の体面上、夫が気に入らないからといって、簡単に実家に帰れる時代でもない。

そこで、昔、弟と野山を駆け回ったとき、遊びで作った小屋にやってきたのだ。

「結局、弟と過ごしたここだけが、わたしの落ちつけるところなのかもしれません」
「弟さんは今？」
「めったに土佐には帰って来ません。尊皇とか攘夷とか、妙なものにうかれて、日本中を飛び回っています。だから、わたしもここでは一人です」
真吾は、乙女を見つめた。
真吾は、ふっと思った。
……年上の女……人妻……
真吾は、恋愛体験は何度もあった。
そればかりか、二度も結婚し、二度、妻に死なれている過去がある。
それでも、恋愛には、いつまでたってもうぶなところのある男だった。
……だが俺は、出会った女をみんな不幸にしている。今度も、きっと、そうなる……
真吾は迷っていた。
もとより、乙女は自分に自信がなかった。
だから、真吾がそんな気持を抱いていることを、考えられなかった。
そして、二人の間には何もないまま、時がたった。

＊

真吾の傷がほとんど全快したある日のことだった。

「お〜い、姉さん。わしじゃ、わしじゃ。いるんじゃろ。いるんじゃったら答えてくれ」
小屋の外から男の声がした。
小屋の扉がいきなり開くと、いきおいよく大柄の男が入ってきた。
ゴツン、にぶい音がした。
「イテテ……まっこと田舎は、天井が低うてかなわんぜよ……」
男は、入口で頭をぶつけたのだ。
それから、眼を細めて小屋の中を見回した。
どうやら近眼らしい。
そして、真吾を見て、さらに目を細め——、
「おまん、誰じゃ？」
それから乙女の顔を交互に見て、ニヤリと笑った。
「おっ、姉さん。そういうことじゃったんか……。なら、けっこう、けっこう。男がいたんなら、わしゃ邪魔せん。どんな男じゃって、今の亭主よりゃ、ましじゃき。なら、わし、行くぜよ」
「そういうんじゃなか……」
乙女が、ほほを赤らめた。
「かくさんでもいい。姉さんとわしの仲じゃ、誰にも言わんぜよ」
真吾が、乙女に聞いた。

「弟さんですか」
乙女のかわりに、男が答えた。
「わし竜馬（りょうま）といいます。土佐藩の坂本竜馬。乙女姉さんと駆け落ちしてくれて、ありがたいと思っちょります」
竜馬は、ピョコンと頭を下げた。
「違うち、ほんにおまんはそそっかしいのう……」
乙女も弟と話すときは、方言が出てしまうようだった。
「こん方は、異国帰りの方でのう」
「異国帰り？」
竜馬の目が好奇心で光った。
「北条真吾です。お姉さんには、大変お世話になりました」
竜馬はそれには答えず、腰を降ろした。
「異国ってどちらじゃ」
「ん？　ま、ドイツ……西ドイツですが……」
「ドイツ？　聞かんなあ……なら、アメリカについては？……」
「行ったことはあります……」
竜馬は、たたみかけるように聞いた。
「南北戦争を知っているかのう……」

「知っているには、知っていますが……」
　真吾は、口ごもった。
　今の正確な年号が分からない限り、下手なことを言えば、この時代では未来を予言してしまうことになる。
「どっちが勝ちそうかのう。南か北か……これからの日本にゃ、必ず影響が出てくる思うとるんじゃ、わしゃ」
「たしかにアメリカがくしゃみをすると、日本がカゼを引くってことわざがありますね。いささか古いですが……」
「古うない。古うない。まさに今を表すことわざぜよ。北条真吾先生、今夜は飲もう。世界を語り合おうぜよ。今夜は、わしゃ、土佐最後の夜でもあるしの」
　乙女が目を丸くした。
「土佐、最後の夜？」
「わしゃ、もう土佐はうんざりじゃ。勤皇(きんのう)だ攘夷だと言ったところで、結局は藩内の勢力争いじゃ。身内で殺し合いばかりしちょる」
　そのころ土佐藩は、尊皇(そんのう)攘夷論をめぐって、暗殺事件がしばしば起こっていた。
「わしかて、いつ殺されるか分からんぜよ。まっことやつらは小さい、小さい。考えが狭い。わしゃ、こんな藩は、やめちゃる。わしゃ、今夜限り、脱藩するぜよ」
「脱藩？　そんなだいそれたこと……！」

乙女が、思わず声をあげた。
竜馬はこともなげに言った。
「だから最後にこうやって姉さんに会いに来たんぜよ。そうしたら、家出したちゅうし……。しかし、この小屋に来てよかったぜよ。おかげで、この先生にも会えたしのう」
竜馬は屈託なく笑った。
その夜——。
竜馬は熱っぽく日本のこれからを語った。
真吾は、そんな竜馬がまぶしかった。
たとえ国連とはいえ、破壊工作員として育てられた真吾にはない情熱だった。
国連のため、世界のためといわれていても、どこかしらいけて戦っている部分があった。
だが、竜馬という男には、この国と自分自身の未来を信じきっている部分があった。
……生きる時代の違いなのかな？……
とも思う。
……この時代に生きていたら、この俺も熱くなれたのかもしれない……
真吾は、ふとそう思った。
いつの間にか、床の上にはとっくりがいくつも転がっている。
土佐の酒飲みは豪快だ。酔いつぶれるまで飲み続ける。
いつもは禁酒中の真吾も、今夜だけはその張り紙をとることにした。真吾はもともと酒を飲

みだしたら底のないタイプなのだ。
竜馬と乙女――。
この二人と語り合う酒は、何年ぶりかの酒をいっそう旨くした。
どれほど飲んだことだろう。
突然、乙女が叫んだ。
「わたし、別れちゃる！」
「あん？」
真吾と竜馬が乙女のほうを向くと、トロンとした酔った目で、しかしきっぱりと言った。
「竜馬が命がけで土佐藩と別れるんなら、わたしだって亭主と別れちゃる。逃げかくれするのは止めじゃ。出戻りと言われようと、後ろ指さされようと離婚しちゃる！」
竜馬が拍手し、はやしたてた。
「いいぜよ、いいぜよ。姉さん、別れちまえ。よし、わしが離婚祝いに歌を歌っちゃるき」
竜馬は、ヨサコイ節を歌いだした。

〽土佐の高知のはりまや橋で
　坊さん　かんざし　買うを見た
　ヨサコイ　ヨサコイ……

真吾は、この日本のフォークソングが、これほど胸にしみじみと聞こえてきたのは、初めてだった。

＊

夜更け――真吾は、ふと目を醒ました。
竜馬は酔いつぶれていた。
だが、乙女は、行灯の傍らに座って縫い物をしている。
「まだ、起きているんですか？」
乙女は黙って縫っていた着物をたたむと、真吾に向かって深々と頭を下げた。
「真吾さま、お願いがございます」
「なんです？　頭を上げて下さい」
乙女は頭を上げ、真吾に言った。
「竜馬は偉そうなことを言っていますが、どらんのようなお調子者です。口を開けば、異国異国と言っていますが、異国の言葉をろくに話せるわけでもありません。どうか、あの子にいろいろ教え、見守っていただきたいのです」
真吾は、すがるように見つめる乙女の瞳を見ると何も言えない。
……乙女の中は、弟、竜馬への思いでいっぱいなのだ……
「分かりました。わたしのできることがあれば、なんでも……」

……竜馬のためだけでなく、あなたのためにするんです……

真吾は、そう言いたかったが、口には出せなかった。

「どうぞ、これをお召し下さい」

乙女は、着物を前に出した。

「真吾さまのためにお作りさせていただきました。異国の服では、この国を歩くには、なにかとご不便でしょう。失礼とは思いますが、お召しいただければ幸福でございます」

乙女は、真吾に着物を着せた。

ぴったりだった。

乙女は呟いた。

「まるで竜馬を二人、見るようです」

確かに背丈の低い日本人の中で、ひときわ背の高かった竜馬と並べば、似ているといえないこともなかった。

……竜馬が二人か……

乙女の竜馬への愛は、男女の愛とは違う。

そうは思っても、真吾は失恋したようなほろ苦い気分にさせられるのだった。

＊

次の日の朝、乙女の心づくしの粥（かゆ）を食べた真吾と竜馬は小屋を出た。

そのときだった。
待ちかまえていたように侍が現れた。
五人いる。
侍の一人が、竜馬に言った。
「坂本竜馬だね」
竜馬は後ずさりして答えた。
「だとしたら……」
「藩の中には、おまんの脱藩を黙って見逃すことのできぬ方々がおってのう」
「天誅！」
いきなり、侍の一人が斬り込んできた。
一瞬、竜馬の刀が侍の刀を受けとめた。
「早くも、お迎えか……。しかし、なめたらいかんぜよ。わしゃ、こう見えても、北辰一刀流の大目録皆伝じゃき……」
ほかの侍も刀を抜いた。
竜馬は、頭をかいた。
「とはいったものの、五人は数が多すぎるのう。ちと、卑怯ぜよ」
「天誅に卑怯の文字はない」
侍たちは、じりじりと近づいて来る。

「困ったのう。わしの刀は、三人以上斬ると刃こぼれを起こすき」
真吾は、ふところの中から、レーザー銃を抜いた。
「数をこなすなら、これしかないな」
竜馬は目を輝かした。
「あ、それピストルじゃのう」
「ま、似たようなもんですが」
竜馬は、侍たちに胸を張った。
「おまんら、いくら田舎（いなか）人斬りとはいえ、小型鉄砲を知らんもんはいまい」
「卑怯な……」
「なにが卑怯じゃ。今はもう刀の時代じゃないぜよ。ピストルの時代じゃ……。さ、わしらの前から消えちくれ。わしゃ、無駄な血は見とうない」
侍たちは、悔しそうに刀を引いた。
そのときだった。
「坂本さん。人斬りどもはしつこい……。殺せるときには殺しとかにゃ、こっちがやられる」
小屋の陰から、薄汚ない着物を着た男がフラリと現れ、侍たちの前に立ちふさがった。
「人斬りは、人斬りにまかしちょけ……」
男は、侍たちの真ん中に駆け込むと、刀を抜いた。
あっという間もなかった。

五人の侍は腕や足を斬られ、ある者はうめき声をあげてうずくまり、ある者は刀を支えにしてかろうじて立っていた。
男は、ひやりと笑った。
「坂本さん。五人の敵を一本の刀で倒すときにゃ、まず敵の動きを止め、それから、刀で斬るんじゃなく、刀でぶっ叩くんじゃ」
男は、傷ついた五人の侍の一人に近づくと、刀を叩きつけた。
竜馬が叫んだ。
「以蔵(いぞう)、止せ！」
「以蔵？」
真吾が聞いた。
「土佐勤王党の岡田以蔵、人斬り以蔵といって、ムチャクチャなやっちゃ」
以蔵は、竜馬の声にも耳を貸さない。
もはや抵抗する力もない侍を、ずたずたに斬っていく。
「ひどい。ひどすぎる……」
真吾はうめいた。
同じ殺すにしても、以蔵のは、明らかに殺しを楽しんでいる。
「止めんか！」
竜馬が再び叫んだ。

「止めん！　俺は坂本さんを守れと武市さんから言われちょる。それをやるだけだ」
　武市とは、土佐勤王党という尊皇攘夷の過激派を結成させた人物だ。
「確かにわしゃ、武市とは親友じゃ。だがこんなことまで頼みゃせんぜよ。以蔵、おまんは、わしを守っとるんじゃない。おまんは、人斬りをしとるだけじゃ」
「俺は……俺は、人斬り以蔵だっ！　それが仕事だッ！」
　以蔵は、さらに興奮して、虫の息の侍のとどめをさそうとした。
「止せ！」
　真吾は、たまらず以蔵に体当たりした。そうでもしなければ、惨劇が終わりそうになかった。
「なにをするかッ！」
　以蔵は、真吾に斬りかかった。
　かろうじて身をかわした真吾は呟いた。
「この男、敵味方の区別もつかんのか」
　以蔵は、一つ憶えのような台詞を続けた。
「俺は、坂本さんを守れといわれた。それ以外は何もいわれていない。邪魔をするやつは、誰であろうと斬る」
　以蔵は、突っかかって来る。
「狂犬だな……これじゃ」
　真吾は、レーザー銃を抜いた。安全装置をはずす。だが思いなおした。

……相手は刀だ。レーザーでは不公平だな……
真吾は、銃を捨て、倒れている侍の刀を取った。
突っ込んで来る以蔵の刀を受けた。
西洋のサーベルの使い方だ。
だが、一撃、二撃、以蔵の力は強い。
傷の癒えたばかりの真吾は、よろけた。
「いいかげんにせい！」
竜馬が、以蔵の刀を払った。
以蔵の目が血走った。
「このッ！　死ね！　死ねッ！　みんな死ねッ！」
以蔵は、刀を振りまわした。
もう竜馬も真吾もなかった。
めったやたらに、二人に斬りかかる。
真吾と竜馬は、呆然と顔を見つめあった。
「いかん。この男、どこかが切れちまった」
「どうにもならんぜよ」
そのときだった。
「止めなさい。止めないと……」

乙女だった。
先刻、真吾が捨てたレーザー銃をかまえている。
以蔵は、乙女に振り向くと刀を振りあげた。
「止せ！」
真吾が叫ぶ間もなく、乙女は引き金を引いた。
レーザー光線が、ほとばしり出た。
以蔵の刀は、一瞬のうちに熔けた。
さらに背後の林の杉の木が、三本同時に、まっ二つになって倒れた。
乙女は、ぼんやりとつっ立っている。
竜馬も以蔵も、ポカンと口を開けている。
真吾は乙女に駆け寄ると、銃を取り、安全装置をかけた。
「この時代には、まだ向かない……」
真吾は、銃をふところに入れた。
そのとき、つきものが取れたように、以蔵がへたり込んだ。
「こんなことが……あっていいのかのう」
竜馬は、ニヤリと笑って、以蔵の肩を叩いた。
「うむ、以蔵、もう刀の時代じゃない。これからはピストルの時代ぜよ」
以蔵は、思わず頷くだけだった。

＊

真吾と竜馬は、乙女にもう一度別れを告げると、国境へ向かう街道を進んでいった。
振りかえると、数十歩離れて以蔵がついてくる。
「まだ、わしを守る気かの……」
以蔵はかぶりを振った。
「それともまた北条真吾先生に、喧嘩(けんか)を売る気かいの？」
以蔵は、それにもかぶりを振った。
竜馬は、にやりと笑うと、それではついて来いとでもいうように首を振った。
以蔵は、二人につかず離れずついて行く。

＊

坂本竜馬の土佐藩脱藩は、文久二年（一八六二年）三月のことだった。
そのときから、竜馬は信じられないほど精力的に日本中を歩きまわった。
まるで、竜馬が二人いるかのように——。

第五幕

祇園の密会あるいは……

「有名人登場！」

新撰組が、勤皇の志士たちと、日夜、血の海を降らしている京都――。

時は文久三年（一八六三年）十一月――。

それは、ブンドルが時空を超えて京都に現れ、新撰組に入隊した日からわずか二カ月後のことだった。

冬の訪れを知らせるからっ風が、京都、祇園の狭い路地を吹き抜けていく。

あまり一流とはいえぬ舞妓たちの置き屋が密集する路地の奥に、町医者、勝怒庵の住まいがあった。

その格子戸を開けて、背の高い体格のがっちりした二人の男が入っていく。

坂本竜馬と真吾だ。

いや、もう一人、数歩遅れてついてきた薄汚れた着物の男が、勝怒庵の入口にしゃがみ込んだ。岡田以蔵だ。

どうやら、土佐を出てから一年半以上、この三人は、つかず離れず、つるんできたらしい。

竜馬は、格子戸の奥の暗がりを、目を細めて見つめてから言った。

「勝怒庵さんのお宅かのう……」
誰かが眠っていたらしいふとんがむっくりと持ち上がった。
「だったら、どうした。わしゃ、祇園の舞妓専門、産婦人科およびそのほかもろもろ、いずれにしろ女専門の医者じゃ。野郎にはあまり用のない医者じゃが……」
「女は海……というではないか……。わしゃ、海が好きじゃき、まんざら用がないわけでもあるまい」
竜馬が、ニヤリと笑って答えた。
はた目には意味のわからぬ会話だが、どうやら合言葉だったらしい。
ふとんの中から、男が顔を出した。
「どなたかな？」
「竜馬、坂本竜馬……、勝海舟先生のお呼びでうかがった」
「竜馬？　おぬしが？……」
ふとんの中の男はぽかんと口を開けて、二人を見た。いや、二人を見ているのではない。真吾のほうを、まじまじと見ているのだ。
それも、片目で――。
クワッ！　部屋の隅で何かが鳴き声をあげた。大きなカラスがそこにいた。
ポカンと口を開けたのは、真吾も同じだった。
「カットナル？」

「真吾か？……」
二人は同時に呟いた。
「どうして、こんなところに……」
竜馬が目を丸くした。
「ありゃ？　おまんら、知り合いか？」
「ん、ああ……異国で、ちょっとな……」
「ふうん、地球は広いようで狭いのう。異国の知り合い同士が、こんな小さい日本の、おまけにせせこましい京の街で会おうとはのう……。ま、だったら話は早い。北条真吾先生を紹介する手間がはぶけたぜよ。勝怒庵殿……、さっそくだが、みなさんはお見えかの？」
竜馬という男は、頭の回転が早いというのか、そそっかしいというのか、ひさしぶりに出会った真吾とカットナルの感慨など飛びこえて、話を先に進めていく。
「え？　それはすでにお見えだが……」
「では、では、会わせていただこう」
竜馬は、靴を脱ぎ始めた。長崎で手に入れた異国の皮靴だ。
カットナルはキョトンとその靴を見つめ、真吾の足と見比べた。
真吾は、草鞋を履いている。どっちが異国育ちかわからない。
「なにやら、えらくミスマッチじゃね……」
「いや、これからは靴の時代ぜよ」

竜馬は、こともなげに言った。
真吾は、仕方のない弟分だとでも言いたげに苦笑した。
「カットナル……いや、勝怒庵殿……。ミスマッチは俺たちかもしれん。われわれのつのる話は後にして、竜馬殿たちの話を続けよう」
「ん、ああ、そうじゃの……。こちらへ来るがよかろう」
勝怒庵は、裏の狭い庭に面した土蔵に二人を案内した。
土蔵の扉を開けたとたん。
カチッ！
刀の鯉口を切る音がいくつもした。
「なにやら、ぶっそうじゃね」
思わず身構えた竜馬と真吾に、土蔵の奥から声がした。
「ま、落ちつけ、落ちつけ……。諸君、こんなことでびくついておっては、日本はどうにもならんぞ」
竜馬と真吾が土蔵をのぞくと、数人の男たちが座っていた。
どの男も、薄汚れた浪人姿だ。
声の主が、竜馬に言った。
「待っていたぞ、竜馬……。これで一応、頭数はそろったな」
「勝先生……、頭数はそろったといったとて、これがこれからの日本を動かす男たちかのう

……」
どの男たちも、お互いにギラギラとした敵意をみなぎらしている。
刀を抜きこそしないものの、手からは離そうとしない。
「なんか雰囲気、暗いぜよ」
勝と呼ばれた男は苦笑して、
「まあ、無理もなかろう。この中の誰と誰が殺し合いを始めても仕方のない間柄だからのう」
「さよう、勝さんの声がかからねば、誰もこんなところにはこん」
小柄で顔色の悪い男が言った。
「高杉はん、おいどんだって同じでごわす」
小太りの男が頷いた。
「はあ、おまんが長州の高杉晋作……。で、あんた、薩摩の西郷どんかね」
竜馬が目を細め、二人の顔をのぞき込んだ。
「で、おまんらは……?」
竜馬は、ほかの男たちを見た。
「桂小五郎です」
「福沢諭吉です。中津藩の……」
気の弱そうな男が、最後にぽつりと言った。
当時、倒幕の原動力になった薩摩、長州、土佐に比べて目立たない中津藩だっただけに、気

がねしたのかもしれない。
だが、真吾やカットナルにとって身近だったのは、この男だけだった。
……これが、一万円札か……
だが、竜馬は近眼の目を丸くして言った。
「はあ……、いわゆるオールスターじゃね……。さすが、勝先生、よくこれだけ集めた。新撰組や見廻組が、この場を見たらぶっとぶぜよ」
勝海舟……、当時の幕府軍艦奉行は微笑した。
「さよう。いわば、われわれは、それぞれ敵味方……。薩摩、長州、土佐同士とて、けっして仲がよいとはいえん……。この会合は、あってはならない会合だ。だから、このように目立たぬせせこましい場所に集まっていただいた」
「そりゃ、おいどんも望むところじゃ。こんなところを藩の誰かに見られたら切腹もんじゃ」
西郷が言った。
「しかし、祇園の真ん中にいて、酒も飲めんとはな」
舌打ちしたのは高杉晋作だった。
「それは、個人的にお願いしたい。今日、お集まりいただいたのは、急を要する用事だからだ。幕府、諸藩を超えた大事なのだ」
一同に緊張が走った。
「わしは、諸君を、ただ単に所属する藩だけ大事に考える人たちとは思ってはおらん、この国、

この日本の今後を考える人たちだ」
「かいかぶってくれるやつが多くてのう。おかげで、同じ藩のやつからも狙われて、命がいくつあっても足らんぜよ」
竜馬が明るく言った。
一同に苦笑がもれた。
誰もが、同じ気持ちにさせられていたのだ。
若い彼らが、いつもぶつかっている問題だった。藩が大切か……、国が大事か……。そして、藩のスケール以上のことを考えると、必ず、保守的な立場の人物から妨害が入った。
ここに集まった人々は、幕末の動乱の中でも、藩を大切に思う一般の侍たちにとっては、少しはずれた危険人物たちだったのだ。
「だからこそ、集まっていただいた。また、そうでなければ、幕府側の私が諸君を呼んでも集まってこないだろう」
「能書きはけっこう……。今夜は、女のひざの上で酒を飲みたい。話は早めに願います」
桂小五郎が言った。
「うむ」
勝海舟は、一同を見渡した。
「万延元年、今から三年前のことだ。井伊大老が、桜田門外で暗殺されたことはよくご存知だろう。そのために幕府の体制ががたがたに崩れだしたのは確かだ。私はそのとき、咸臨丸とい

う船でアメリカに向かっていた。私が江戸にいたら、大老を殺させはしなかったと思うと、今でも残念だ」
高杉晋作がチラリと勝海舟を見て、言った。
「その井伊が安政の大獄で俺の先生、吉田松陰を殺したことも忘れないでほしいね」
「私情、藩の状況は離れて聞いて欲しいのだ。井伊大老の屋敷から江戸城まではわずかの距離だ。しかも当時の状況から暗殺の動きがあることを知りながら、なぜ殺されねばならないのか？　おまけに、暗殺と呼ぶには、あまりに派手な立ち回りの末だ。目立ちすぎだとは思わぬか？」
竜馬が続けた。
「さらに暗殺を企てたのは、後でわかったことにしろ、幕府側の水戸藩の人間だった。これじゃあ、幕府の体制ががたがただと素人だって思うじゃろ」
「なにを言いたい？」
高杉が聞いた。
「井伊をむざむざと殺し、今の混乱を招いた何かがいるということだ。もちろん、それは幕府の中にも、そして諸君の藩の中にもだ」
竜馬が続く。
「確かに、異国がこの国にやってきたのは、時代の流れかもしらんぜよ。しかし、その影響で、わしらは人を殺しすぎてはいないか？　今後、異国とつきあうにせよ、戦争するにせよ、優秀

な人材をむざむざ暗殺という名で消してはいないか？」
「待てよ。安政の大獄もそうだというのか？」
高杉が竜馬を見た。
「井伊さんは、悔やんでいましたよ。あの事件で死んでいった人のことを……」
カットナルが呟いた。
「確かに、井伊大老が吉田松陰たちの処刑を決断していることにはなっている」
勝が呟いた。
「だが、井伊さんが決めたことなら、あとで後悔などするだろうかな？　政治家は、一度決めたことを後悔するほど、ヤワな神経は持っていませんぞ、まともな政治家ならね」
元政治家のカットナルが、胸を張って言った。
「では？……だとしたら？」
高杉がそう言って、勝の顔を見すえた。
「井伊大老が気づかぬうちに、何かの力が働いた。それに気づいたとき、井伊大老は暗殺された。そして、この混乱が始まった」
勝が、唇をかみしめて答えた。
「それを仕組んだのは、アメリカか？　イギリスか、フランスか……。それともロシアか？……」
高杉がたたみ込んだ。

「わかりません」
　福沢諭吉が口を開いた。
「わたしは異国へ行って事情を見てきました。西欧諸国がアジアを狙うとしたら、まず清国です。ごらんください」
　福沢は世界地図を広げた。
　それは、ヨーロッパ製の世界地図だった。
　大西洋を中心にした地図では、日本は片隅の小さなしみのような国でしかない。
「これが日本です。こんな小さな国が、それほど重要性があるでしょうか？　私なら、まず清国をかたづけてから、この国を狙います。それに、今、ヨーロッパはクリミア戦争以後、インドの反乱、清国の動乱、とても日本などかまってはいられません。注目株のプロシアも、ビスマルクという男が首相になり、国内がけっこう揺れています」
　クリミア戦争は看護婦のナイチンゲールが有名になった戦争だが、実はロシアとイギリスがトルコを舞台にして戦った大規模な戦争だ。プロシアは、いうまでもなく、真吾の育った国、ドイツの前身だ。
　勝が福沢に頷いて、言った。
「それにアメリカは、今、南北戦争のただ中……。もともとアメリカが日本に来たのは、鯨を取るための捕鯨船補給基地が欲しいためだ」
　真吾がぽつりと言った。

「アメリカが鯨を取っている……、情ないがね」
捕鯨に大反対の欧米諸国が、この時代は先をあらそって鯨を取っていたのだ。
「わしらは鯨をちょっとだけ食べるが、やつらは鯨の油を使う。取る量もすごい。しかし、いずれにしろ、それぞれの国の大事にしてみれば日本などたいしたものではない。日本にきたペリーなど、しょせんむこうじゃ田舎者だ……」
勝の言葉に竜馬が頷いた。
「日本は今、世界でそれぐらいの値打ちしかない……。じゃけんど、清国がつぶれ、世界の国がこの島国に目を向けたとき、わしら、どうする？　どうにもならんぜよ。わしら死んじょる。互いに尊皇攘夷を言いあって大騒ぎして、殺しあっての……。それを仕組んじょるやつがおる」
「誰が？」
高杉が気色ばんで聞いた。
「わからぬ。だが、これ以上、日本の優秀な人材を殺すわけにはいかぬ」
勝がきっぱり言った。
「そこで、この坂本君が考えだした案がある」
「わしだけじゃなか。異国の勉強には、北条真吾先生にずいぶん世話になったぜよ」
「俺のことはいい。竜馬君の考えを言ってくれ」
真吾は竜馬に話の先を急がせた。

「うん、早い話が、優秀な人材をこの殺し合いから遠ざけるんじゃ」
「遠ざける？」
高杉は竜馬を見つめた。
「うむ、けど、尊皇攘夷で血の気ののぼっている連中が、簡単に喧嘩を止めてはくれんじゃろう。だから目的を作る」
「目的？」
と西郷が身を乗りだす。
「エゾ地じゃ。北を開発するんじゃ……。連中をエゾ地に連れていく」
一同は顔を見合わした。
「あそこには、藩内の争いも、尊皇攘夷もない。土地もでかい。そして優秀な人材が本当に必要になったときに、こちらに戻ってもらうんじゃ……」
「おまえ、体もでかいが、考えることもでかいのう……」
高杉があきれたように言った。
桂小五郎が、しかし、目を閉じて言った。
「確かに……良い考えだと思う。だが、この日本に今の混乱をもたらした何かがわからぬ限り、その計画をその闇の力で叩きつぶされるかもしれませんな」
「そのとおりだ」
勝が言った。

「この日本の幕府の上層部に……、いや各藩のどこに、その闇の力の手先がいるかもわからぬ」

「けっこう、あやしいのが、うようよおりますがな」

カットナルが呟いた。

「勝怒庵殿は、それを調べるにはもってこいだった」

勝はカットナルを見た。カットナルは頷き、

「わしは、井伊さんが暗殺されたとき、江戸の井伊さんの屋敷におった。当然、井伊さんを殺した闇の力に狙われても仕方のないところを勝さんに助けられた」

真吾が意外そうに聞いた。

「しかし、勝殿は、そのとき、アメリカに行っていたはずですが……」

「そのとおり。しかし、井伊大老は、おそらく自分が暗殺されるのを知っていた。だから留守のわが家に、勝怒庵殿を守れと言いおいていたのだ。私の配下のものが、勝怒庵殿を江戸の外に連れ出し京都に来ていただいた」

「わしも、政治は専門家じゃしな。勝さんを手伝うことにした。それにわしゃ医者じゃ。この祇園で、舞妓や芸者の専属医者になれば、何かわかると思う」

「そういうことか」

真吾は頷いた。

「ここはな、敵味方なく男たちがやってくる。女の前では気を許す。そして、女は医者に気を

許す。情報は敵も味方もつつ抜けじゃ」
真吾は、カットナルの顔をまじまじと見た。
カットナルは女が苦手のはずだ。それが女性専門の医者をやるなんて……。
カットナルは、ふっと笑った。
「わしゃ、女を患者としか見られないんじゃ。だから、情報も手に入れられる。人を好きになれば、目が曇る。それがわしにはない」
カットナルは溜め息をついた。
「だが、わからぬ、はっきりしたことはな……。怪しいやつは山ほどいるのだが、決定的な証拠はない。闇の力は、そうとう慎重にこの国を動かそうとしている」
一同は、顔を見合わした。
それまで彼らの敵は、藩内の反対派、幕府かその手先の新撰組と見廻組……、そして日本を訪れる外国だった。
しかし、今、わけのわからぬ影のようなものが、この時代を動かそうとしていることに気づいたのだ。
西郷が呟いた。
「薩摩はイギリスと喧嘩をした」
「長州も異国船を襲撃した」
高杉がうなるように言った。

「だが、それが本当の敵ではないとすると……」
彼らは、目の前に広げられた福沢諭吉の世界地図を見つめた。
そのときだった。
ドン！
土蔵の扉が開いた。
一同は刀を持って立ち上がる。
さやを抜きはなった刀を持った男が扉のところに立っている。刀からは血がしたたっている。
岡田以蔵だった。
「坂本さん。敵だ。敵が来た」
以蔵はそう言うと土蔵の外に振り返り、刀を振り降ろした。鮮血が飛び、土蔵の中に斬(き)られた片腕が飛び込んできた。
「チッ！　しまった……。あんたたちの中に密告者がいる」
カットナルがうめいた。
一同は顔を見合わす。
勝が叫んだ。
「今は逃げろ。密告者の詮索(せんさく)をする暇はない！」
土蔵の外には十数人の男たちがひしめきあっている。
以蔵がニヤリと笑った。

「こいつら、新撰組じゃない」
　確かに新撰組のシンボルといっていい羽織を、男たちは着ていなかった。
「すると京都見廻組か……。だったら、そう強いやつもいまい。何人、戦っても、俺の勝ちだな」
　以蔵は刀の柄につばを吐きかけると、男たちの中に駆け込もうとした。
「馬鹿！　やめちけ！」
　竜馬がポカリと以蔵の頭を叩いた。
「相手の数を考えろ！　ここで死んで何になる」
「けど、俺は坂本さんを守る」
「今回は守ってもらわんでも、逃げられる」
「えっ？」
　カットナルが土蔵の壁を叩いた。ポッカリと穴が開いた。
「ここから逃げろ、用意周到というやつじゃ」
「以蔵、おまんには守ってもらいたい人がいる」
「ん？」
「勝海舟先生じゃ。これからの日本に大事な方じゃき、守っちやってくれ」
　以蔵は、十数人の見廻組と竜馬を見比べた。
　確かに見廻組の数は、一人で戦うには多すぎる。

「わかったぜよ。勝さんは俺が守る！」
「行けッ！」
以蔵は、頷くと穴の向こうに消えた。
「真吾先生は、勝怒庵先生を……」
「竜馬、お前は？」
竜馬はニヤリと笑った。
「ここは祇園ぜよ。わし、ガールフレンドが多いしの……、なんとでもなるぜよ」
真吾は頷いた。
見廻組が土蔵につっ込んできた。
竜馬と真吾は、刀を振り回しながら壁の穴に飛び込んだ。
穴を抜け出したところは、祇園の狭い裏道だった。
京の街は、人一人がやっと通れるような路地が入り組んで走っている。道によっては通り抜けられたり抜けられなかったり、まるで迷路のように見える。
道が狭いから、やたら刀をふりまわすこともできないし、全力で走ることも難しい。
路地の事情に詳しい者の勝ちだ。
祇園で遊び慣れ、新撰組や見廻組に追われ慣れている志士たちは、穴から出ると、まるでくもの子を散らすように京の街に消えた。
どうせ、それぞれの行きつけの料理屋か、置き屋にかくまわれたのだろうが、京都一の歓楽

街、祇園だ。店が多すぎる。発見は難しい。
　だが、真吾は京都に慣れていない。
　真吾は竜馬と別れると、カットナルとともに路地を逃げた。だが、いつの間にかカットナルともはぐれてしまった。
　追手の見廻組の足音が背後に迫る。
　路地をどれほど、さまよったことだろう。
　前方の赤ちょうちんをぶらさげた格子戸が開いて、ニュッと巨大な人影が現れた。
　続いて、二、三人の巨大な男たち——身長は二メートル近い。
　路地いっぱいで、これでは通り抜けられない。
　背後に抜刀した見廻組が一人現れた。
　真吾は、目の前の大男に叫んだ。
「どいてくれ！」
　だが、大男は動こうとしない。
　なぜか呆然とつっ立って真吾を見ている。
　するどい気合で、見廻組が後からつっ込んでくる。
　真吾は、すばやく身をかわした。
　そして、しまったと思った。
　これでは、あの目の前の大男、見廻組の刀をよけきれないかもしれない。

俺のために、見ず知らずの人間が巻きぞえを食う……
しかし、次の瞬間、
「なにすんじゃい！」
大男の声とともに、バキッ！　とにぶい音がした。
見廻組の体が、後ろにふっ飛ばされた。
大男の握りこぶしが、見廻組のあごに叩き込まれたのだ。
大男の後にいた、やはり巨体の男がパチパチと手を叩いた。
「うむ、見事な張り手だ。おまえ、見込みがあるぞ、蹴殴山（けるなぐるやま）……」
「張り手、違う……ストレートです」
たどたどしい日本語だ。
だが、その低いだみ声に、真吾は聞き憶えがあった。
「ケルナグール？」
「ん？　やっぱり、お前、真吾か？」
大男は、顔をくしゃくしゃにして答えた。
真吾の思ったとおり、ゴーショーグン・チームで一番の巨体の持ち主、元プロボクサーのケルナグールだった。
「会いたかったぞい。お前、どこに消えとったんじゃ」
ケルナグールがばたばたと真吾の肩を叩いた。日本語は、いつの間にか英語に変わっている。

「それにしても、お前、どうしてそんな格好を……」

真吾が聞いた。

ケルナグールは、浴衣を着て、しかも、頭には、髷がある。

「ん、わし、相撲取りやっとるんよ。なんせ、わし、この国の言葉分からんし、飯、食っていくには、体力勝負しか仕事がなかったんでな。グハハハ」

ケルナグールは、彼独自の高笑いをした。

その夜、真吾は相撲部屋の宿舎にかくまわれて寝た。

そのころ、竜馬も、以蔵も、高杉も、そのほかの志士たちも、それぞれ京都にいる恋人たちの元で寝ていたが、真吾は相撲取りの間で押しつぶされそうになって、そしてカットナルは三条大橋の橋の下で寒々とした一夜を過ごした。

やはり、ゴーショーグン・チームは、京の風景にはミスマッチなのかもしれなかった。

ケルナグールが現れたのは、九州の博多だった。たまたま九州巡業中の田舎相撲の一団に拾われ、京都にやってきた折も折、真吾に出会うことができたのだ。

体の大きさと、元世界チャンピオンだったボクサーの腕が買われたのだ。

もしかしたら、ケルナグールは世界初の外人力士なのかもしれなかった。

だが、真吾が首をひねったのは、ケルナグールが日本に現れた時期だった。

わずか数カ月前だという。

だが、真吾がこの国にやってきたのは一年半前だ。そして、カットナルが井伊大老暗殺のと

きにこの国に現れたとすれば、実に三年以上前になる。
同じときに時空を超えたはずのみんなが、どうしてこれほど時間の差を持って日本に現れたのか……。しかも、現れた土地も、ばらばらなのだ。
それでいながら、少なくとも、カットナル、ケルナグールと出会ったのは京都……しかも一日のうちに……。
真吾が、何か意図的な力を感じたとしても不思議はなかった。
それにしても、気になるのは他のメンバーのことだった。
……レミー、キリー、そしてブンドル……彼らも、この街に来ているのだろうか？……
……そして、俺たち……いや、竜馬たちとこの国の未来はどうなるのだろうか……
真吾は、この国の歴史に詳しくない自分をくやしく思うのだった。

＊

ゴーショーグン・チームの中で日本史にいちばん詳しいといえば、レオナルド・メディチ・ブンドルだった。
日本の美学、わびとさびに興味を持った末、日本の歴史をかじったのだが、そのうち、さまざまな小説で日本の幕末を知った。
……田舎の国の革命騒ぎだが、フランス革命より面白いかもしれぬ。……ときどき『レ・ミゼラブル』より『新撰組血風録』や『燃えよ剣』のほうが文学として傑作ではないかと思うと

きすらあった。なにが良いかといえば、なにしろ登場人物たちが単純でいい……
なにかといえば、ハラ切りと天誅という名の殺し合いである。
ブンドルの欧州的美学にはない、ずさんでさっぱりとしたやり方だ。
なにかと理屈をつけて、ギロチンという処刑道具を振りまわしたフランス革命とはずい分、違うと思うのだ。
そして、幕末ものの中で一番興味を引いた新撰組に、今、自ら希望して入隊している。
「わたしも、ある意味ではミーハーかもしれぬな……」
ときどき、わけもなく苦笑するブンドルだった。
だが、ブンドルは、新撰組の血まみれの志士狩りには参加しなかった。
ブンドルの仕事は、もっぱら新撰組隊士に剣術を教えることだった。
新撰組としても、異人を日本人の志士狩りに使うのははばかられたのかもしれない。
もともと新撰組には、異人を打ち払えという攘夷論者が多いのだ。
そんな新撰組が異人を使うのは、確かに聞こえが悪くもあった。
見廻組が、竜馬たちを追って祇園を駆けまわった次の日——。
ブンドルは、近藤勇に呼ばれた。
「ブンドル君……仕事を願いたい」
「仕事？」
「人を一人斬る……。いや、あんたの銃で射ってくれてもかまわん」

「人を殺すなら、私がやりますよ……」
沖田総司(おきたそうし)が、ブンドルのかわりに答えた。
「ブンドルさんは、隊士たちの剣術指南で大忙しです。新撰組には教える人間も必要でしょ。最近は、新撰組から脱落する人間が多くて、人材がやたら減っていますしね」
「脱落ではない。隊規にそむき、処分されたのだ」
土方歳三(ひじかたとしぞう)が答えた。
「ま、そういう言い方もできますけれどね。つらいんだよな……これ」
「総司、言うな……言っている俺が一番つらい」
新撰組は、隊の結束を守るためにきびしい規律を作り、それにそむく者は冷酷に処分するのが常だったのだ。
「そちらの議論は、わしも頭が痛くなる」
近藤勇が、頭をポリポリかきながら呟いた。
「だがな、今回はブンドル君にやってもらいたいんじゃ。敵さんはなにしろ天狗(てんぐ)でな」
「天狗？……」
「最近、売り出し中の、異人専門の用人棒のあだ名だよ」
「異人専門？」
ブンドルが聞いた。
「うん、薩摩(さつま)や長州に武器を売っている異人どもを守っている、正体不明の男だ。いつも黒い

頭巾をつけ、京の街でも評判になっている。人呼んで、鞍馬山の天狗だそうだ。天狗っていうだけに鼻が高いんだろう」
「始末が悪いんだ。こいつの武器が小銃。いわゆるピストルなんだよ。刀じゃ勝てん。だから、天狗が現れると、わが新撰組にしろ、見廻組にしろ、逃げるより手はない」
　土方が、刀を指して、
「こんなもん、ピストルにゃ、何の役にもたたない……。で、あんたの登場というわけだ。あんたの銃なら勝負になる」
「天狗か……」
　ブンドルは頷いた。
「会って見ても面白そうな男だ。殺す殺さぬはともかくとしてな」
　ブンドルは、ピストルの使い手ということに興味を持った。
　この時代、日本でピストルを使いこなせる男は少ない……もしかしたら……。
　ブンドルは、ゴーショーグン・チームの真吾やキリーを思い浮かべていた。

＊

　闇の中を、黒い着物、黒い頭巾をつけた影が走り抜けていく。
　この時代では大柄の男に見える。
　だが、着物のすその間から見える足は、妙に白い。

後ろから、駆けて来る少年がいる。
息を切らせながら叫ぶ。
「おばさん、待って！」
黒い頭巾は振り返った。
「おばさんじゃないって……」
「えっ？」
「わたし、男のつもり……せめて、おいちゃんと呼ぶんだよ！　スギサクくん！」
天狗の声は、あきらかに女だった。

第六幕

女王陛下の鞍馬天狗(くらまてんぐ)あるいは……

「子連れ素浪人旅日記」

京の都とはいえ、月明かりに浮かびあがった冬の夜の街路は、寂しさしかない。
京の冬は、ただでさえ、底冷えが厳しいといわれているのに、最近は新撰組や見廻組、諸藩の志士達が入り混っての暗殺事件が多発していた。
巻き添えを恐れて、町人たちは家の扉を固く閉じ、見猿、言わ猿、聞か猿を決め込んでいる。
白刃が、今日も、そんな街角で光った。
抜刀したのは、一人の町人を取り囲んだ三人の新撰組隊士だ。
「おまえ、異国の犬だな？」
町人は、何度もかぶりを振った。
「異国？……滅相もございません。この顔のどこが異人だとおっしゃるんで？」
確かに町人の顔や身なりは日本人に見える。
「黙れ……そのての顔は、隣の清国にも腐るほどいる。今の清国の裏には、英国かアメリカかフランスか……。いずれにしろ赤毛の臭いがつきまとっておるわ」

「そうはおっしゃいますが……、開国したのは江戸幕府でございます。新撰組は、幕府側。それが、なぜ異国をお嫌いになるのです？」

「たとえ幕府が入国を許した国といえども、おまえの姿は京の町人に化けている。化けるは、怪しいたくらみのある証拠。新撰組は、怪しい者を放ってはおかぬ」

町人は、もはやこれまでと悟ったのだろうか、

「どうしても、やる気ですね」

ふところから匕首を出した。

「死ねッ！」

気合いとともに、新撰組の一人が突っ込んでいく。

バン！　といきなり背後から銃声がした。

新撰組の手から刀が弧を描いてはじけ飛んだ。

「何やつ!?」

振り返る新撰組の前に、黒い覆面の侍が立っていた。

手にはきな臭い煙を吐いたばかりの単発銃を持っている。

町人は思わず呟いた。

「天狗……、鞍馬天狗……」

新撰組は身構えた。

「お前が天狗か……」

刀を射ち落とされた新撰組は、ニヤリと笑って、刀を拾った。
「ふん、いかにお前が飛び道具を持っていようが、こちらは三人……、次の弾を込める前に、われわれの刀をかわせるかな？」
天狗と呼ばれた侍は、何も言わずに単発銃をふところに入れた。
そして、刀とともに腰の帯にはさんであった際立って大きな拳銃を、ゆっくりと抜いた。
四十四口径のマグナムだ。
新撰組は思わず、後ずさりした。
四十四口径の威力を知るはずもないのだが、その、にぶい光を放つ銃身の威圧感に気圧されたのだ。
そのとき、ぴょこんと、天狗の後ろから、粗末な着物を着た少年が首を出した。
「おじさんたち、これ、なんだかわかる？　連発銃っていってね。何発も弾が出るんだよ」
「なに？　それが異国で噂の連発銃？……」
三人の新撰組は顔を見合った。
当時、日本にあった拳銃はほとんど単発銃で、回転するシリンダーを持つ連発銃は文字どおり夢の舶来品だった。
「これが正真正銘の連発銃……。なんなら試してみる？　でもさ、そのために死ぬのはもったいないでしょ。こっちも弾がもったいないしね」
カチリ、天狗は黙って撃鉄を起こした。

新撰組は、さらに後ずさりして歯ぎしりした。
「チッ……憶えていろ」
ゆっくりと刀を引き、それから悠々と天狗を背にして歩き始めた。
「パン！」
いきなり少年が叫んだ。
三人の新撰組はそれを合図に、堰が切れたように、われ先に逃げていった。
天狗は、少年の肩を、やったね……とでも言いだけにポンと叩いてささやいた。
「サンクス。あなたの説明で、また弾が節約できたわ」
いうまでもなく、天狗はレミー、少年はスギサクだった。
「危ないところをありがとうございます」
深々と頭を下げた町人が顔を上げたときには、二人の姿は狭い路地の闇の中に消えていた。

*

「やはり出ましたね……」
少し離れた路地から、その様子を窺っている二人の男がいた。
「あれが天狗か……」
長髪の男が呟いた。
新撰組の沖田総司、そしてブンドルの二人だ。

「さあ、後を追いましょう」
沖田の言葉にブンドルは首を振った。
「いや、見るところ、天狗の持っている銃は予想以上に強力なもののようだ。総司君が、いかに天然理心流の達人とはいえ、あの銃に立ち向かうは無謀……。ここはわたしにまかすがよかろう」
「一人で大丈夫ですか？」
言葉と裏腹に、沖田の口調はまるで心配しているような気配がない。
「わたしにはこれがある」
ブンドルは、レーザー銃を抜いて微笑した。
「そか。飛び道具の喧嘩に、わたしの人斬り包丁は足手まといってことですね」
「そういうことだ。では……」
ブンドルの姿は天狗の後を追って、素早く路地に消えた。
「要するに一人で行きたいわけだ。では、わたしも一人で、やることはやるか……」
沖田は、そう呟いて別の路地に消えた。

＊

……あ〜あ、なんてことだろう。なによ、この黒ずくめは……。ここは京都なのよ。女の子なら、舞妓さん気取りで、ゴージャスな西陣織ぐらい着たがったってバチは当たらないんだぞ

……
スギサクと路地を歩いていくレミーは、さっきからぼやきっ放しだ。
男物の着物の裾から冷たい風が吹き込み、素足をもてあそぶ。
……チャップイ、チャップイ……。やれんなぁ。ジーンズかパンストでもあったらね……。だいたいこの国は、女をなんと思っているのよ。これじゃ、日本の女性は全員、冷え症になっちゃうわ……。あ〜あ……
レミーは、ここ二年間、欠かしたことのない溜め息を今日ももらした。

＊

ドクーガの追手から逃れて、蝦夷（北海道）から津軽に辿り着いたレミーとスギサクは、京都までの距離を知ったとたん、急にお腹が減ってきた。
狭い日本も歩くには広い。京都に着くまでどうやって食べていくのか……。
仕事を見つけようにも、この時代の日本女性の地位はあまりに低かった。まして身寄りのないレミーだ。身売りでもしない限り、誰も相手にしないだろう。
……待てよ……
身売りといったって、この時代の日本女性に比べたら、マンモス・レミーなどという女子プロまがいのあだ名をつけられそうに大柄のレミーだ。
おまけに、くっきりした目鼻立ちに、金髪と呼ぶには少しくすんだ髪……。この時代の日本

人とは違いすぎる。

……下手をすれば、見せ物小屋の化け物扱いされかねない……。さしずめ、客寄せパンダか客寄せコアラ。珍獣奇獣の客寄せレミー……

……あたしゃ、この国では、女として生きていけないんだわ……。だとしたら……

レミーは、こめかみをポリポリと掻きながら、

「ねえ、スギサク君？」

「なに？　おばさん……？」

「おばさんじゃないの……。ね、せめておじさんと呼びなさい」

*

それからしばらくして、東北から関東北部のやくざたちの間で、子連れで旅をする深網笠の浪人者の噂が立った。

浪人者は、立ち寄った村や町で起こっていたやくざ同士のもめごとをあっという間に解決し、ふらりとどこかに消えていく。

解決するといっても、刀などは抜きもせず、あるものを見せつけて相手を黙らしてしまうというのだ。そのあるものが何であるか定かではないが、まるで葵の印籠のような効き目があるというので、その浪人はやくざ世界の水戸黄門だとさえいわれた。

だが、この浪人、水戸黄門と少しちがうのは、もめごとを解決するたびに料金を取っていた

のだ。
浪人は、人前ではけっして深網笠を取らず、ただの一言も喋らなかった。
やくざとの交渉は連れている子供の仕事だった。
「おいらの話が聞けないと、このおいちゃんの蓮根つき十手が、黙って火を吐くよ」
四十四口径マグナムとか連発銃とか言うよりも蓮根つき十手と呼んだほうが、地方のやくざにはわかりやすかったのかもしれなかった。
もちろん、レミーが深網笠を取らず、声を漏らさなかったのは、女であることを知られたくないためだった。
そして、この子連れの浪人の噂が出始めてから一年ほどたったころ——神奈川の生麦という村を通る街道を、二人は歩いていた。

＊

「ヘルプ！　ヘルプ、ミー！」
レミーはその声に呆然と立ちつくした。耳が目ポチになった。
それは確かに英語だった。それも英国の正確なブリティッシュ・イングリッシュだ。
……どうしてこんなところで……
だが、考えている暇はなかった。
背後から激しい蹄の音を響かせながら、女性を乗せた馬が暴走してきたのだ。

レミーは身を翻すと、馬の手綱を摑み馬上に飛び乗った。馬を止めようと手綱を引いた。
「ノー!! ドント ストップ!!」
馬にしがみついている女が叫んだ。
……ん? 止めるなって……。あなた、暴走族の元祖さん?……
そのとき、街道にいたスギサクの声が聞こえた。
「止まっちゃ駄目だ! 逃げて!」
「えっ? 話が見えない……」
レミーは後ろを振り返った。
刀を抜いた侍たちが追いかけてくる。
先頭の侍の刀はすぐそこだ。
「!!」
レミーは、思いきり馬の腹を蹴った。
レミーと女性を乗せた馬はみるみる侍たちを引き離し、一目散で高い塀で囲まれた敷地の門の中に駆け込んでいった。
そこは神奈川の外国人居留地だった。
レミーが思いがけず侍たちから助けた女性は、イギリス人の貿易商の夫人だった。
文久二年（一八六二年）八月二十一日——。
薩摩藩主、島津久光の行列が生麦村を通りかかった。その行列の横を馬に乗った四人のイギ

リス人が偶然、通り過ぎた。
「殿を馬上から見降ろすとはなにごと！」
激高した行列の従者たちは、イギリス人に斬りかかった。
一人が殺され、二人が重傷、無事だったのはイギリス人女性一人だった。
この事件は、やがて薩摩藩とイギリスとの間の戦争にまで発展し、イギリスの勝利に終わった。これを薩英戦争という。

＊

……あ〜あ、また、妙なものに巻き込まれてしもた……
レミーは外人居留地の中で溜め息をついた。
あれだけ派手にイギリス女性を助けた以上、外国人嫌いの日本人、子連れ浪人を目の仇にするだろう。
居留地から出るに出られず、悶々とした日々が続いた。
そんなある日――。
レミーは、英国公使館から来たという男から、仕事を依頼された。
……最近、京都の治安は江戸の比ではなく、悪くなっている……。京都に住む英国関係者たちの護衛をしてくれというものだった。
京都！……レミーの頰から自然と笑みがもれてきた。

元、ヨーロッパでスパイ活動を仕事にしていたレミーは、この英国人が情報部員だと直感していた。京都の英国関係者といっても、しょせんその筋のスパイに違いない。
スパイのガードマンなんて、楽しいはずのない仕事だ。それでも、かまわなかった。
なんといっても、目的地の京都に行けるのだ。
レミーは仕事をモミ手ホクホクで受けることにした。
「これ、刀より強い……。役に立ちます」
英国人は、レミーに短発銃を渡してくれた。
……短発銃？……ケチ……
とも思ったが、ないよりはましだった。
ここまでの長い旅の間で、レミーの四十四口径の弾はもうシリンダーの中の六発しか残っていなかったのだ。

＊

そして、今、こうして京都――。この街に来てずいぶんたった。今夜も三人の新撰組からスパイを助け、今日のノルマが終わった。
レミーはスギサクと迷路のような路地を通り抜け、突き当たりにやって来た。
そこは、レミーとスギサクが隠れ家にしている古ぼけた長屋だった。
レミーは戸を開けながら深い深い溜め息をついた。

……だけど、お寒い仕事よね、スパイのガードマンなんて。人知れず暗躍するスパイ、それをまた、人知れず守るわたし……。ホントに身も心も寒い……。クシャン！……

溜め息がわりのくしゃみが出た。

「天狗でも風邪(かぜ)をひくのかな？」

背後で男の声がした。

振り返ったレミーとスギサクの前に、路地に差し込む月の光を背にした影が立っている。顔は見えないが、新撰組独特の羽織袴(はおりはかま)のシルエットだ。

「またか……」

レミーはうんざりしながら腹の帯から銃を抜いた。

「おじさんたち……、まだ懲(こ)りないの」

とスギサク。

「二人とも新撰組というものをよく知らぬらしいね。鉄砲の弾などで尻尾を巻くような新撰組は切腹ものだ。それでいながら、彼ら三人は逃げた。なぜかな……」

……しまった。わたしたちの家を知るために……

レミーは唇(くちびる)を噛(か)んだ。

「さよう……そして天狗を確実に倒せる男があなたを殺す……これでね」

男は、ふところから銃のようなものを出した。

月の光が、銃身をキラリと光らせた。

レミーの目に銃身のスタイルがしみついた。
……あの銃身は……えっ？　そんな……
レミーの目から思わず涙があふれた。
その銃身には見憶えがあった。レーザー銃……。しかも細身で、銀を貼った銃身……。今は見えないが、そのグリップには黒檀を彫刻したバラの花があるはず……。そう、レオナルド・メディチ・ブンドルの愛用銃ラファイエット1999……。
レミーは、駆け寄って腕の中に飛び込みたい衝動にかられた。
だが、ブンドルはレミーに冷ややかに言った。
「天狗、刀を抜け……この路地で撃ち合えば、流れ弾が近所の壁を突き抜け、罪もない街人の命を奪うやもしれぬ」
ブンドルは銃を収め、刀を抜いた。
レミーはとまどった。
……ブンドルは、わたしが誰だか分からないの？……たとえ別れてから二年以上経ったとしても……。それはないわよ……。あ、そか。わたし、覆面をしていて、男の姿だものね……。分かれというほうが無理なのよね……
そうは思うものの、レミーはだんだん、ブンドルに腹が立ってきた。
……そりゃ二年は長いわよ。でもね、本当の仲間だったら、たとえ相手の顔が変わったって、声が違ったって、スタイルがモデルチェンジで、それこそ女が男に転換してたってよ、目の前

にいるのが誰だか感知できるはずよね……
……だって、だって……わたしは仲間のあなたたちに会いたいからこそ、ここまで来たんだもん。その気持ちが分からないなんて……。あなた、それでも人間やってるつもり!?……
レミーはなぜか理不尽に怒ってしまった。
……よろしい……。わたし、口きいてやんない……。このまま黙って、あなたと喧嘩するわ。わたしが誰だか分かるまでね……うん!!……
レミーは意地になった。
レミーは、四十四口径を腰の帯の間に戻した。
スギサクが叫んだ。
「なんのつもりだよ！　銃なしじゃ勝てないじゃないか！」
レミーは、黙ってスギサクを長屋に押し込むと戸を閉めた。
刀を抜く。考えてみれば日本に来てから、ただの一度も使ったことはなかった。
……どうやって構えるんだっけ……
いきなり、ブンドルが刀を振りあげて飛び込んできた。
思わず、レミーはまともに刀で受けた。
ガシン！　火花が散った。
いくらレミーでも、男のまともな一撃を刀で受けとめられるはずがない——だが受け止めていた。

……えっ？　なぜ？……

レミーは、ブンドルの左手がレミーの刀を持つ右手を支えているのに気がついた。

耳元でブンドルがフランス語でささやいた。

「どんな姿をしていても、あなたの歩くリズムを……そしてあなたの四十四口径を忘れはしない……。よいか、わたしたちは見張られている。このまま続けるのだ」

ブンドルは、沖田の尾行を予想していたのだ。

「ウィ……ムッシュ……（分かったわ、あなた）」

レミーもささやき返した。

狭い路地だ。レミーとブンドルはまともな斬り合いにはならない。押し合いもつれ合っての斬り合いだ。

他人から見れば激しく斬り結んでいるように見えるが、実はブンドルがダンスのようにレミーをリードしているのだ。

ドーン！

二人は、長屋の戸を破ってレミーの部屋に倒れ込んだ。

「この家に脱出口は？」

ブンドルがささやく。

「長屋の東は鴨川（かもがわ）だわ」

「さすがだ」

ブンドルは微笑した。
レミーなら、隠れ家に逃げ道を当然作っていると思ったのだ。
ブンドルはレーザー銃を抜くと、いきなり部屋の奥に向け撃った。
光線が壁をぶち抜いた。
部屋は、屋根から落ちたほこりで目も開けられない。
「シー・ユー・アゲインは？」
レミーの声だった。
「明日……どこで？」
ブンドルが聞く。
「絵馬堂（えまどう）……鞍馬の……」
レミーは、そうささやくと、壁に開いた穴から、スギサクとともに鴨川へ飛び込んだ。

＊

レーザーが壁をぶち抜いた衝撃で、長屋の住民が、レミーの部屋の前に恐る恐る集まってきた。
巻き上がるほこりの中からブンドルが出てきた。
「派手にやりましたね」
沖田が、微笑しながら立っていた。

「銃を使いたくはなかったのだが、あの男、手強くてな……」
「で、どうなんです。天狗さんは……」
「し損じはしない。跡形もなく消したよ」
「へえ……」
沖田は、部屋の中を覗き込んだ。
「ほんとだ。跡形もないや……あれっ？　この裏は鴨川か……岸辺で何が起ころうと、鴨川の水は今日も流れる。冷たいだろうな。川の水は……おう、寒……」
沖田は、体をぶるると震わせてから、二度三度、咳込んだ。
ブンドルは、何も言わず、その後ろ姿を見つめた。

＊

確かに水は冷たかった。
氷に近いといえた。
だがスギサクと向こう岸に辿り着いたレミーは、さっきほど寒さを感じなかった。
むしろ、胸のうちは暖かかった。

＊

「そうか。天狗を仕留めたのか……」

新撰組・屯所の座敷で、近藤勇は上機嫌だった。
土方歳三は、チラリとブンドルを見てから沖田に聞いた。
「総司、確認したのか？」
「ええ、確かに……。もっとも、体はものの見事にふっ飛んでしまいましたがね。……いやあ、凄いもんだ。ブンドルさんの飛び道具は……」
屈託なく笑う沖田に、ブンドルは微苦笑して返すだけだった。
……この男は、天狗が死んだとは思っていない……。それが、なぜ……

＊

「ドクーガが北海道に……」
ブンドルは、フーッと大きく息を吐いた。
次の日の深夜――。
鞍馬寺の絵馬堂の前で、ブンドルとレミーは語り合っていた。
「いったい、彼らは、この国で何を狙っているのか……」
ブンドルは、かつてドクーガに参加するの？」
レミーはさりげなく聞いた。
「もう一度、ドクーガに参加するの？」
「ここが日本の過去なら、ドクーガもまた、わたしの過ぎ去った昔だ。彼らがここで何をしよ

うと、関わりのないことだ」
「うん。わたしも今さらドクーガと喧嘩なんかしたくない。なんたって、今は鞍馬の天狗だもの。ドクーガさんのスケールにはつきあえないわ」
「しかし、なぜ、鞍馬の天狗なのかな？」
「ああ……それ？　あそこにいる絵馬堂にね……」
絵馬堂には数えきれぬほどの絵馬が掛けられている。
「あの中の天狗の絵の裏に、ボディガードの求人が書いてあるわけ」
「それで鞍馬の天狗か……。英国の情報部のスパイを守る鞍馬天狗……さだめし女王陛下の鞍馬天狗か……。もっとも、このぶんでは、フランス、アメリカ、ロシア、ありとあらゆる国のスパイが、この街に入り込んでいても不思議ではないな」
レミーは肩をすくめた。
「そんなのどうでもいいわ。わたし……京都にさえ来ればよかった。誰かと会えると思っていたし、こうして会えたし……」
レミーはブンドルを見つめた。
ブンドルもレミーを見つめた。
いまさらながらにお互い、飽きない顔だなと思った。
これからも飽きないでいたいと思った。
月の光に浮かぶ二人の影が、やがてゆっくりと近づいていった。

そのときだった。

コホン！

茂みの中から咳の音がした。

レミーとブンドルは素早く離れ、身構えた。

「いえ、別に覗こうとしたわけじゃありません」

茂みの中から人影がひょっこり出てきた。

「やはり天狗は生きていた。お二人は知り合いだったわけか……」

沖田総司だった。

「それで、どうする気かな？　総司君」

「別に何もしやしませんよ。ただお二人の斬り合いを物陰から拝見していましてね。ちょっと出来すぎだと思ったんです。迫力はありましたよ。でも、何か足りないんですよ」

「足りない？」

ブンドルが聞いた。

「ええ、たぶん……、その……、殺気のようなものかな……。わたしのように日常が殺しまみれだと、お二人が本気で殺し合う気かどうかわかってしまうんです。困ったもんですよね」

「わかっていながら、なぜ、近藤さんに報告しなかったのかな？」

「意味ないですよ。告げ口なんかしてごらんなさい。新撰組は裏切りを許しませんからね。意地でもブンドルさんを処分しようとする。ブンドルさんは、強いから新撰組は血の海になりま

すよ。そんな騒ぎを起こすより、わたしは、お二人から知りたいことが山ほどあるんです」
　沖田は人なつっこく、二人を交互に見た。
「ブンドルさんと初めて会ったときから、わたしはブンドルさんをこの世界の人間だとは思っていません。で、知りたいんだなあ……、ブンドルさんのいた世界のことを……。どんなことでもいいんです。そこが、わたしのけっして行けない世界であったとしても教えてほしいんです」
　沖田はそこまで言って急に咳込んだ。いつになく激しい咳だった。
　海老のように体を曲げ、膝をつき、あえいだ。
「しっかりしろ！」
　ブンドルもレミーも思わず沖田に駆け寄った。
　その瞬間——。
　たて続けに二発の銃声がした。
　今さっきまで、レミーとブンドルの立っていた地面が弾けた。
　沖田に駆け寄らなければ、確実に命中していただろう。
　ザワザワ——、いきなり茂みが揺れ、頭巾を付けた侍たちが飛び出し、三人を取り囲んだ。
　十人は越えるだろう。
「総司君、やはり君は、わたしたちを……」
　ブンドルが呟いた。

「違う……わたしじゃありません。」
沖田は、咳込みながら立ち上がった。
「わたしではない……」
沖田は刀を抜くと、侍たちに斬りこんでいった。一人、二人、三人——沖田の鋭い気合とともに、侍たちは倒れていく。
沖田の闘志と殺気が、寒風の中で陽炎（かげろう）のように燃えて見えた。
いつもはきちりと整えられた沖田の髪が揺れて、乱れる。荒い息で肩が波打つ。
「わかった。総司君。後はわたしにまかせろ！」
ブンドルの刀が一閃（いっせん）したとたん、二人の侍が肩を押え、うずくまった。ブンドルの峰を返した刀が、目にも止まらぬ早さで侍たちを痛打したのだ。
「いや、ここは、わたしがやる」
沖田は咳込みながら、よろけるように侍たちに突っ込んでいく。
「引け！」
二人の気迫に青ざめた侍の一人が叫んだ。
侍たちは怪我人（けがにん）を背負って逃走した。
沖田が最初に一撃を加えた侍だけが、虫の息で残されていた。
沖田は侍の頭巾を取って立ちすくんだ。
「こいつは……」

「知っているのか？」
ブンドルが聞いた。
「見廻組の奴です。けれど、わたしたちと同じ、京都警備を役目とする見廻組が、なぜ、わたしたちを狙ったんだろう……」
「おそらく、彼らの狙いは鞍馬天狗の命だったに違いない。一度はわれわれ新撰組に狙わせ、今日は見廻組にやらせる。そこで味方同士の殺し合いが起ころうと、目的のためには手段を選ばない。そんなやり方が彼らの特徴だ」
……彼らって、要するに彼ら？……
レミーはブンドルを見つめた。
「そう、彼らにとっては、新撰組も見廻組も、目的のための道具でしかない。おそらく、天狗が守っている英国の情報部も、目的のための道具だったのだろう。だが道具が強くなると扱いにくい。英国は生麦事件を発端にした薩英戦争に勝ち、日本に対する立場が強くなりすぎた……。だから叩く……。数年前には、やはり北海道に進出しようとしたロシアを追い出そうとした……」
確かに北海道で、レミーはロシア人と間違えられ殺されかけた。
ブンドルは、レミーを見つめてから、肩をすくめた。
「どうやら、わたしたちは、彼らと関わりを持たずにすみそうにない」
レミーは、コクリと頷いた。

……よろし。ドクーガさん、そこまでつきまとうなら、やってやろうじゃない。鞍馬天狗は……、正義の味方じゃ……

ブンドルと出会えたことが、少しだけレミーを強気にしていた。

……ブンドルに会えたんですもの。他の仲間とも、きっと会えるに違いないしね……

何の根拠もないが、レミーのその思いは確信に近かった。

*

翌年の正月——。

清水港の空は晴れわたり、真っ白な富士の姿をくっきりと浮かびあがらせていた。

「あっしに京都へ行けってんですかい？」

日本のやくざ口調がすっかり板についたキリーが、次郎長に聞きかえした。

女房のお蝶の入れたお茶をすすりながら、次郎長は頷いた。

「そうともよ。江戸でいつも世話になっている旦那がな、わしらの力を借りたいとの、たっての願いだ」

「旦那ってのは？」

「勝さんといってな、幕府じゃ、けっこうお偉いさんだ。そんなお人が、やくざの力を借りたいってのは、よほどのことだぜ。これを断りゃ、この次郎長は男じゃねえ。とはいえ、勝旦那の専門は軍艦でな。どうやら今回は、異国とのしがらみがからんでいるらしいんだ……。と、

なりゃ、えくすぱあとはお前しかいねえ。やくざの政治参加、やくざの国際化をになう斬り込み隊長としてよ……。霧隠（キリーギャグレー）の……、ここで侠気（おとこぎ）を見せちゃくれめえか？……」

「で、京都で何をすりゃいいんで？……」

「とりあえず勝旦那のぶれいんと会ってみちくれ」

翌日——キリーは、京都へ旅立った。

勝海舟のブレイン——坂本竜馬たちとの会合場所は、京都三条通河原町、池田屋という宿屋だった。

幕末豪将軍参考年表

年	日本および、ゴーショーグン・チーム	世界
1853（嘉永6年）	ペリー、浦賀に来航 坂本竜馬、江戸に遊学、黒船を見る	空気より重い飛行機が500ヤード飛ぶ イギリスのジョン・ケリーのグライダー
1854（安政元年）	ペリー、再来　日米和親条約締結（3月） プチャーチン、長崎に再来航 日英和親条約（8月） 日露和親条約（12月）	クリミア戦争勃発（3月）、1856年まで続く スミス＆ウエッソン（拳銃会社）設立
1855（安政2年）	プチャーチン、帰国	クリミア戦争激化、ロシア不利　いわばイギリスとロシアの戦争だった
1856（安政3年）	米総領事ハリス、下田に着任	ロシア、オーストリアの最後の通牒を受諾　クリミア戦争終結　アロー号事件
1857（安政4年）	アロー号事件、長崎奉行が知り、日本の危機を痛感する 薩摩藩、モールス通信機を実験	セポイの乱 英国、コルトの開発したエンフィールド銃を採用
1858（安政5年）	日米修好通商条約　蘭露英仏とも条約 安政の大獄、始まる 横浜、長崎、函館の三港を開港	欧米のアジア植民地化ますますすすむ アイグン条約
1859（安政6年）	吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎、処刑	ダーウィンの「種の起源」
1860（万延元年）	勝海舟、渡米 井伊大老、暗殺（桜田門外の変） カットナル、登場	最初のウインチェスター連発銃が製造される（レバーアクション、ライフル） リンカーン、アメリカ大統領になる
1861（文久元年）	土佐勤王党結成　坂本竜馬加盟 レミー、北海道に現れる 幕府攘夷決定 高杉晋作ら、品川英国公使館焼き打ち	ロシア、対馬に来て占拠を企てる　アメリカ南北戦争 ガトリング銃発明 ロシア農奴解放令
1862（文久2年）	真吾、土佐に現れる　　坂本竜馬、脱藩 生麦事件 竜馬、勝海舟に入門	ロンドン万博に日本出品 ビスマルク、プロシア首相になる
1863（文久3年）	新撰組、結成 キリー、清水港に現れる 長州、外国船を襲撃 高杉晋作、奇兵隊を編成 薩英戦争 8・18クーデター 新撰組、芹沢鴨暗殺 ブンドル、京に現れる ケルナグルール、博多に現れる	世界最初の地下鉄（英） ポーランド反乱、ロシアが鎮圧
1864（元治元年）	池田屋事件 禁門の変	第一次インターナショナル 太平天国滅びる
1865（慶応元年）	山南敬助切腹 岡田以蔵処刑	
1867（慶応3年）	高杉晋作没 坂本竜馬、中岡慎太郎、暗殺	
1868（明治元年）	鳥羽伏見の戦い 近藤勇処刑 沖田総司没	
1869（明治2年）	土方歳三戦死	

第七幕

幕末美学論あるいは……

「もう一つの池田屋事件」

二月——。

冬の冷たい雨が降っている。

新撰組壬生の屯所で——。

近藤勇は、黙って腕を組み、沖田総司とブンドルの話を聞いていた。

彼らが知っているどこの異国でもない。そして、新撰組と敵対する尊皇攘夷派の志士たちでもない、別の組織、ドクーガが、日本を動かそうとしている。新撰組も、その道具として利用されている。

「ドクーガか……」

近藤はうめくように呟くと、刀架に掛けた大刀に手をやった。

「話は分かった。だが、それをわしに言ってもよかったのかな?……わしが、もし、そのドクーガとやらの手先だとしたら……」

沖田はチラリと近藤の刀に目をやり、それから人なつっこい微笑を浮かべ、近藤の顔を見て答えた。

「天狗や、ブンドルさんから、ドクーガの話を聞いてからというもの、わたしなりに、近藤さんがドクーガと関りがあるのかないのか、ずいぶん調べましたよ。かなり手間取りましたけれどね」
「それで？」
近藤は刀の鯉口に指をやった。
「残念ながら、証拠はつかめませんでした。ドクーガってやつは、われわれの中に相当深く静かに潜行しているらしい……でもね……」
沖田はニッコリと笑った。
「答えは今、分かりました。確かに近藤さんがドクーガとやらの手先なら、秘密を知った私たちを斬ろうとするでしょう。だけれど、近藤さんは刀に手をかけながら、私たちを斬ろうとしない。近藤さんには殺気がない」
「分かるか？」
「分かります」
近藤は頷いて、大刀を刀架に置いた。
「わたしも、この刀で、諸君がでたらめをいっているのかどうか試してみた」
「で？」
「諸君は、刀を見て身動き一つしなかった。自らの言葉に虚偽があれば、そうは落ちついてはおれぬはず……。わしも、諸君の言葉、ドクーガとやらの存在を信じよう……」

ブンドルは近藤の言葉を聞いて、いささかあきれ、思わず呟いた。
「なんと簡単な……あなたたちは、互いの言葉に確かな証拠のないまま信じあおうというのか……」
近藤はブンドルを見て、ふっと笑った。
「この世の中、武士の世界も、おのおのが私利私欲に目がくらみ、偽りと裏切りがはびこっている。いちいちその証拠を調べていては間に合わぬのだ……相手を信じるか否か……それは、この刀に賭けた気迫に感じるよりない」
「難しいこと言ってますけれどね。早い話が、勘に頼るしかないってこと。何ごとも疑えばきりがありませんからね」
沖田が他人事のような口調で言った。
「それに、わたしは近藤さんの人となりを知っているつもりです。せっかく軌道に乗った新撰組が、わけの分からぬドクーガとやらに利用されているとしたら、黙って我慢できるはずがない……」
「うむ、馬鹿とハサミは使いようという言葉があるが、わしらは武士として、幕府を守るハサミになろうとした。ハサミである以上、人を斬った。だが、わしらは馬鹿になるために京都に来たわけではない。総司もわしも同じ気持ちのはずだ」
沖田と近藤がお互いを信じあう理屈としては単純で乱暴な台詞だと、ブンドルは思う。
しかし、人斬り包丁をふりまわして死地を駆け抜けてきた彼らに、言葉で表せない信頼感が

あったとしても不思議はないのかもしれない。
……この粗雑さも、また、美しいのかもしれない……
ブンドルは沖田と近藤を見つめ、そう思うことにした。
「で、これからどうします？　新撰組局長としては……」
沖田が笑顔を絶やさずに、近藤に聞いた。
「結局、これしかあるまい」
近藤は無表情に刀架から小刀を取り、たたみの上に置いた。
「切腹ですね？」
「うむ。われわれ新撰組は、幕府とこの国を守る誠の侍集団のつもりだった。だからこそ、新撰組局長でありながら不正乱脈きわめた芹沢鴨を斬った。それればかりではない。武士としてあるまじきおこないをした隊士は容赦なく切腹を申しつけ、聞かぬ者は刀のさびにした。だが、そうまでして守ろうとした新撰組の誠が、何者かに利用されているとしたら、それは、局長のわしの責任……死んでいった者に申しわけがたたぬ。総司、介錯を頼むぞ」
近藤は小刀を握った。
「よせ！　なんと短絡な！」
ブンドルが思わず、近藤の手を握った。
「そうです。腹を斬ればすむってものでもないでしょう」
ふすまが開き、土方歳三が入ってきて、そう言った。

「やはり、それだけではすまんよな」
近藤はあっさりと小刀を置くと、頭をポリポリかいた。
「それにしても困ったのう」
土方は、ふっと笑って……、
「困っている暇はありません。一刻も早く、そのドクーガとやらを始末するしかないでしょう。それから腹を切っても遅くはない」
「ま、そういうことですよね。土方さんも、わたしも、ともに今の新撰組を作ったようなものですもんね。腹を切るなら、そんときゃつきあいますしね」
沖田は年上の近藤に、まるでいたずらをして叱られる友たちをなぐさめるような調子で言った。
土方は、フッと溜め息をついて、頷いた。
「そういうことです」
近藤は、土方と沖田を見つめた。
「そうか……土方、沖田、ついてきてくれるかッ？」
沖田はニッコリ笑い、土方は肩をすくめるようにして頷いた。
「うむッ！」
近藤も、感動した口調で答える。
……いささか浪花節がすぎるな……

とブンドルは思ったが、口には出さなかった。
「われわれの態度は決まったようだが……」
土方がブンドルをチラリと見て言った。
「態度の分からぬ輩(やから)もいる」
いきなり大刀を抜き、ブンドルに斬りかかった。
一瞬早くブンドルの刀が土方の一撃を受け止めた。
二人はふすまを蹴破(けやぶ)るようにして、縁側から庭に飛び出す。
刀を抱え、二人はにらみ合った。
土方はフッと笑い、刀を引いた。
「失礼した。どうやら、ブンドルさんは、斬りかかったこんなわたしでも斬る気はなさそうだ」
「分かるかね？」
ブンドルが聞いた。
「ええ。あなたの刀の腕前なら、わたしの一撃を返す刀で、わたしを一瞬で斬ることができたかもしれない。だが、大刀を受けただけで斬り返しもせず、庭に飛びだした。おそらく、わたしを斬るより、それによって起こる近藤さんや総司とのいさかいを恐れたからだろう」
確かに言われたとおりだった。
ブンドルには、土方を斬る理由はまるでない。かわすことのできる攻撃なら、なにも、その

相手を殺すまでのことはない。
　土方は続けた。
「ブンドルさん、あなたが何ものであるかは、知らない。総司の言うように月からやってきたかぐや姫の男版かもしれぬ。だが、なんにしろ、われわれに敵意のないことは分かった。ブンドルさん、よろしかったら、今宵、あなたと差しで飲みたいのだが……」
　ブンドルはどこか捉えどころのない土方という男に興味を持っていた。
「よかろう、望むところだ」
　ブンドルは何ごともなかったように刀を収めると、庭から外に出ていった。
　その後ろ姿を見送る土方に、沖田がささやいた。
「土方さんもずいぶん荒っぽい試し方をしますね。ブンドルさんに斬られたらどうする気です」
「そのときはそのときだ。近藤さんより先に切腹させてもらったと思えばよい」
「それにしても……」
　沖田が言った。
「ん？」
「土方さんの殺気は本気でしたよ。ブンドルさんを殺す気で斬りかかりましたね」
「ああ……われわれに敵意がないとしても、わたしにむざむざ斬られるような男を、新撰組が頼りにできるかな」

「はあ、そういうことですか」
沖田はポカンと口を開け、さすがにあきれた顔をした。
「そういうことだ」
土方はこともなげに言った。

＊

その夜、祇園の茶屋の一室で、ブンドルと土方は酒を酌み交わしていた。
土方はブンドルに酒を注いでから言った。
「わたしも、何か得体のしれぬ力が幕府内部に暗躍していることは感じていました。だが、今日、ブンドルさんと飲みたかったのは、そのことではないのです」
「ドクーガのことではない？」
「ええ、それなら、近藤さんや総司にも加わって貰うでしょう」
土方はふところから書物を取り出し、ブンドルの前に置いた。
「ずばり聞きます……。こういう物をどう思います」
その書物の表紙には、墨で「幕末美学論」と書かれていた。
「幕末？　しかし、まだ、幕府が末だと決まったわけではあるまい。少なくとも今は幕府の世。こんな危険な文書を、いったい誰が書いたのだ？」
土方は、フッと笑って答えた。

「わたしが書きました。いえ、今、書いているのです」
「土方さんが？」
ブンドルはいささか驚いて、土方を見た。
いくらなんでも、幕府を守る役目の新撰組の土方が、こんな書物を書いているのは信じられなかった。
土方は、ブンドルを見すえて言った。
「滅びますよ、幕府は……。わたしが調べた情報を分析すれば滅びぬはずがない。まして、内部にドクーガなどというものが暗躍しているとすればね……。そしてわれわれ新撰組はこの国で最後の侍集団になる。農民出身のわれわれが、最後とは皮肉ですがね」
土方は続けた。
「近藤さんも、総司も、わたしも、武蔵野の農民の出身です。動乱の時代に生まれ、侍を夢みて新撰組を結成しました。いってみれば、たまたま関東に徳川幕府があったから、幕府側についたのかもしれません。しかし、今の世は、戦国時代とは違う。農民出の豊臣秀吉が天下を取ったような時代じゃない。幕府も諸藩も、がちがちに硬化した役人の世界で、どうやっても、下が上を追い抜けるはずがなかったのです。だからこそ、この時代に侍になろうとした農民のわれわれは、私利私欲とかかわりのないこの国を守る防人、いわば侍の理想を目指そうとしたのです。しかし、守ろうとしたこの国の幕府は、自分の身だけを守ろうとしているやつらばかりで、内部はがたがたでした。そしてそんな幕府の滅びの時を線香花火のように飾るのは、た

ぶんわれわれなんでしょう。その消えさる花火の記録のような書が、これです。よかったら読んでいただきたいのですが……」
「しかし、なぜ、このわたしに？」
ブンドルが聞いた。
「あなたがどこの国の人であれ、おそらく並の日本人以上に侍の精神を知っていると見たからです。この日本に侍がいなくなるなら、むしろ異国の人に侍の心を残しておいたほうがよい。ここで消えさるものならば、いつの世か、再びこの国に侍の心がよみがえるよう、異国に保存しておいたほうがよい。ふと、そう思いましてね」
「侍の美学ですか……」
ブンドルの言葉に土方は頷いた。
「読ませていただきます」
ブンドルは「幕末美学論」をふところに入れた。
茶屋の前で土方と別れたブンドルの傍らに、背の高い舞妓が現れた。
ブンドルと並んで歩けば、夜道に限り、さほど背の高さが見えずにすむレミーだった。
「近藤勇と土方、沖田は、ドクーガと戦う気だ」
ブンドルが、レミーに言った。
「強い味方ね」
レミーが軽く、明るく答えた。

しかし、ブンドルはそれには答えず、呟いた。
「滅びの美学……幕末美学論か」
軒先は、昼からの冷たい雨が降り続いている。ブンドルは雨を見て言った。
「春雨(はるさめ)じゃ、濡(ぬ)れていこう」
語学堪能(たんのう)のレミーも、この古い日本語は知らぬらしい。
「えっ、中華料理に行くの？　京都にあるのかな……」
ブンドルは、憮然(ぶぜん)とした表情で、
「それを言うなら春巻(はるまき)だろう」
「ううん、春雨、麻婆(マーボー)春雨……」
ブンドルは黙って雨の中へ歩きだした。
「冗談よ」
レミーは微笑して、そんなブンドルに傘(かさ)を差し出す。
そして、表情を引きしめて言った。
「祇園の舞妓さんたちの話を小耳にはさんだんだけど、新撰組の隊員たちの中では、陰で近藤局長たちの悪口を言う人が少なくないそうよ」
レミーは、祇園をさりげなくうろつき、新撰組や見廻組の中にどの程度、ドクーガが入り込んでいるのか調べていたのだ。
「近藤さんたちは、かなり孤立しているわけか……ことは、急を要するな」

ブンドルは呟いた。

＊

ブンドルと近藤、土方、沖田は、今後の方針を隊員たちには内緒にして話し合った。
「新撰組の中にもドクーガの手先がいるというわけか……」
近藤は、うめくように言った。
「最悪の場合、ここにいる四人以外、みんなドクーガの手先かもしれませんよ」
沖田が肩をすくめる。
「かんぐれば、考えられぬこともない」
土方が頷き、話を続けた。
「……そして、新撰組がドクーガの手先として完全に操られているのなら、われわれが狙っている反幕の浪士たちが、ドクーガの消したいと考えている人物ということになる。すなわち、その人物たちこそ、われわれ四人とともにドクーガを倒す味方だ」
「昨日の敵が、実は明日からの味方というわけか……」
近藤は、溜め息をついた。
「で、新撰組が第一に狙っている人物は？」
ブンドルが聞いた。
「坂本竜馬、高杉晋作、西郷隆盛……」

土方がふところから手帳代わりの紙を出して読み始めた。

「そいつらに会うしかあるまい」

近藤が即座に言った。こういうときの決断は、むやみやたらに早い男だ。

「会うったって、今、どこにいるんです？」

沖田があきれた表情で言った。

土方が紙を見ながら、ぼそりと……。

「明日は、三条通、河原町の宿屋、池田屋に集まっている」

「なぜ、歳さんは、それを知っている？」

近藤と沖田は呆然として土方を見すえた。

「情報収集は、武士としてのたしなみの一つです」

土方は平然と答えた。

「知っていたなら、今までにもやつらを殺す機会があったであろうに、なぜわしらに報告しなかった？」

近藤が、いささか不機嫌そうに聞いた。

「彼らは、反幕派とはいえ、この時代の星になれる男たちです……。しかし、今は、まだ、そこまでの輝きはない。星は輝いてこそ美しい。輝ける素質のある者を、石のうちに砕くのは不粋でしょう。輝いている星に戦いを挑んでこそ、われら狩人も侍として光り輝くというものです……」

近藤はポカンと口を開け、何も言えない。
沖田がクスクスと笑って言った。
「やれやれ、土方さんらしいな……。でも、そのお陰で、今回、連中と味方として会えるわけですよね」
「幕末美学論か……早めに読んでおこう」
ブンドルは土方を見つめ、ふっと呟いた。

＊

次の日の夜、ブンドル、近藤、土方、沖田は、池田屋に向かった。
後から鞍馬天狗姿のレミーとスギサクが、隠れながらついていく。
時は、まだ二月……。六月五日、新撰組が池田屋に斬り込んだ世に言う池田屋事件には、まだ四カ月も早かった。

＊

池田屋の前に出た夜鳴きそば屋で、白い息をはきながらそばをすすっている二人の男がいた。
一人は小柄——もう一人は巨大な相撲取り(すもうとり)だった。
岡田以蔵(おかだいぞう)とケルナグールだった。
「わしも、昔は、ボクシングといってな、殴り合いの試合で、世界一強い男を目指したもんじ

やったよ」
ケルナグールが、ぼそぼそとした口調で言った。
「そして、確かに世界一強い男になった。だがな、いつまでもそれが続くわけではない。体はぼろぼろになり、いつかは、わしと同じ、世界一を目指す男に倒される。残されるのは過去の栄光だけだ。それだけにすがってこれからを生きていかねばならない。おまえさんが何人斬ったかを自慢したところで、それはもう過去のことでしかない日が来る」
以蔵は、黙って聞いている。
ふっと、その目が怪しく光った。
池田屋の裏口に通ずる路地に、すっと、四人の男が入っていったのだ。
以蔵は、そばのどんぶりを置くと、ケルナグールに呟いた。
「そんでも、わしは斬りつづけちゃる」
刀を持つと、路地へゆっくりと歩いていった。

*

池田屋の二階の一室では、勝海舟が、坂本竜馬、高杉晋作、真吾そして医者姿のカットナルを含めた十数人の男たちと酒席をかまえていた。
「幕府および諸藩に暗躍する組織がある以上、浪士たちの蝦夷(エゾ)地移住計画は、あくまで秘密裏にやらねばならぬ。だが、それをどうやるかだ」

勝海舟が、酒を飲みながら言った。
高杉晋作や坂本竜馬は、黙ってぐいぐいとのんでいる。
他の一同も、酒のピッチは早い。
「いいのか？　そんなに飲んで……。大切な会合だってのに酔いつぶれたらどうする？」
真吾が竜馬にささやいた。
「いいち、大切な会合じゃからこそ、酒が必要じゃ……。腹を割って話すにゃ酒が一番じゃき」
……それにしても……
と真吾は思う。
この時代の若者は打ち合わせといえば、酒、酒、酒。朝から晩まで酒びたりだ。
カットナルもそんな真吾の気持ちを察したのか、頷いて見せた。
……これでは、人斬りにやられる前に、酒で肝臓をやられてしまう。どっちにしても長生きはできんぞ……
だが、医者としてのカットナルは、酒を止めろとは誰にも忠告したことはなかった。
酒で命を縮めるのは、その人間の生き方に対する姿勢だ。それをよしとする人間を止めても仕方がないではないか……。生き急ぎ、死に急ぐ……。死が目前にあるから酒を飲むのか。この時代には、そんな若者が、多すぎることも確かだった。
そして、そんな若者の一人、岡田以蔵は、池田屋の裏口でいきなり四人の侍に斬りかかった。

「死ね！　新撰組！」
間髪を入れず、沖田が刀で受け取めた。
「みんな、早く中へ！　ここは、わたしが食い止めます」
そして、苦しそうに咳込んだ。
「沖田君、君は体が……わたしが、かわろう」
ブンドルが刀を抜いた。
「いえ、こいつは狂犬です。それが狂犬であるわたしには分かる。ブンドルさんのやさしい強さは通じません！　さ、早く。みなさんには、会わねばならぬ人がいるはずです」
確かに、この騒ぎが中に知れれば、会いたい浪士たちが逃げてしまうだろう。
「総司、まかせたぞ」
土方はそう言うと、ブンドルの手を引くようにして池田屋に飛び込んだ。
狭い階段を駆けあがる。
二階のふすまをさっと開く。
「尊皇攘夷派の浪士諸君！」
近藤が、ドスの効いた声で叫んだ。
かなり酒気をおびた一同はぼんやりと近藤、土方、ブンドルの三人を見た。
真吾は、呆然と呟いた。
「ブンドル……。どうして新撰組に……」

「新撰組？」
その呟きに我に返った一同は、騒然となった。
「やられてたまるか！」
気の早い高杉と中岡慎太郎が、刀を抜いて近藤に斬りかかった。
だが、部屋の天井は低く、かもいに刀が引っかかる。
「待て！　わしらは、諸君を斬る気はない！」
だが、その声も興奮した高杉と中岡には聞こえない。
素手で近藤につかみかかってきた。
「止めんか？」
近藤と土方は、高杉と中岡を投げとばした。
それを合図にしたように、浪士たちは刀を取るのも忘れ、近藤たち二人に殴りかかっていった。
刀を振り回していては、味方まで傷つけかねない狭さでもあった。
「真吾君、止めさせろ！　われわれは敵ではない」
ブンドルが叫んだ。
竜馬はキョトンとし、真吾とブンドルを交互に見た。
「知り合い？……敵ではない？　どういうこっちゃ？」
そのときだった。

別のふすまが、サッと開いた。
「おひかえなすって！　おひかえなすっておくんなさい！」
旅がらす姿のキリーだった。
突然の闖入者に、一同は呆然とキリーを見つめた。
「さっそく、おひかえなすっていただき、ありがとうございます」
「ひかえたわけじゃないが、おまん、誰じゃ？」
竜馬が聞いた。
「手前、生国とはっしまするは、ニューヨークでござんす」
そう言ってから、一同を見たキリーは、真吾とブンドルを見つけすっとんきょうな声をあげた。
「真吾、ブンちゃん、どうしてここに……」
真吾もブンドルも聞きたい気持ちは同じだった。
だが、いきなりキリーを突き飛ばすようにして、二人の男が刀を交わしながら、もみあって斬り込んできた。
沖田と以蔵だった。
「やはり、やる気だ！」
高杉が叫んで、近藤にむしゃぶりついた。
それを合図にしたように、再び掴み合いが始まった。

「やめんかい」
ケルナグールが飛び込んで来て、もつれあう一同を引き離そうとした。
ケルナグールが喧嘩の仲裁に入るというのは、相手を殴り倒し、止めさせることだ。
火に油を注ぐに等しい。
たちまち、部屋の中は大乱闘だ。こうなったら酔いも手伝って、敵も味方もなくなった。
同じ尊皇攘夷派といっても、意見の違いでいがみ合いの絶えない浪士たちだ。
「やっちまえ！　やっちまえ！」
「みんな、やっつけろ！」
まるで喧嘩を楽しんでいるように、殴り、蹴り、摑み合った。
廊下からその様子を窺っていたのは、天狗姿のレミーとスギサクだった。
「ったくもう……、男どもときたら……。スギサク君、こんな大人になっちゃ駄目よ……」
そして、つかつかと部屋に入ると、四十四口径の銃を抜いた。
窓の障子を開けると、外に向けて撃った。
ドーン！
轟音に目を丸くした一同は、レミーに注目した。
「天狗！」
高杉が呟いた。
「天狗といえば……異人の忍びを助ける輩……。いわばわれらの敵……？」

一同は、ずいっとレミーににじり寄った。
「あ……ちょっと……待って！」
酔いと乱闘で血走った男たちの視線に、レミーはいささかあせった。
「待て！　天に名高き尊皇攘夷の武士の諸君、よってたかって女を殺めるのか？」
ブンドルがりりんとした声で言った。
「女？」
一同がざわめいた。
「もうよかろう……、レミー」
ブンドルの言葉にレミーは肩をすくめ、覆面を取った。
「どうも、はじめまして……」
間が抜けた挨拶だと思ったが、それしか言いようがなかった。
「あーあ、どうなっとんじゃ」
もう、うんざりだとでもいうように、高杉はどっかりとあぐらをかくと、酒をぐいっと飲んだ。
「新撰組に、異人に、女に、相撲取りに、おまけにガキまで……」
高杉は、大きく溜め息をついた。
「ま、今は乱世じゃき、なにが出てきてもおかしかないぜよ。そういう時代じゃき」
竜馬があごの不精ひげをさすりながら、わけ知り顔で言った。

「鬼や幽霊が出んだけましかもの」
「鬼や幽霊は出ぬが、毒蛾が出る」
ブンドルが言った。
「あん？」
「幕府側、尊皇攘夷派の両方に巣くう悪魔の名だ。そしてその本拠地は、おそらく北海道、今の蝦夷地だ。この女性がそれをよく知っている」
「蝦夷地？……」
一同はブンドルを見た。
「その蝦夷地は、われわれの移住先ではないか」
高杉がうめくように言った。
「話を聞こう……、諸君」
勝が、席に座って言った。
一同も、同じ気持ちで、それぞれの席に座った。
「新撰組の諸君にも酒を……。今日の宴は長くなりそうだ」
勝が池田屋の主人を呼んで、そう言った。
勝とこの宿の主人は昵懇の間柄のようだった。
その日、歴史に記されていない池田屋の宴会は、夜遅くまで続いた。
酒豪の名が高い浪士たちの中にも、酔いつぶれるものも多かった。

だが、竜馬とブンドル、そしてレミーは酒に強い。そして真吾とカットナルは酒を飲まない。
四人は、ほとんどしらふに近かった。
竜馬は、さっきから、レミーの四十四口径が気になって仕方がないようだった。
「それは、なんというピストルかの？」
「え？　うん、スミス・アンド・ウェッソン、四十四口径、マグナム」
「スミス・アンド・ウェッソンかあ……。あねさん……、ええもの持っとるのう……」
「あねさん？」
「あ、いや、おまん、女子にしちゃでっかいし、どっか、わしの姉さんに似とるんじゃ……。の、真吾先生……」
「え？　うん……」
真吾は竜馬の姉、乙女とレミーを比べ、どこか照れ臭そうに頷いた。
だが、レミーは真吾の気持ちに気づくはずもなく、
「おばさんの次は、あねさんかあ……。なかなか女の子にはなれないなあ……」
溜め息をついただけだった。
そのとき、ブンドルは宴席に沖田がいないことに気づいた。
ブンドルはカットナルに言った。
「実は一人、病気を治してもらいたい男がいるのだが……」
「ん、どこが悪いんじゃ？」

「おそらく胸の病だ」
「なら、わしの得意じゃ。かまわんよ」
カットナルは気楽に答えた。
だが、カットナルは、その男、沖田と、その日以来、いつもすれ違いで歴史上会うことはありえなかった。

＊

そのころ、沖田はスギサクと池田屋の物干しで星を見ていた。
「おいら、いつか、あの星の世界へ行ってみたいな……」
スギサクが沖田に言った。
「そうだね。行けたらいいね」
沖田は、微笑した。
遠くを見つめる沖田とスギサクの目は、どこか似ていた。
同じころ、岡田以蔵は一人で池田屋の裏口に座り込んで酒を飲んでいた。
以蔵はくりかえしくりかえし、同じ言葉を呟いていた。
「いったい、俺は誰を斬ればいいんじゃ……。いったい、誰を……」

＊

そして、この日から四ヵ月後、一八六四年、元治元年六月五日、同じ池田屋で、あの歴史に名高い池田屋事件が起こるのだった。

第八幕

実録池田屋事件あるいは……

「さらば京の日々」

元治元年、一八六四年、六月五日——夜。

近藤勇は、いらついていた。

その日、捕えた尊皇攘夷派の浪士、古高俊太郎を拷問した結果、志士たちが新撰組を急襲し、京都を火の海とし、その混乱に乗じて天皇を奪い長州に移すという計画のあることを知った。

しかも、その夜、計画を練るための会合が、京都三条の池田屋か、四国屋のいずれかで開かれるという。

その日、新撰組にいる二百人近い隊士のうち百人ほどは大阪に出張中、残りは腹をこわして寝ていて、動ける隊士は三十人ほどしかいなかった。

この数では、とても志士たちを攻撃するのは無理だ。

近藤は、京都守護職と京都所司代に連絡をとって、応援を求めた。

だが応援はなかなか来ない。

新撰組が出撃する予定の夜八時になっても、守護職や所司代は動く気配がなかった。

守護職も所司代も、尊皇攘夷派を刺激するのを恐れ、攻撃をとまどっていたのだ。

彼らにとって新撰組は、しょせん成り上がりの田舎侍集団にすぎない。

新撰組にやらせるだけやらせて、新撰組が勝ちそうになったら、「ご苦労様」と出ていこう。

新撰組が負ければ、田舎侍たちが勝手に尊皇攘夷派になぐり込んだもので「……まことに遺憾に存じます。今後は前向きに善処します」と、尊皇攘夷派の各藩にはお茶をにごしてごまかそう……、そんな守護職や所司代の気持ちが見え見えだった。

……われわれは、しょせん幕府にとって使い捨ての野良犬にすぎない……

近藤の腹は煮えくりかえっていた。

……ならば、われわれだけでやるしかあるまい……。だが敵は、池田屋か、四国屋か？

……

近藤は新撰組の使える隊士を二組に分けた。

土方歳三のひきいる二十五名の隊士には四国屋に向かわせ、近藤は選りすぐった手練の隊士、沖田、永倉、藤堂、原田を連れ、わずか五人で池田屋に向かった。

池田屋に着いた近藤に、入口の近くにいた男が声をかけた。

かねてより池田屋に潜入させていた隊士の山崎だ。

「二、三十人は中にいます」

……しまった。やはり敵はここ池田屋だったか……。しかし、五人で勝てるだろうか……
一瞬、不安がよぎったが、次の瞬間、近藤は池田屋に飛び込んでいった。
「御用改めだ！」
近藤は池田屋の主人に一言、そう言うと、二階への狭い階段を駆け上がった。
「何ごとだ」
浪士の一人が階段の上から顔を出した。
土佐の北添信磨という男だった。
近藤はものも言わずに、北添の顔面に斬りつけた。
北添は悲鳴をあげて階段をころがり落ち絶命した。
後に階段落ちといわれ、芝居や映画で、スタントマンの見せ場になるシーンだ。
近藤は二階の部屋に沖田とともに駆け込んだ。
「新撰組だ！」
「わずか数人で……笑止だ！」
浪士たちは虚勢を張って刀を抜いて騒ぎだしたが、近藤と沖田はものも言わず、どんどん斬りまくった。
下では、逃げる浪士たちを永倉と藤堂が斬る。
やがて、土方の別動隊が走り込んで来た。
「四国屋には誰もいなかった。近藤さん、手伝うぞ！」

狭い池田屋は、さらに大乱闘になった。
二時間がたち、新撰組の勝ちが明らかになったところ、やっと守護職や所司代の軍が応援に出陣してきた。
その数、三千人……、斬り込んだ新撰組の数の百倍の数だった。
戦いはほとんど終わり、守護職や所司代の軍のやることは、後かたづけしかなかった。
新撰組は藤堂と永倉が傷を負い、沖田は胸の病に無理がたたったのか血を吐いた。
志士側は七人が死亡、召し捕られた者、多数。
死亡したうちの肥後藩の宮部鼎蔵など、生きていたら明治維新後に必ず首相になったといわれた人物だ。
京都にいた尊皇攘夷派は根こそぎやられ、この事件で、明治維新は一年遅れたとさえいわれた。
なお、この会合に出席する予定だったが、行き違いであやうく難を逃れた志士の一人が、桂小五郎だった。
これがさまざまな証言による、歴史上、有名な池田屋事件だが……、ほんとうは……？

＊

六月五日、夜――京都は〝祇園祭〟の宵山に当たる。

宵山というのは祭りの前夜祭で、町中に、コンチキコンチキというはやしの音が流れている。
祭りへの期待に胸ふくらます町人たちとは裏腹に、近藤勇はいらついていた。
今は夜、八時――。
京都焼き打ちを計画する浪士たちの会合の場は四国屋……、深夜十二時の攻撃を前に、京都守護職、所司代は三千の兵を待機させている。
そのほとんどが、ドクーガの息のかかった兵隊だった。
幕府内部に食い込んだドクーガは、これを機会に、今後、日本を動かすであろう優秀な人材を根こそぎ、抹殺(まっさつ)しようとしている。
なんとしてでも救わねばならない。
そして、その人材を秘密裏に北海道へ送り、ドクーガの日本支部の中枢(ちゅうすう)と戦わせる。
それが勝海舟(かつかいしゅう)や坂本竜馬(さかもとりょうま)、そして新撰組やゴーショーグン・チームの考えだした筋書きだった。
そのためには、三千の兵が動く前に新撰組が動かねばならない。
浪士たちが四国屋に集まることは古高俊太郎の密通で、新撰組内部はおろか、守護職、所司代にまで知られている。
その事実は坂本竜馬や高杉晋作(たかすぎしんさく)を通じて、会合の中心人物、桂小五郎や宮部鼎蔵には知らせてあった。
もうすぐ、四国屋に集まった志士たちは襲撃の危険ありと知って、会合場所を池田屋に変更

するはずだ。
だが、その浪士たちの中にドクーガの手先がいれば、すぐにその事実も、守護職や所司代、見廻組（みまわりぐみ）に知らされてしまうだろう。
そうなれば、兵は池田屋に殺到し、たちまち浪士たちは抹殺されてしまう。
……その前に手を打たなければならぬ……
……早く、浪士たちよ、池田屋に到着してくれ……
近藤は祈るような気持ちで時を待った。
一時間がたった。
池田屋を見張っていた山崎から、知らせが入った。
「池田屋に、三十人近い浪士が集まりました。どうやら四国屋から流れて来たようです」
「よし、歳（とし）さん、かねてのてはずどおりだ」
「分かった」
土方は頷（うなず）き、二十五人の隊士を連れ、四国屋に向かうことにした。
新撰組にもドクーガの息がかかった者がいるかもしれない。
近藤は疑いのある者を大阪に出張させ、遠ざけた。
さらに、カットナルから貰（もら）った下剤を隊士たちに飲ませ、下痢（げり）を起こさせる。
それでもなお残る二十五人の不審の者は、土方が四国屋に連れて行き、出動したと見せかける。

四カ月前の池田屋での勝海舟との出会い以来、新撰組内部でドクーガの息がかかっていないと確信できる者は、土方と沖田、ブンドルのほか、永倉、藤堂、山崎、原田、そして山南敬助という五人の隊員しかいなかったのだ。

「たった五人か……。二百人をこえる隊員の中で信頼できるのは……」

近藤のうめき声に、沖田は明るく答えた。

「もともとよせ集めの新撰組です。五人もいれば立派ですよね。ねえ、ブンドルさん」

「うむ」

ブンドルは苦笑した。

「たしかにわたしですら、この人生で信頼に足る人物は、いままで五人しかいないのだからね」

信頼に足る五人……。ブンドルは、ゴーショーグン・チームのメンバーを思っていた。

「ま、仕方あるまい」

近藤は刀架から刀を取ると、芹沢鴨暗殺にも参加した山南敬助に声をかけた。

山南は北辰一刀流の達人だが、学問好きで、人斬りを好まない男だった。

「山南君、後は頼んだよ」

「うん、他の隊士は何があっても、屯所に引き止めます。安心して行ってください」

近藤たちがこれから行う池田屋襲撃に、ドクーガの息のかかった隊員がのそのそ出てこられては困るのだ。

山南はここ数カ月、近藤や土方の新撰組運営に声高に反対を唱えていた。
そして、新撰組の反近藤勢力の中心人物とさえ言われだした。
「山南君には、嫌な役を押しつけてしまったな」
「ま、刀を振りまわすよりはむいていますよ」
山南は新撰組の内部にいるドクーガ勢力を調べるために、あえて近藤や土方に逆らうような言動をとっていたのだ。
「それにやはり、土方流武士道には、ちとついていけませんしね」
「ま、人それぞれ、乱世に生き方はあるさ」
土方は山南にふっと笑いかけると、屯所の前に集めた二十五人と出て行った。
「新撰組に信頼できるのがわずか五人として、池田屋の攘夷派に信頼できるのは、いったい何人いるのかなあ……」
沖田がポツリと言った。
「あのう……」
池田屋を見張っていた山崎が、首をひねりながら呟いた。
「なにかな？」
とブンドル。
「一つ気がかりなことが……」
「ん？」

「あいつが来ないんです。当然いるはずのあいつが……」
「誰だ？」
近藤が聞いた。
「桂……桂小五郎……」
ブンドルは何もいわず、すっくと立った。
「諸君、いそごう！」
桂小五郎――後の木戸孝允。明治維新以後、日本を動かした人物の一人だった。

*

京都見廻組の詰所――。
見廻組幹部、佐々木只三郎は、夜食のニシンそばをすすりながら、ぶつぶつと呟いていた。
「くッ？　新撰組のやつら……、田舎者のくせにでしゃばりやがって……」
見廻組と新撰組は、幕府の京都警備のいわばライバルである。といっても、見廻組は幕府の旗本に属する警備隊であり、新撰組とは一線を画する正統派だという自負があった。
しかし、このところ、京都で活躍の目立つのは決まって新撰組であり、今回の四国屋襲撃計画も新撰組が中心になると聞けば、面白いはずがなかった。
「誰が田舎者の手伝いなんかするか」
守護職と所司代から四国屋への出撃を依頼されたものの、佐々木はどうしても乗り気になれ

なかった。
「あのう……」
そのとき、詰所の戸を開けて、薄汚いボロをまとった男が入って来た。
「実は、これを渡してくれと頼まれまして」
佐々木は男の体臭に鼻をつまみながら、
「なんだ？……」
男のさしだした紙きれを受け取った。
「志士たちは四国屋にあらず、池田屋にあり……」
紙きれにはそう書かれてあった。
「これは……」
佐々木が男に目をやったとき、もうそこに男はいなかった。乞食に変装するのは桂小五郎の得意技であった。
「敵は池田屋にありか……。こんなものを信じられるか……」
佐々木はしばらく紙きれを見つめた。
「このまま四国屋に出かけて行っても、手柄は新撰組のもの……。ならば……ガセネタでも賭けてみるか」
佐々木は詰所にいた六人の見廻組を連れて、夜の町に出ていった。
数分後、守護職と所司代に早馬がついた。

「攘夷派は四国屋にあらず。池田屋にあり」
守護職は、ただちに兵を池田屋に向けるよう指示した。
だが、しょせん役所仕事だった。
上官からの命令が末端にとどくまで、二時間はかかってしまった。
その二時間が、近藤たちの勝負だった。

＊

午後十時。
翌日の祇園祭に胸をふくらませ、うかれでた町人たちの雑踏(ざっとう)の中を、近藤、沖田、永倉、藤堂、原田、そしてブンドルが歩いていく。
三条小橋ぎわの池田屋。人通りは少なくない。
京都は冬の寒さもきびしいが、夏の暑さも並ではない。
家にいるよりは、すこしでも夜の涼しさを求めて、外を出歩く人も多いのだ。
ブンドルはそんな人通りを見つめながら、フッと微笑した。
今、横を通りすぎたのは、町人姿の真吾だ。
池田屋の前のそばの屋台には、ケルナグールと岡田以蔵(おかだいぞう)がいる。
池田屋からそう遠くない京都先斗町(ぽんとちょう)のいりくんだ路地には、レミーとスギサクがいるはずだ。

そして、キリーとカットナルもどこかに……。
近藤は、池田屋の戸口をガラッと開けた。
残りの五人も、ギラリと刀を抜く。
そのうち一人は槍を派手にブルンブルンと振りまわし、通行人たちに見せた。
「ヒーッ」
通行人から悲鳴がもれた。
……新撰組だ！　鬼の新撰組が、誰かに襲いかかろうとしている。その誰かは、池田屋にいて……。
町人の誰もが、後に語られる池田屋事件を大なり小なり予想した。
ガタン！
池田屋の戸が勢いよく開かれた。
近藤は池田屋の中に駆け込むと、池田屋の主人に叫んだ。
「御用改めだ！」
外の通りに聞こえるような声だった。
池田屋の主人は頷いた。
近藤は、タッタタッタッと二階へ駆け上がった。
浪士の一人が顔を出した。
近藤がささやいた。

「貴殿は……」
「北添です」
「うむ」
近藤は一瞬、刃の峰をかえして、北添に斬りかかった。
「ギャー!」
北添は、侍としてはみっともないほどの悲鳴をあげて、階段をゆるゆると落ちていった。
階段からふっ飛ぶように落ちた、後の映画や芝居で見る階段落ちにくらべたら、ずいぶん体に気をつかった落ち方だった。
近藤は階段を駆け昇ると、二階の部屋に飛び込んだ。
続いて、沖田とブンドルが飛び込む。
「新撰組の近藤だ!」
近藤の言葉を聞いて、いきなり宮部鼎蔵が、抜刀(ばっとう)して斬りかかった。
ガシン、受け取めた近藤の刀から火花が散った。
「な、なにをいきなり!」
近藤は、いささか驚いたように宮部に言った。
「いきなり襲いかかってきて、なにをいきなりもあるかッ!」
宮部はそうわめくと、さらに近藤に刀を叩(たた)きつけた。
沖田は、ふっとブンドルにささやいた。

「また殺意のない斬り合いか……」
「他言は無用！　殺意のあるものもいる」
「えっ？」
沖田は、刀を抜く志士たちの目を見た。
殺気の満ちた目の男たちが、たしかに志士たちの中にいる。
宮部は近藤に刀を叩きつけながら、廊下のはずれに来た。宮部はささやいた。
「近藤さん、ドクーガは思いのほか尊皇攘夷派にしみこんでいる。この池田屋にドクーガに関わりのない者は七人しかいない」
「なに!!」
近藤の目がカッと見開いた。
「実は桂さんが一番あやしかった。そしてここにいるほとんどがドクーガの手先だ。わたしはそれに気づいてから、われわれの計画を彼らに話してはいない。いいですか、われわれにとって味方は、ここに七人しかいない」
「七人？」
宮部は、すがるような目で近藤に言った。
「だから、七人だけ殺してくれ」
「……わかった。だが、どうやって見定める？」
ブンドルが志士たちと斬り結びながら、廊下に飛び出してきた。

「殺意……殺気です。それを見きわめるしかない」
ブンドルは、近藤にささやいた。
「よし、宮部さん、死んでもらう！」
近藤は、宮部に斬りかかった。
「ギャーッ！」
宮部は手で宙をつかみ、大袈裟に倒れ、窓から屋根に転がった。そしてそのまま、つぼ庭に落ちた。
庭に面した部屋のふすまが開いた。
池田屋の主人が顔を出した。
「これを……」
縁側に、女物の着物が置かれてあった。
宮部はすばやくそれを肩にかけると、
「かたじけない」
池田屋の裏口から飛びだしていった。
だが表通りに出たとき、宮部は呆然と立ちすくんだ。
新撰組とは別の一隊が立ちふさがったのだ。
「逃がしはせんぞ！」
見廻組の佐々木只三郎が叫んだ。

「新撰組が打ちもらしても、見廻組はそんなやわではない！」
佐々木は刀を抜いて、宮部に斬りかかった。
「ドン！」
瞬間、深夜の時を告げる鐘のような衝撃音がして、佐々木の刀が粉々になった。
「な、なにっ！」
街路の人ごみの中で、背の高い舞妓が宮部に向かって手を振った。レミーだった。
レミーの銃弾が、佐々木の刀を撃ちくだいたのだ。
宮部は舞妓に領くと、路上を走り去った。
「待て！」
佐々木と六人の見廻組は後を追う。
舞妓は宮部の手を引くと、げたを放りなげるように捨てて、走りだした。
そこは先斗町の飲み屋街の狭い道――。
人通りのはげしい道を舞妓と宮部は、転がるように走る！　走る！
入りくんだ路地の一つからスギサクが顔を出した。
舞妓は領くと、宮部とともに無人の路地にとびこんだ。
佐々木と見廻組も、後に続いた。
人ひとりがやっと通り抜けられるような路地は、迷路のように複雑に入りくんでいる。
しかし、京の町をよく知る見廻組だ。

その道が、先斗町の外へ抜けられるのをよく知っていた。
いや、知っているつもりだった。
だが、佐々木と見廻組は立ち止まった。
道は行き止まりだった。目の前に壁があった。
「馬鹿な！」
そのとき、背後で悲鳴がした。
見廻組の最後尾にいた男が、肩を押えて倒れた。
後ろから、誰かが斬りかかったのだ。
だが路地の闇の中では、いくら目をこらしても、斬りかかった者の姿はもう見えない。
……これでは袋のねずみだ……われわれが何人いようと、狭い路地では一人ずつやられてしまう……
恐怖が見廻組を襲った。
「みんな！　路地からでるんだ！」
佐々木が叫んだ。
見廻組は見えない敵に刀をふりまわし、わめきながら路地から飛びだした。
路地の外は先斗町の通り――。
祇園祭の宵山のはやしが陽気に流れている。
抜刀して飛びだしてきた見廻組に、通行人たちが悲鳴をあげて逃げた。

「みんな、不粋なものをしまえ」
佐々木は見廻組に刀を収めさせると、今、出て来た路地を見つめた。
……確かに、この路地は抜けられるはずだ……だとすると、あの壁は……
だが、考える暇はなかった。
池田屋では、新撰組が志士相手に大活躍している。
佐々木には焦りがあった。
「池田屋に戻るぞ！」
佐々木はそう叫ぶと、池田屋に向かって走った。

＊

「追手は消えたぞ」
岡田以蔵が、路地の壁に向かって声をかけた。
見廻組を背後から斬りつけたのは、以蔵だった。いつもなら一撃で相手を倒すはずの以蔵だったが、今日はあえて敵の肩を斬って、命までは狙わなかった。
追手を脅すだけで、十分、用を果たせたのだ。
斬るための刀ではなく脅しのための刀……人斬り以蔵にとってはじめての刀の使い方だった。
以蔵の声に答えるように、壁がゆっくりとめくれあがっていった。
ケルナグールが、壁を巻いている。

よく見れば、その壁は布で作られたカーテンのようなものだった。布のむこうに、舞妓姿のレミーとスギサク、そして宮部がいる。

さらに、近藤に最初に斬られたはずの北添も立っていた。

「あと五人か……」

宮部が呟いた。

「いや、あと二人だ」

三人の志士を連れた真吾が、路地のわきから現れた。

真吾も、壁に似せた布のカーテンをこわきにかかえている。

「京の町の路地は、まるで迷路だ。こんな布きれでも、カモフラージュになる」

真吾は肩をすくめて笑った。

*

池田屋では悲鳴と怒号、刀のぶつかりあう響きが絶え間なく続いていた。

二階に駆け上って志士たちと斬り合っていた近藤、沖田、ブンドルの三人は、すでに七人の志士たちを斬殺していた。

斬り込んで三十分ほどしたころ、池田屋の外が騒がしくなった。

「近藤さん、四国屋には誰もいなかった。待たせて悪かった！」

土方の声が聞こえた。

二十五名の新撰組、土方別動隊が駆け込んで来たのだ。
別動隊は、志士たちに襲いかかった。
近藤が叫んだ。
「もはや勝負は決着がついた。殺さずに生け捕りにしろ」
もう、すでに三十人近い志士たちのほとんどが、近藤たちの刀を受けて傷ついている。
近藤は回りに聞こえるような大声で、ブンドルと沖田に言った。
「味方のけが人を頼む」
「分かった！」
ブンドルと沖田は、血にまみれてうずくまっている二人の新撰組隊士に駆け寄って、抱きあげた。
「しっかりしろ」
二人の隊士は頷いた。
だがその二人は新撰組の志士ではなかった。新撰組の羽織こそまとっていたが、池田屋で即死したはずの志士二人だった。
「これで七人ですね」
沖田は志士の肩を抱きながら、微笑した。
そして、いきなり体をえびのようにまげて、むせた。
口から血がふきだした。胸の病だった。

「総司君……」
「わたしにかまわず、早く二人を！」
土方が沖田を抱きかかえ、ブンドルに言った。
「総司はわたしにまかせろ」
たしかに、殺されたはずの志士二人にとって、ここに長居は危険だ。
ブンドルは後ろ髪をひかれる思いで、二人に肩を貸しながら、池田屋の外に出た。
そのとき、佐々木の率いる見廻組とすれ違った。
佐々木も、見廻組も、ブンドルと二人の志士を疑う暇がなかった。
「見廻組、助だちに参上！」
佐々木がわめいた。
近藤が血まみれの刀を持って出てきて答えた。
「かたじけない。しかし、すべて終わった。新撰組がすべてをやった。見廻組ではなく、われら新撰組がな……」
近藤は、歯ぎしりする佐々木にニヤリと笑いかけた。
ブンドルと二人の志士は、先斗町の路地にもう姿を消していた。
池田屋の闘いが片づいたのは、近藤たちが池田屋に斬り込んでから二時間後の深夜十二時近かった。
やっとそのころになって、守護職や所司代の三千人もの兵が池田屋に駆けつけた。

ただちに、撃ちもらしたかもしれぬ志士たちを追って、京都中をさがし回ったが、たいした成果は得られなかった。

結局、池田屋で七人の志士が殺され、二十三人が捕縛(ほばく)された。

七人の死体は近くの寺に放置され、暑さも手伝って、役人が身許(みもと)を調べたときは、顔の区別もつかぬほど腐敗していたという。

もちろんそれが、医者カットナルが近くの墓地から持ってきた別の人間の死体だとは、誰も気づかなかった。

当時の京都は乞食や行き倒れが多く、身許の知れぬ死体は数限りないほどあったのだ。

＊

池田屋から新撰組が屯所にひきあげるころ、鴨川(かもがわ)を一隻の舟が大阪を目指して進んでいた。

死んだはずの七人の志士とゴーショーグン・チームの面々が乗っていた。

「あれだけの志士がいて、たった七人か……」

宮部がいまさらのように溜め息をついた。

「数が多ければいいというものでもあるまい。問題はその人間の質だ。大阪に行けば、坂本竜馬や、高杉晋作たちも待っている」

ブンドルが言った。

「しかし、桂小五郎までドクーガの息がかかっているとは……」

真吾が呟いた。
「おそらく本人はそれと知らずに動いているのだ。ドクーガは、その存在を自分の手先にもなかなか知らせない。桂は長州藩のお家大事を考えたのだろう。こういう男はなんにしろ、生き残るタイプだ」
事実、桂小五郎はその後、木戸孝允と名を変え、明治の元勲と呼ばれるようになった。
「だが、ここまで、ドクーガがこの国の上層部に食い込んでいるのだ。ことは急を要するな……」
真吾が言った。
「京都も、これが見おさめね」
川面に聞こえてくる祇園ばやしを聞きながらレミーが呟いた。
「そう、次は北海道だ……この夏は涼しく過ごせそうだぜ」
舟の櫓を持つキリーが言った。
翌日、一同は大阪から清水港へ向かった。
清水の次郎長が用意した舟だった。
「清水へ？……直接、北海道へ行かないの？」
レミーが真吾に聞いた。
「敵は近代兵器乱用のドクーガだ。いくら幕末だからといって、刀や鉄砲だけで勝てるとは思えない。こちらにも、それなりの準備がいるさ」

「それなりの準備?……」
「敵がドクーガなら、やっぱりこっちはゴーショーグンさ」
真吾は、ふっと笑った。
レミーはもともと、ゴーショーグンという名が巨大なロボットの名であるのを思いだした。
「ゴーショーグンって、まさか……、戦国魔神の……」
「さあ、どうかな……」
真吾は、ニッコリと笑った。
いずれにしろ、涼しいはずの北海道の夏はドクーガとの闘いで熱くなりそうだった。

第九幕

北帰行（ほっきこう）あるいは……

「豪将軍発進！」

富士山が見下ろす街道を、真夏の太陽がじりじりと照りつけている。

清水港から沼津に向かう東海道だ。

ザッ！　ザッ！　ザッ！

陽炎だつ街道を汗をしたたらせながら、足早に進む渡世人の一団がいる。

すれ違う旅人たちは、道を譲りながらささやき合った。

「ありゃ、次郎長一家だぜ！」

「あの急ぎようじゃ、また、どっかの一家と喧嘩だな」

最近、売り出し中の清水の次郎長一家だ。

近在の親分衆との抗争が絶えなかった。

土地の役人たちも毒を以て毒を制せとでも考えたのか、やくざたちの喧嘩騒ぎには見て見ぬふりをしている。

もっとも真相は、それぞれの親分衆から受け取る賄賂が少なくなく、どっちつかずの中立を装っているのにすぎないのだが……。

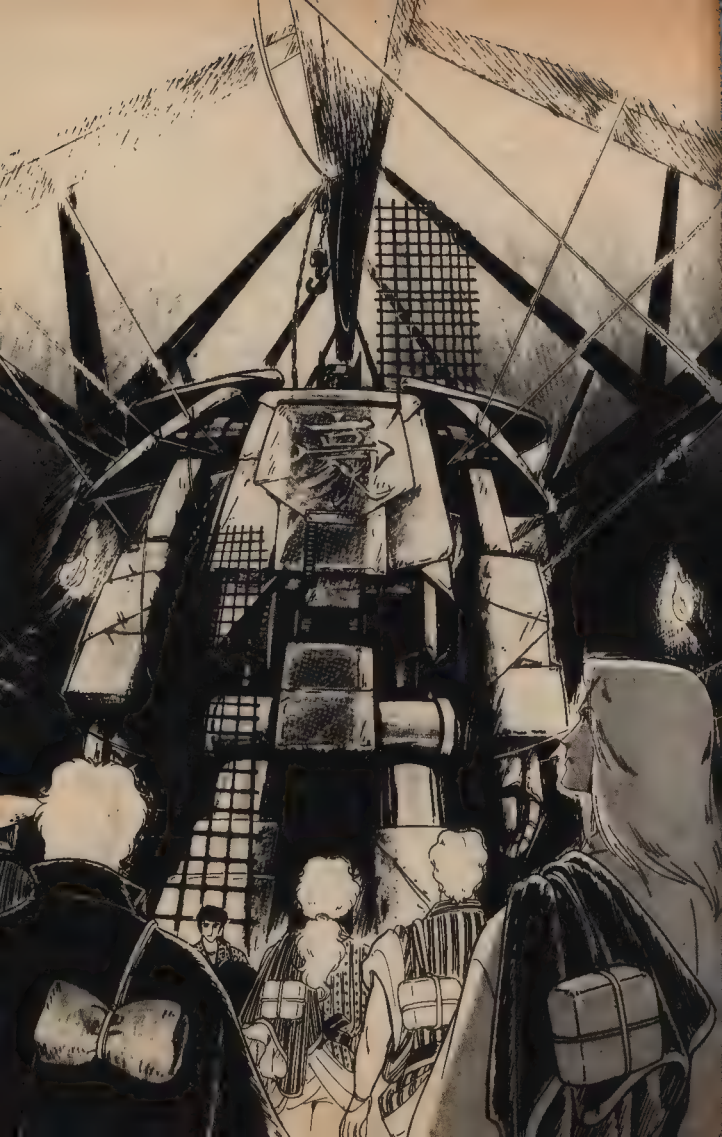
旅人たちが、その一団を喧嘩に向かう次郎長一家と思い込んでも不思議はなかった。
だが、一団は沼津を過ぎ、夜になると東海道を外れ、伊豆半島へ向かった。
伊豆半島には、次郎長と対立できるほど勢力を持った一家はいないはずだった。
しかし、そんな疑問を伊豆の村の人々が感じる間もなく、一団の足音は伊豆の山々の闇の中に消えた。
次郎長一家の抗争事件は数多く記録されているが、このころ、伊豆で喧嘩があったという記載は一切ない。

＊

満天の星――。岩に寄せる波が、ゆるやかなリズムを響かせている。
普通なら波の浸食で、それなりの険しさを見せる伊豆の海岸線だが、なぜか崖の上のそこだけは、半月型のかまぼこのような小山がつきだしている。
ガサッ！　茂みの揺れる音がして、一人、また一人、人影が小山の下に現れた。
いつの間にか人影は数十人に増えた。
あの渡世人の一団だ。
その中の一人が三度笠を取って言った。
「べりいには〜どなろうどをおつかれさんでした。ここが、勝の旦那のふぁくとりいでさあ」
清水の次郎長だった。

ほかの渡世人たちも三度笠を取った。
ゴーショーグンのメンバーとスギサク、そして池田屋で死んだはずの浪士と、竜馬や高杉たちだった。
「ここは伊豆のどのあたりなんだ？」
高杉が聞いた。
「戸田のあたりの入江でさあ……あんだ〜はんど(下手)ね」
次郎長がゴーショーグン・チームを気遣ったのか、理解不能な英訳をした。
「ここが、どこがどこやらわからんけど、わしらが行くのは、北海道じゃなかったのかのう？」
ケルナグールが首をひねった。
「ここが、いちばんあれを作りやすかったんだ」
真吾が答える。
「さよう、ここは伊豆韮山にも近い」
小山のすそが扉のように開いて、勝が現れた。
「韮山？」
とブンドルが聞く。
「うむ、韮山には大砲を鋳造するための反射炉がある。黒船来航のおり、危機を感じた韮山の代官が作ったものだ」

「うむ、ドクーガに勝つにゃ、あねさんの持っちょるピストルのスミス・アンド・ウェッソンだけじゃ、こころもとないぜよ」
竜馬がレミーに言った。
レミーは身を乗り出した。
「なんかしんしん興味……。で、何を作るの？」
「もうできちょる。真吾先生の設計で、人手は次郎長親分が流れ者のやくざを集めてくれての」
「ついでながら、経費はわたしが作った。幕府の軍艦を作る金を三隻分ほど無断で借り受けてな」
勝が頭をかきながらそう言うと、カットナルは頷いた。
「いやあ、つきもの、つきもの……。横領は政治家にはつきものです」
肩のカラスがもっともだというように、カアッと鳴いた。
「横領と言われては元も子もないが、今さら幕府が国産の軍艦を作っても、異国の新鋭艦に勝てるはずもあるまい。軍艦が欲しいなら、異国の船を買ったほうが安あがりだ。それを高い金をつかって自力で作れという。まるで、幕府の財力を弱めろと言っているようなもんだ」
「それもドクーガのやりそうなことだな」
ブンドルが呟いた。
「さよう、そんなに無駄遣いをしたいなら、わたしが少しはましな道楽に使ってもバチは当た

るまい」
「お一人で楽しまないで……。見せていただけるんでしょう？」
と、レミー。
「もちろんだ。操るのは諸君なのだからな。こちらへくるがよい」
勝は扉の向こうへ一同を案内した。
「わッ、でっかい！　かっこいい！」
スギサクは叫び声をあげた。
小山に見えたのは巨大な倉庫だった。
そして、その中に鉄板を無造作に溶接した、つぎはぎだらけの巨体が立っていた。
倉庫の明かりは、数十本の松明が燃えているとはいえ暗い。
しかし、よく見れば、その巨体は全長五十メートルを超すだろう。
しっかりと、二本の手、二本の足、頭もついている。
だが、いかにも速成で作られたものらしく、まるで幼児が作ったプラモデルのように鉄板と鉄板の間にすきまがあき、溶接の跡がはみだしている。
そして、胸には、金太郎の腹巻きのように赤い塗料で『豪』の字が書かれてあった。
真吾はニヤリと笑った。
「これが俺たちのゴーショーグンさ。漢字で書いて豪将軍……、空は飛べないがね」
ゴーショーグンのメンバーは、呆然と立ちつくすだけだった。

……空は飛べないのはわかるわよ。だけど、そもそもこれ、動くのかしら……

レミーはそのゴーショーグンが『オズの魔法使い』の油抜きのブリキ人間ほどさえも動けるとは思えなかった。

それに、今、彼らが欲しいのは、人間の形をしたロボットではなく、少数でドクーガを倒すことのできる兵器のはずだ。

なにもわざわざ人間の姿をする必要はない。

「確かにこりゃ、道楽の世界だわ……」

レミーは溜め息をついた。

「これが動こうと動くまいと……道楽ならば、もう少し美しくあってほしかった」

ブンドルも、他人に目立たぬように肩を落とした。

「すごいなあ……。おいら動かしてみたいなあ」

一人、スギサクだけが目を輝かせて、ロボットの回りを駆け回り、いとおしむように手をふれていた。

＊

新撰組壬生の屯所で——。

池田屋事件以来、新撰組の勇猛ぶりは京都はおろか、全国に広まった。

と、同時に、藩士の多くを殺された長州藩の怒りは爆発、一気に倒幕論が沸騰し、長州軍

は数千人の軍勢で京都を取り囲んだ。
まさに一触即発の危機が迫りつつあった。
屯所は警備に走る隊員たちの動きがあわただしい。
だが、池田屋で血を吐いた沖田の病状は少しも回復せず、床に伏したままだった。
「総司、具合はどうだ？」
障子が開き、鎧をつけた土方が入ってきた。
「まずいなあ……、こんなときに手伝いもできないなんて」
沖田が青白い顔で微笑した。いつでも悲しい顔とは無縁でいたい男だった。
「気にするな。本当の闘いはまだまだ先にある。そのときまで、お前の刀はとっておけ」
「けど、なんか皮肉ですね。実際にはわたしたちが長州の連中をドクーガから助けてやったのに……」
「新撰組自体がこの時代の皮肉のようなものさ……」
沖田は土方に頷いてから、障子の外の庭を見つめてポツリと言った。
「蝦夷か……。わたしたちが蝦夷に行ったら、どうなっていたでしょうね」
「蝦夷か……」
土方も遠くを見る目をした。
「憶えていますか？　京都にやって来る前、わたしたちが迷っていたことを……」
土方は頷いて言った。

「先輩の八王子千人隊のように蝦夷に行って北の防人になるか、京に上って京の防人になるか……、どちらを選ぶか……」

八王子千人隊とは、沖田や近藤、土方と同様に、多摩川の流域で育った農民出身の武士集団だった。

近藤たちと同じように真の侍になることを目指し、蝦夷地の防衛に向かい、死んだ。

「八王子千人隊の後を追って蝦夷に行っていたら、今頃は日本人同士のせこい殺し合いじゃなくて、ドクーガ相手に日本を守って闘っていたかもしれませんね」

「だが、時代はわれわれを京都に呼んだ」

「そうだ。そして、それは正解だった」

縁側から近藤がそう言いながらあがってきた。

「京都に来たからこそ、わしらの名は天下に響いた。辺境の蝦夷地では、いくら功をあげてもこうはいかん」

「どうせ死ぬ身に名が必要ですかあ?」

沖田はいたずらっぽく近藤をのぞきこんだ。

「広いんですってねぇ、蝦夷地は……。もっとも、こんな体のわたしじゃ、そんな広さはもてあましちゃうでしょうけどね」

近藤は沖田をじっと見つめ、それからぼそりと言った。

「行け……、総司……」

「えっ？」
「病持ちの新撰組は足手まといだ。それに、京の酷暑は体に毒でもある。すずしい蝦夷地で体を休めてこい」
「困ったな、蝦夷地までの長旅のほうが体に毒ですよ」
沖田が肩をすくめた。
「たかが旅の一つで命を落とすような柔は、それこそ新撰組にはいらぬ。総司、丈夫になって戻ってこい」
「大阪からの舟を用意しよう」
土方が立ちあがった。
「やだなあ、わたしはつまはじきですか？」
沖田が明るく言った。
「元気になったら、山南君あたりを迎えにやるよ……。それに……」
土方は、ふっと笑って続けた。
「わたしも、新撰組のすべてを見届けたら、蝦夷へ行ってみたいものだ。もっとも、やむをえなく行くことになるかもしれないがね」
次の日、大八車に乗せられて、沖田は大阪へ向かった。
元治元年、七月十九日――。
沖田と入れかわるように、長州軍は京都に進撃を開始した。

だが、用意周到な幕府軍に迎え撃たれ、壊滅といっていい敗北を喫した。
これを「禁門の変」といい、まだまだ新撰組の意気は衰えを知らなかった。
明治元年、新撰組が消滅し、明治二年、土方が北海道の箱館五稜郭で戦死するまで、まだ五年の歳月が必要だった。
なお、池田屋事件や禁門の変の翌年、新撰組の幹部のひとり、山南敬助は新撰組を脱走、沖田に連れ戻され切腹を命じられた。
沖田に連れ戻されたのか、沖田を迎えに行ったのか、そして本当に切腹したのか……。証言者は今、もうこの世にいない。

＊

「これが、ちゃんと動くから面白い……」
鉄板ロボット、豪将軍の胸のあたりに位置するコクピットに入った真吾がニヤリと笑って一同を見た。
コクピットには、真吾の身長以上あるレバーが何十本も立ち並んでいる。
「この国には、からくりという技術があってね。まあ、いってみれば、ぜんまいや滑車の原始的な力学を応用した自動人形なんだが……。ほら、腕を動かすぞ……」
真吾は体当たりするようにしてレバーを押し倒した。
ギギギ……、金属がきしむ音がして、コクピットが激しく揺れた。

揺れはなかなか止まらない。
「おい、富士山か三原山が噴火したんじゃねぇのか？」
たまらず、キリーがわめいた。
「体のこりをほぐすにはちょうどいい揺れじゃがの」
ケルナグールがコクピットの壁に体を押しつけて言った。
「バイブレーションもほどほどに……。これじゃ感じるものも感じないわ」
レミーが歯の根をカタカタ鳴らしながらぼやいた。
「無駄口は言わぬことだ」
ブンドルが声をふるわせながら言った。
「下手をすれば舌を噛む……。ウッ」
ブンドルの唇から、うめき声がもれた。
どうやら自分が舌を噛んだらしい。
揺れはそれから五分ほど続き、やがてピタリと止まると、ガチャン！　いきなり豪将軍の腕が上がった。
「腕一本動かすのに五分？」
レミーが天を仰いだ。
「それだけ複雑で精密ってことさ」
真吾は平然と言ってのけ、

「今度は指を動かしてみるぞ」
で……、やはりレバーを倒してからひとさし指が動くまで五分かかった。
「少し油が足らんのかな？」
と真吾が首をひねった。
「あのう、ここで油を売っている暇、ないと思うんですけど」
レミーは肩をすくめた。
「もちろん、今、見せたのは人力による基本だ。いつもは電力を使う」
真吾はコクピットのスイッチを入れた。
コクピットの中が七色の光で浮かびあがった。
コクピットの電灯をよく見ると、さまざまな色のガラス瓶でできている。
「ディスコでも開くつもり？」
「電球に使うガラスが手に入らなかった。仕方がないから、長崎で手に入れた酒瓶の中を真空にして使っている」
「わしが手に入れたんじゃ。エレキテルギヤマンちゃうわけじゃ。華麗じゃのう」
竜馬が目を輝かせて胸を張った。
「ほとんど不安……」
レミーが呟いた。
「そう、ファンを使う。薪を燃やし、蒸気でファンを回す蒸気タービンで発電している」

真吾が冗談を言う気もなく答えた。
「薪ったって、発電するにゃ半端じゃ足りねえだろう。どうやって運ぶんだ？」
とキリー。
「豪将軍が、材木を背中に背負う」
ブンドルは、似たような銅像が日本にあるのを思い出して呟いた。
「二宮金次郎タイプ豪将軍か……。わたしの美学では勤勉を美しいとは呼ばぬが……」
真吾は、一同のげんなりした表情を意に介さず続けた。
「当然この程度の電力では、豪将軍をスムーズに動かすわけにはいかない。そこで、いざというときは、とっておきのエネルギーを使う」
「とっておき？」
レミーが聞く。
「時間を無駄にしたくないのでね」
真吾は腕時計を見せた。
「そうか時計の半永久電池を使うのだな」
ブンドルの言葉に真吾は頷いた。
「この電池は、宇宙のどこにでもある宇宙波を蓄積してエネルギーに変えている。一つ一つは小さいが、六個直列にして電気的な刺激をあたえれば、かなりのパワーが出るはずだ。電池を貸してくれ」

「やっと、おもちゃからメカっぽくなってきたぜ」
キリーが腕時計をはずしながら言った。
真吾はほかの四人からも腕時計を受け取ると、小さな硬貨のような電池を取り出した。
コクピットのパネルに備えつけられた宝石箱のようなケースの蓋を開ける。
そして、慎重に一個一個、ケースに刻まれた溝にはめこんだ。
「これだけは真面目に作った」
「マジな奴がマジにやると結果がマジイことが多いぜ」
キリーが相変わらずの減らず口を叩いた。
真吾はそれには答えず、
「さ、電流を通すぞ」
真吾はケースの蓋を閉じると、スイッチを入れた。
一瞬、ケースが白く発光した。
次の瞬間、ケースの蓋がはじけ飛んだ。
六つの電池は互いに反発するように勢いよく溝から飛びだし、狂ったように宙を走り、ガラス瓶の電球を片端から割って、床に落ちた。
低いうなり声をあげていた蒸気タービンがぴたりと止まり、コクピット中の明かりが消えた。
すぐに、ゆらゆら揺れる明かりがコクピットの中を暗く照らし出した。
竜馬が手に持った松明に火をつけたのだ。

松明に浮かび上がった真吾の顔は、呆然としていた。
「こんな馬鹿な……」
「おいおい、プラスとマイナスを間違えたんじゃないのか？」
とキリーが真吾の顔をのぞき込んだ。
「そんなはずはない。おまけに発電器の電力まで消えてしまうなんて……。考えられない」
「ありうることだ」
ブンドルは、床の上に落ちた電池の一つをつまみあげた。
「レミー、あなたの腕時計を借りるよ」
ブンドルは電池をレミーの腕時計に入れた。
そして、フッと笑った。
「やはりな……」
「やはり何なの？」
レミーが聞いた。
「この電池は、わたしの時計に入っていたものだ。だが、レミーの時計はピクリとも動かない」
レミーは時計を手にとった。
「ほんとだ……。半永久電池が切れちゃうなんて……」
「ほんとうに切れたのかな？」

ブンドルは琥珀の文字盤がついている腕時計に、電池を入れた。
ブンドルの生きていた時代には珍しい、アナログ表示の秒針が時を刻み始めた。
「わたしの時計は立派に動く……。すなわち、それぞれの時計は、それぞれ今まで入れていた電池でしか動かない」
「馬鹿な、昔のビデオやワープロじゃあるまいし、電池に互換性がなくてたまるか。これは商業道徳上、問題じゃぞ」
カットナルがわめいた。
「待てよ、この電池はみんな同じメーカーだぜ」
キリーが、床から拾ったほかの電池を見比べながら言った。
「ますますけしからん！」
「カットナル、かっとなるな」
ブンドルはカットナルを制して続けた。
「おそらく、それぞれの電池の持つエネルギーが嚙み合わないのだ」
「嚙み合わない？」
真吾が聞き返した。
「われわれは同時に瞬間移動して、この世界へやって来た。だが、この時代へ辿り着いた時間も場所もさまざまだった」
「そういえば……」

カットナルは頷いた。

カットナルが現れたのは、井伊大老が暗殺された万延元年、そして最後にケルナグールが現れたのは文久三年、実に四年の差がある。

「なにかが狂ったのだ。瞬間移動にも時間のエネルギーが必要ならば、それぞれが費した時間のエネルギーの量が違う。そのエネルギーの影響をこの電池はもろに受けた。この電池が放つエネルギーは、それぞれ微妙に時限が違うのかもしれぬ。だから、今の時限のエネルギーをともに受けたとき、本来の時限でのエネルギーが呼びさまされ、誤差のエネルギーを吸収しつつ反発しあうのかもしれぬ」

……そういえば……

とレミーは思った。

確かにいままでお互いの位置を知らせる腕時計センサーに反応がなかった。

こうして一緒にいる今も、センサーは作動していない。

「じゃあ、生身のわたしたちはどうなるの？　やっぱり反発の大喧嘩？」

「生命エネルギーはわからぬことが多い。並のエネルギーよりはるかに順応性があるかもしれない」

「不自然だ！」

真吾が吐き捨てるように言った。

「確かに……」

ブンドルは頷いた。
「だから、六人が同じ時限にいられるような揺り返しが起こるかもしれぬ。なにがきっかけになるかはわからぬがな」
「いずれにしろ、俺たちはここで生きていることは確かだ。そして、電池が使えないこともな。どうやら豪将軍のおじちゃんは、薪をかついで細々と節電しながら、ドクーガと喧嘩しなきゃならないようだぜ」
キリーは肩をすくめた。
「難しい話はわからんが……。わしらはそろそろおいとまじゃ」
竜馬が一同に言った。
「おまんらが蝦夷でドクーガをやっつけるまで、やつらの目をわしに引きつけちゃる。新撰組の近藤さんと出来合いの追っかけっこじゃ」
「新撰組はともかく」
ブンドルは、竜馬を見つめた。
「見廻組(みまわりぐみ)にはくれぐれも油断めさるな」
「なあに……。わしゃ、このまま長崎へ行ってピストルを手に入れるつもりじゃき……。この世はもうピストルの時代じゃき……。見廻組なんぞ大丈夫ぜよ……長崎にスミス・アンド・ウエッソンがあればいいがのう……」
竜馬はレミーの腰の四十四口径をうらやましそうに見てから、真吾に向き直った。

「真吾先生、しばしの別れじゃ。ことがうまくいって、蝦夷地でまた会える日が来るといいがのう……。ま、それまで、レミーさんと仲ようやっちくれ」

「レミーと？」

真吾は思わずこけた。

「おまんが、わしの乙女姉さんを憎からず思うとったわけが、よくわかったぜよ。レミーさんによう似てしまった姉さんが、ちと不憫じゃが仕方あるまいね。姉さんにはよく言っとくぜよ」

「竜馬、俺は乙女さんをそんなつもりで……、レミーと乙女は違う」

「いいち、いいち……」

竜馬は中岡慎太郎と連れだって倉庫を出ていった。

……いいんだ。これで……。俺はいつも出会った女を不幸にしてしまうんだから……

そんな思いで見送る真吾の肩を、レミーがポンと叩いた。

「わたしが乙女じゃないってどういうこと？」

「勘違いを弁解する気力はないよ……」

ぼそりと真吾が呟いた。

「そう……、ごめんなさい。余計なこと聞いて……」

気のいい真吾がこんな受け答えをするとき、真吾がいつも決まってどんな状態であるか、知らないレミーではなかった。

レミーはそっと真吾の傍を離れた。
レミーの気持ちもこんなときは少し寂しかった。
「俺も長州でひと暴れしてやる。ドクーガに目立つようにな」
高杉は、腰に下げたひょうたんの酒をグビリと飲み干し、短歌を口ずさんだ。
「おもしろきこともなき世をおもしろく……、うむ……。下の句は死ぬ間際にでも考えよう……。フフ……、おもしろいのう……」
そう呟きながら、倉庫を出ていった。
「わしらと一緒に北海道に来んか？」
ケルナグールが岡田以蔵に言った。
以蔵は顔をゆがめて笑顔を作った。
「わしゃ、まだ斬らにゃならんやつがおるぜよ」
「ん？」
以蔵はふところから書状を出した。
「また、土佐の武市さんから、京都で人斬りをしちくれと頼まれたぜよ」
「人斬りなんぞという仕事は、人に利用されるだけじゃ……」
「わかっちょる。けど、わしゃ豪将軍なんちゅう鉄のかたまりなんぞに乗るより、刀一本で勝負するのが似おうちょる。それしか能がないぜよ。いろいろ考えたけど、それしかない、仕方ないぜよ」

以蔵は顔をゆがめて倉庫から飛び出していった。
「おいどんは豪将軍の勝ちば信じとります」
西郷は勝の手を力強く握った。
「勝さんとは幕府と薩摩、敵味方の立場は違えども、この国を守りたい気持ちは同じですたい。また、どこかでお会いもそう」
西郷に頷き返した勝は、ゴーショーグンの面々と、死んだはずの池田屋の一同に向き直った。
「わしはドクーガの目をくらますためにも、こちらに残って、軍艦の資金横領を隠さねばならん。豪将軍の諸君、池田屋の志士諸君、蝦夷のドクーガを頼むぞ」
勝の眼中にはとうの昔に幕府や藩はない。
ドクーガから日本を守る。それだけだった。
そんな勝のまなざしを見ていると、たいした勝算はなくても、頷かざるをえなかった。
「まかしておいてよ！」
スギサクだけが元気に胸を張った。
「霧隠の……、あんさんは異人だが、天下一の富士山に見守られ駿河湾のうぶ湯につかった、この次郎長の一の弟分……、いわば日本一のやくざだぜ。ざ・やくざのすぴりっつ、世界のドクーガにまざまざと見しちゃっちくれ。では、ぐっどらっくのしいゆうあげいん！」
次郎長の口から自分のいつもの別れの決まり文句が出たので、レミーは思わず小声で答えた。

「シー・ユー・アゲイン」

「ん？」

次郎長は眉をひそめるとレミーを見た。

「みすれでいのかんとりいは、どこかね」

「え？　はい、フランスですけれど」

「であろうのう……。どうりで、発音が悪い……。それを言うなら、しいゆうあげいんだ……」

「はあ……」

ポカンと口を開けているレミーを残し、次郎長は豪将軍の製作を手伝った流れ者たちを連れて、倉庫から出ていった。

それから数カ月後、竜馬は念願のピストルを手に入れた。そのピストルは、スミス・アンド・ウェッソンが開発したS・W三十二口径№2オールドモデルという銃だったという。

だが、そのために油断があったのか、慶応三年、中岡慎太郎とともに、京都河原町の近江屋で暗殺された。犯人は佐々木只三郎の率いる見廻組だといわれている。

高杉は奇兵隊という軍隊を組織、倒幕か否か意見の分かれていた長州藩内で暴れ回り、ついに倒幕一本に藩の意見をまとめあげた。

しかし、酒の飲みすぎがたたったのか、体をこわし、明治維新を見ずして病死した。

辞世は、

「おもしろきこともなき世をおもしろく……」
下の句は聞きとれなかったという。
勝は、元治元年、幕府から免職、江戸の氷川町で謹慎処分……、なお西郷とはその後、官軍の江戸進軍の際、交渉して江戸を戦禍から救った。
岡田以蔵は土佐の武市が失脚後、殺し屋の嫌疑で捕えられ処刑された。
清水の次郎長は近在の親分衆との抗争に生き抜き、富士の裾野の開墾に従事するなど明治政府に協力した。やはり、ただのやくざではなかった。

＊

東の空が白みかけてきた。
何年か前には聞き慣れていた、あのなつかしい真吾の声が響く。
「豪将軍、発進！」
ズズズ！
小山のような倉庫から、崖に向かって巨大な鉄の人形がすべり落ちていく。
崖っぷちから飛び出した巨体は、いつもなら背中のエンジンを全開にして、昇ってくる朝陽に向かって腕を大きく広げ飛翔していくはずだった。
だが、今日の鉄製豪将軍は、そうはいかない。
頭からまっさかさまに、海面に落ちていった。

白くわきあがる水泡がやがておさまると、ボコリと、束ねた数十本の材木が海面に姿を現した。

海面に見えるのは材木だけだ。

豪将軍の胸のコクピットの中は惨憺たるありさまだ。コクピット全体が横倒しになり、壁が床、床が壁、しかも電灯は点いていない。

壁の隅に十数人が押しあいへしあいしてもがいている。

まともな格好は、横からつき出しているレバーに止まっているカラスだけだ。

「ちょっとなあ、この鉄人形、本当に浮いているんだろうな」

キリーの声だ。

「俺、泳げねぇんだから……、自慢じゃねぇけど……。このまま鉄の棺桶、海の底じゃ、化けて出ようったって泳げねぇんだからなッ」

「普通、鉄って水に浮かないんでしょ」

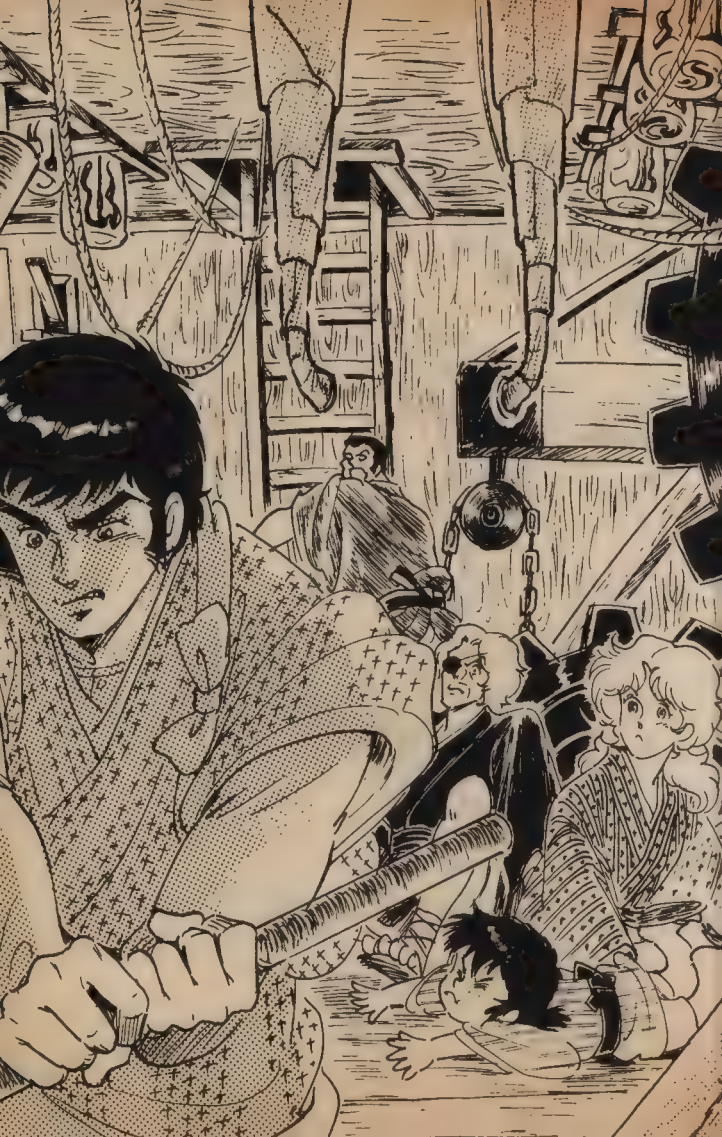
スギサクの声だ。

「信じるんじゃ、信じるものは浮かばれるとな」

カットナルが答える。

「なにするの！」

レミーの声と同時に、

パシン！

レミーの平手が、何かを叩く音がした。
「すまん、パネルのスイッチをさがしているんだ」
真吾の声だ。
パチン！
スイッチを入れる音がして、蒸気タービンの回転音が響いた。
すぐに七色の酒瓶ライトが点灯した。
「あーっ！　見てくれッ！」
キリーが絶叫した。
コクピットの壁のすきまから水が吹き出している。
「早くかい出せ！」
真吾が叫ぶ。
「かい出せってどこに？」
レミーの目の前のガラス窓の向こうは、海の下だった。
一同は顔を見合わせた。
「脱出する！」
真吾がぼそりと呟いた。
それを合図に、一同はわれ先にコクピットの天井……、いつもなら壁のドアに駆け寄った。
ドアを開く。

と、サーッと潮の香りが吹き込んできて、そこに青空が見えた。
一同は豪将軍の背中の部分、豪将軍が背おっている材木の束の間から顔を出した。
「鉄は沈む。しかし木は浮く。背負った木の浮力で沈まずにすんだ」
ブンドルは潮風を深呼吸した。
コクピットの浸水もおさまったようだ。
突然、細い震動が一同を襲った。
「見ろ、動き出したぞい」
ケルナグールが、豪将軍の海面下に隠れた脚部のほうを指さした。白く泡立(あわだ)っている。
「スクリューが回りだしたんだ。おい、行けるぞ、北海道へ……」
真吾が微笑した。
「何泊何日で?」
レミーが呟いた。
「知るか……。けれど、コクピットが無事な以上、舵(かじ)は取れる」
「食い物は?」
ケルナグールが情けなさそうに聞いた。
「水産資源は無限の太平洋だ!」
確かに材木の上の一同を笑うように、無数の飛び魚が海面をはねている。
豪将軍は北へ向け、ゆっくりと進んでいった。

そしてほぼ一カ月後、材木を背負った豪将軍は無人の砂浜に乗り上げた。
巨体のいたるところに昆布がからみついていた。
そこは確かに北海道だった。
日高地方の海岸だった。
豪将軍は一同の必死のレバー操作で、よろよろと立ち上がった。
一歩進んではよろけ、また一歩進んではつまずき……、まるで酔っ払いの千鳥足だった。
十日がたち、どうにかまともに歩けるようになったころ……、一同の腕時計が同時にある電磁波を感知した。
相変わらず単純なモールス信号だが、内容は単純ではなかった。
——ドクーガ日本実験本部、富良野ニ完成——実験開始ハ、二週間後——
……実験？　ドクーガは何を実験しようというのか？……
富良野——、北海道の真ん中に位置する土地だ。
一同は顔を見合わせた。
「ともかく、行ってみるしかあるまい」
ブンドルに一同は頷いた。

終幕

北の爆発あるいは……

「なにがあってもええじゃないか」

豪将軍は一歩一歩、よろけながらゆっくりと歩き始めた。

それは誰の目にも、子供のようにたどたどしい歩き方だった。

「いくら侍さんうようよのこんな時代だからってよ、こんなポンコツで、まともに喧嘩できるのかよ」

キリーがぼやいた。

確かに、誰にも自信があるわけではなかった。

「でもまあ、このゴーショーグンさん、一応、鉄でできているんだから、ウインチェスターの銃弾ぐらいははじけるわよね」

レミーが言った。

「ウインチェスター？」

ブンドルがレミーに聞いた。

「ウン、ほら、西部劇によく出てくる銃……。ドクーガの連中、北海道ではわたしやスギサク君にいきなりぶっぱなしてきたわ」

「ウインチェスターをね」
ブンドルはしばらく黙っていた。
「俺たちやってんのは、正統派ウエスタンでも、マカロニ・ウエスタンでもない。いわば、モリソバ・ウエスタンだ。ウインチェスター銃なんて出てこられちゃ、まいっちまうぜ」
キリーが肩をすくめた。
「待てよ、何で、ウインチェスターなんだ？」
真吾が呟いた。
「えっ？」
レミーが聞きかえす。
「今は元治元年、一八六四年のはずだろ。何で、ウインチェスター銃が存在するんだ？」
かつて、国連の工作部隊にいた真吾にとって、武器について詳しいのは当然だった。
「確かに……」
ブンドルが頷いた。
「ウインチェスターというのは、ウインチェスター七六という銃が代表するように、一八七六年ぐらいに最も盛えた銃だ。しかし、銃自体が開発されたのは、それの十数年前のはずだ」
「だったら、日本にあってもおかしくはないっちゅうわけか」
キリーが呟いた。
「でも、じゃよ」

カットナルが口をはさんだ。
「なんで、そんな新製品がこの世界的ローカルの日本……それも、大混乱している江戸や京都ではなく、この北の果ての北海道にあるんじゃ？」
一同はたがいの顔を見つめあった。
池田屋で助けられた宮部が口を開いた。
「お話中、口をはさんで悪いのですが……」
「この国は武器に関する限り、異国から新製品がどんどん入ってきます。その中には新製品だけに、不良品がずいぶんありますがね」
「会津藩など、がとりんぐなどという連発銃を手に入れたという噂です」
やはり池田屋で助けられた北添が頷いた。
「ガトリングといえば、連発どころではない、回転式の機関銃だ」
真吾が呟いた。
「ちょっと待って、そんなものまでこの日本には存在しちゃっているわけ？　だったらわたしの四十四口径も勝負になるかどうか、答えはもう出ちゃっているわけ？」
レミーは自分の銃の弾数を考えて、青ざめた。もう数発しか残っていない。
これではいくら旧式とはいえ、ダダダダ！　と連発されるガトリングなどという機関銃に勝てるはずがない。
ゴーショーグン・チームの他の一同も、自分のレーザー銃を見つめて黙ってしまった。

確かに一発一発のエネルギーはレーザー銃のほうが上だが、連発される弾の数には勝てない。
「なんで、そんなもんがごろごろこの国にあるんじゃ……。仮に死の商人を自認しているドクーガが売り込んだにしろ、こんな貧乏国ではたいした金にならん。戦争やっとる国はほかにも山ほどあるではないか……」
ケルナグールは昔、ボクサーを引退後、全世界的チェーン店であるフライドチキンを経営していたが、その商魂をチラリと見せた。
そのとき、ブンドルがふっと呟いた。
「確かに日本は金にならぬ……。だが、実験場としてはどうかな」
「実験場……？」
レミーが聞きかえした。
「武器の実験だ……。いいかね。日本という国は世界には珍しく、単一の国民の国だ。確かに、詳しく見れば、北方、南方など、わずかな人種の違いがあるかもしれないが、世界的に見れば同一人種だ。しかも外国に影響力をさして持たない島国でもある。フランスやイギリス、ドイツ、いやアメリカほど目立つ国でもない。そんな国で新しい武器の実験をやれば、それが不良品で何かの犠牲が出たとしても、他国に目立つ心配がない」
「ちょっと待て……ブンちゃんが言いたいのは、この日本全部がドクーガの武器の実験場だってことなのか？」
キリーは自分が日本人でもないのに、頭をかきむしるようにして言った。

ニューヨークの暗黒街で、利用されるだけ利用され、使い捨てにされる人々のつらさを見慣れているキリーは、ドクーガに利用されたり、まして実験のサンプルにつかわれているかもしれないこの国を、他人事でなく悲しく思ったのだ。

「ドクーガのやりそうなことだ」

カットナルが頷いた。

「早い話、こんな時代の日本……円高の二十世紀後半の日本ならともかく、ドクーガにとってなんの価値もない。だが、武器の実験場としてなら……、利用する意味もある」

「だから、ウインチェスターさんや、ガトリングさんがあるわけ？　日本に……」

レミーが呟いた。

「それだけかな……。なぜドクーガが、北海道の真ん中の富良野に実験場を造ったのかな」

ブンドルは目を閉じて言った。

「広い土地の真ん中で実験して、目立たない武器……それをドクーガは造っている」

真吾はブンドルの言葉を聞いて息を飲んだ。

真吾にはその武器が何であるか思い当たったのだ。

「よせよ、冗談は……。そんな原始的な武器がこの時代にあるわけがない」

真吾は否定したかった。

「原始的だからこそ、この時代にあってもいいのではないかね」

ブンドルは冷静に言った。

「二十一世紀、いや二十世紀なら、十代の子供にも造れる武器だ。ウランの真ん中で高熱を発する爆弾を爆発させる。そうすれば」

「核分裂か……」

あまり科学には詳しくないケルナグールがうめいた。

彼らのいた二十一世紀なら、ケルナグールにとってさえ常識的な知識だった。

「だって、ここにアインシュタインさんがいるわけないでしょ」

レミーがやりきれない気持ちで言った。

「そりゃそうだ。俺の知ってるアインシュタインさんは、まだおやじさんの中で、女の子にキスしたいと思ってもいない時代のはずだぜ」

キリーがニヤリと笑った。

「冗談言ってる場合じゃないと思う……。だって、ドクーガならそれぐらいやりかねないわ」

レミーは真剣だった。

「そのとおり。別にアインシュタインがいたから、Aボンブ（原爆）ができたわけではないのかもしれない。確かに理屈で原爆(Aボンブ)を説明したのはアインシュタインかもしれないが、しょせんは子供が造れるような単純なものだ」

ブンドルは落ち着いていた。

いや、そう見せていたのかもしれない。

「なんの話か知らないけどね、きっと僕ら、ドクーガってやつに勝てるよ！」

スギサクが窓の外を見て言った。
「スギサク君、相手はなんてったって、原爆さんかもしれないのよ」
レミーがなんとなく微笑して、スギサクの肩を叩いた。
レミーはいよいよとなると、真剣な顔をするより笑ってしまうタイプの女だった。
「でも、見てよ。みんながついてくる」
スギサクが窓の外を指さした。
「えっ？」
レミーは窓の外を見た。
そこに無数の人がいた。
ボロをまとった、はた目ではけっしてまともな暮らしをしているとは思えない人たちだった。
その人たちが恐る恐る、しかしゆっくりと豪将軍の後をついてくるのだ。
「なんなんだ、この人物たちは……」
キリーがうめくように言った。
この群衆が豪将軍に敵意を見せていないのが、不思議ですらあった。
「やったね！　思ったとおりに話が運んだ」
真吾が指をパチンと鳴らした。
「何をやってくれたんだ？」
キリーが聞く。

「俺が坂本竜馬と考えたことさ」
「見えない……、お話が……」
レミーが肩をすくめた。
「あんたら、このゴーショーグンを見て、最初、馬鹿にしたろう。武器としてのゴーショーグンが、なんで、こんな子供じみたロボットの形をしているのかって……」
「最初ではなくて、今もずいぶん馬鹿にしているがの」
ケルナグールが言ったので、思わず真吾はよろけた。
「あのな……。人はみんな何かのシンボルを求めている。自分を救ってくれる英雄を求めている。なぜ、ゴーショーグンがこんな人型をしているか……。それに関しては、なぜアメリカの自由の女神が、ああいう人間の形をしているか……。自由のシンボルというだけだったら、なにも人間の形をする必要はないだろう」
「じゃあ、このつぎはぎ鉄板ゴーショーグンは何のシンボルなの？」
なんとなく真吾の気持ちが分かるような気もして、レミーが聞いた。
「知るか……。でも、スギサクってこの子は、このポンコツゴーショーグンを見て目を輝かせた。そして後についてくるあの人たちもそうだ」
「そうだよ。この土地に住むほとんどの人たちが、作りスギのスギサクのように、ろくな暮らしをしていない。でもおいらは、誰かがおいらたちを助けに来てくれると思っていた」
確かに、この土地に移住してきた人々のほとんどが、後から来た役人や大商人のために、み

じめな暮らしをしていた。
「シャコタンで海の向こうに消えていったヨシツネを……、女郎子岩で海の向こうを見つめていたレミーさんを……、おいらたちは待っていたんだ。おいらたちスギサクを救ってくれるでっかい人間を……」
「やはり、この土地の人たちにとって、人間の形をした巨大な何かが必要だったのさ……」
真吾がスギサクの肩を叩いた。
「そうだよ。だからみんな、この鉄の人形が何をするか分からないけれど、ついていこうとするんだよ」
「普通、でかいと人は恐がるものだがの」
巨体のケルナグールが首をひねった。
「恐いよりも、すがりたいつもりのほうが強いんだろう。俺もよく分かんねえけど、そこはこのロボットちゃんの人格……。ゴッドファーザーと呼ばれるようなやくざには、やくざじゃねえかたぎの人だってついていくようなもんだぜ」
キリーがこめかみをポリポリかきながら言った。
「キリーくんのやくざ哲学が、今回、通用しているのかどうかは分からぬが、ともかく現実は小説よりも奇妙に美しい」
確かに、それはゴーショーグンのメンバーが見ても妙な風景だった。
何千人も超える群衆が、豪将軍の後をついていく。

豪将軍の行く先さえ知らないのに……。
いちばんそんな群衆の気持ちを知っているのは、やはりスギサクだったのかもしれない。
「いいんだよ。みんなこの豪将軍についていきたいんだから……。うん！」
スギサクは確信しているように頷いた。
「困りますなあ、ついてこられても……。乗っている俺たちは、みんな、勝手に生きたい一匹狼なのに……」
キリーは肩をすくめてから、思い出したように、
「あれ？　ちょっと待てよ。ついてこられた先で原爆（Aボンブ）さんがボカンじゃ、みんな死んじゃうぜ」
「それをさっきから気にしているんだ」
真吾が呟いた。
「全員、道連れであの世行きかな……。ま、わたしも、アメリカの大統領をやっていたときは、いつでも国民と一緒に戦争やって死ぬ気になっていたがね……」
そう言ったカットナルを一同がにらんだ。
「あ、冗談言っている場合ではないのか」
アメリカ国民と一緒にしないでくださいといった調子で、肩のカラスがカットナルをつついた。
「ま、願いとしては、わたしたちの予想に反して、ドクーガが原爆（Aボンブ）など実験しないで欲しいの

だが……」
そのとき、レミーの腕時計のランプが点滅(てんめつ)した。
他の一同の腕時計も同じだった。
「こういうことらしいわ」
レミーが、ポツリと言った。
そのランプの点滅は、行き先に核物質反応があることをしめしていた。
もうほとんど、ドクーガが北海道の中央で実験しようとしているのは、原爆に違いなかった。
「おい、どうする。俺たちだけなら、原爆(Aボンブ)さん嫌いでとんずらできるが、後のぞろぞろがいるんじゃどうにもなんないぜ」
キリーが髪をポリポリとかいた。
「この腕時計の反応では今さら逃げても、原爆(Aボンブ)の影響力を逃げられまい。破裂したら、仮に直接爆破の被害をまぬかれたとしても……」
ブンドルがいつになく暗い顔で言った。
「チェルノブイリ原発的放射能か……」
カットナルがうめくように言うと、肩のカラスがうなだれた。主人のカットナルの言葉はよく理解できないが、カットナルの表情を見れば深刻さはよく分かるのだ。
「チェルノブイリでは、二十一世紀になってもひどい被害だったが、この土地の人は核を知らない。無知の人間に核ほど危険なものはない。この先、何百年、被害が残るか分からない」

真吾の言葉に、一同は答える気もしなかった。

「でも……、でもよ……」

レミーがむりやり明るく言った。

「日本の北海道でこんな時代に原爆が爆発したって記録あるの？……広島や長崎なら聞いたことあるけど……」

ブンドルが答えた。

「確かに、北海道に原爆の記録はないはずだ……」

「だったら大丈夫よ。きっと、なんかの都合で爆発しないわけよ。歴史が語る真実なのだ……、うん」

レミーは自分を勇気づけるように頷いた。

「歴史が語る真実なら、なぜ池田屋で死んだはずの人たちが、ここでこうやって豪将軍なんぞというロボットに乗っているんじゃろのう」

ケルナグールが無神経に口をはさむ。

一同はそんなことはとっくに気づいている。

一同は、歴史で語られた真実とは違うところで行動してしまった。

ゴーショーグン・チームは歴史上、ここにいてはならないのだ。しかし、現実にはここに存在している。

あってはならないことが起こっている以上、歴史上あるはずのない幕末の原爆が爆発しても

文句はいえない気がする。
「結局、なんとしてでも、原爆(Aボンブ)をつぶすしかないのよね。わたしたちの手で……」
こんなとき、レミーはどういう表情をしたらいいのかわからなくて、にっこりと笑ってみる。
「しかし、それで、俺たちが原爆(Aボンブ)をつぶせば歴史どおりになるってことは……、何だかいやな感じだな」
真吾が吐き捨てるように言った。
「俺たちがここにいるってことそのものが、歴史のまともな真実とやらのためにいるってことかい？」
キリーが肩をすくめる。
「誰かが、そうなることを仕組んだのかもしれぬな」
その誰かが何であるか、気づいていながらブンドルが言った。
「ケッ！　またビッグソウルとかビムラーさんか？」
キリーがうめく。
ビッグソウルとは、ゴーショーグン・チームの一同が時空を瞬間移動させられる元になったともいえる、いわば宇宙の意志のようなものだった。ビムラーとは、その意志が発せられるときに使われるエネルギーのようなものだ。
「ビッグソウル以外、誰がこんなことを企(くわだ)てられる？」
ブンドルが言った。

「やれやれ、何年間つきあってなきゃなんねえんだ、そのビッグソウルちゃんと……」
とキリー。
自由気ままに生きたいゴーショーグン・チームの一同にとって、自分たちを操っているらしい宇宙の意志などというものは、今は迷惑にすぎなかった。
「そうだとしてもさ……原爆（Aボンブ）をドカンさせるわけにもいかないわよね。うん、やるっきゃないのよ、ここは」
レミーが親指を立ててみせた。
「そう、今はやるしかあるまい」
ブンドルが呟いた。

＊

やがて、鉄の豪将軍の前方に、くいで囲まれたレンガ造りの巨大な建物が見えてきた。
「なんじゃ、ありゃ。サイロの親玉か？」
カットナルが誰に聞くともなく言った。
「平原の中のサイロ……。風景だけは北海道に似つかわしいかもしれない」
ブンドルが答えた。
その建物にはほとんど窓がなかった。
だが、ゴーショーグン・チームの一同には、それが何であるかすぐに分かった。

それは、ロケットや爆発物を実験するときに使われる、爆風よけ付きの観測所を巨大にしたものだった。
そして、そこから一キロほど離れたところに鉄塔が立っている。
その先端には黒く丸い物体が吊り下げられていた。
一同の腕時計に感知される核反応の方向を見れば、それが何であるか一目で分かった。
「分かっちゃいたけど……、原子爆弾(Aボンブ)……。アインシュタインさん、あなたが考え出すまでなんとか待って欲しかったわ」
レミーの思いを待ってくれるほど、ドクーガはやさしくなかった。
いきなり砲弾が豪将軍の胸にぶち当たった。
観測所のドクーガの一派が、豪将軍を見て大砲を撃ったのだ。
さらに、雨あられと機関銃の銃弾がふりかかる。
豪将軍はがっくりとひざをつくと、その場に横倒しになった。
「おい、ちょっと、何とかしてくれない？　大砲や機関銃で横倒しじゃ、原爆(Aボンブ)退治なんて夢のまた夢だぜ」
キリーがあわてた様子もなく、笑って言った。この男は水におぼれることだけは苦手だが、戦闘の恐怖には群を抜くタフさを持っている。少なくとも、恐怖感を人に見せて他者を不安がらせることのない、たよりになる男だった。
「すまん。この時代のドクーガが大砲やら機関銃まで……、それに、こんなにたくさん用意し

ているなんて、いささか情報不足だったな」
　真吾が、これもさして苦にしたふうもなく答えた。
「ま、それでもこのロボット、鉄でできているから、弾だけはなんとかかわせるさ」
「けど、あれは、かわせるのかよ」
　キリーが窓の外を見て呟いた。
　ゴトゴトと、地響きというには軽い音をさせて、数台の鉄の車両が現れた。現代風に言えば戦車だった。
「よせよ。ありゃ、第一次世界大戦で開発されるはずだ」
　真吾が溜(た)め息(いき)をついた。
「第二次世界大戦の原爆(Aボンブ)があるのだ、第一次大戦のものがあっても不思議はない」
　ブンドルが平然と言った。
「ねえ、武器はないの、このゴーショーグン……」
　レミーがあわてて聞いた。
「槍(やり)や、投石器は一応、用意したがな……。なにしろ火薬が手に入りにくくて……。銃砲類まで手がまわらなかった……」
　真吾は肩をすくめる。
「やっぱ、張り子の豪将軍ってわけ……」
　レミーは、思わず微笑(ほほえ)んでしまう。

「この豪将軍はシンボルだからな……。自由の女神が武器を持っちゃ、おかしいのかもしれん」

キリーが、したり顔で言った。

「こうなったら……」

レミーは四十四口径の銃を抜いた。

「自由の女神は武器を持たなくても……、女郎子岩のおばさん……、鞍馬の天狗は武器を持つの……」

レミーは銃を持ってコクピットから飛び出し、戦車に向かって撃ち出した。

「こういうことになると気の早い姉さんだ……。ま、ここは日本、日本流にやるっきゃねえな」

キリーがレーザー銃を抜いた。

「日本流とは何のことぞい」

ケルナグールが聞いた。

「特攻さ、万歳突撃。ただし、俺は死ぬ気はないがね」

「死ねば美しいというものでもない」

ブンドルがふっと笑うと、やはりレーザー銃を抜いて飛び出した。

そして、戦車の前に立ちふさがっているレミーを抱きかかえるようにして、戦車のキャタピラからよけさせると、次の瞬間、砲塔に駆け上り、ハッチを開き、レーザー銃の光線をぶち込

んだ。あっという間の出来事だった。
しかも、ハッチの下の戦車の乗員を誰も撃ち倒さずに、戦車の機関部、操縦部分だけを撃ち抜いていた。
戦車はたちまち静止した。
「あれをやれば死なずにすむな」
横の真吾にキリーが呟いた。
「できないか？　俺たちに……」
「できないはずがないだろ」
キリーはニヤリと笑って飛びだした。
そして真吾も——、ケルナグールも、カットナルも——。
たちまち、数台の戦車はコクピットの中を破壊され、煙をあげて停止した。
ドクーガの砲撃と機銃が止んだ。
こまねずみのように駆け回るゴーショーグン・チームの一同に、砲撃は不経済と思ったのかもしれない。
手に手に刀や銃を持ったドクーガの一団がゴーショーグン・チームの一団に襲いかかった。
六人の彼らに対して、それは圧倒的な数だった。
とても数で勝ち目はなかった。
そのときブンドルの背後から斬りかかった男が悲鳴をあげて倒れた。

振り向くブンドルの前に、沖田総司が立っていた。
沖田はニッコリと笑うと——、
「助だちってやつです。人はもう殺しませんがね。わたしは以蔵と違いますから……」
沖田は刀の峰を返して、襲いかかるドクーガの一団に刀を叩きつけた。
咳が出た——。しかし、かまわなかった。
だが、ドクーガの数はあまりに多かった。
レミーの四十四口径の銃弾は、もうとっくになくなっていた。
……こうなったら噛みついてでも、ひっかいてでも、やるっきゃないわ……
本気でそんな気分になったとき、いきなり歓声が聞こえた。
……えっ？　歓声って、歓びの声でしょ、どこがうれしいの？……
だが、それは、手に棒やくわや、何も持たない者は石ころを握りしめた群衆の声だった。
彼らは声をあげながら、ドクーガの一団につっこんできた。
ゴーショーグンのメンバーの死にもの狂いの闘いを見て助けに加わった彼らは、歓んでいるのかもしれない。
歓びの声と呼ぶなら呼べるかもしれなかった。
しいたげ続けられた人々が、闘おうという、不思議な歓びに満ちあふれた声だった。
ドクーガの一団は大混乱を起こした。
たいした武器は持っていないにしろ、数千人の群衆だ。

人の数にまみれて敵も味方も分からなくなった。
誰かがぽつりと呟いた。
「ええじゃないか……」
そう、
……ええじゃないか……
群衆の歓声はみるみる、ええじゃないかの合唱に変わった。
「……これが、ええじゃないかか……」
ブンドルは思わず呟いた。
幕末期、民衆がわけもなく「ええじゃないか……」とわめきながら踊りまわった事件を、ブンドルは思いだしていた。
民衆はただ何の目的もなく、エネルギーをぶつけるためだけのように踊りまくったという。
まさに今、ブンドルの前で展開しているのは、「ええじゃないか」の北海道版だった。
確かに、彼らはゴーショーグン・チームが何のために北海道に来たかは知らないはずだ。
ドクーガがどういう組織かも知りはしまい。
しかし、ゴーショーグン・チームの闘う姿はそれだけで、彼らの何かをつき上げたのだ。
ひざをついて横倒しになったロボット豪将軍は、北海道にいる民衆の、文字どおり、圧迫に対するシンボルになったのだ。
群衆は敵も味方もわけも分からず、踊るように暴れ回った。

もう本来の闘いとはいえず、ドクーガの一団も、いやゴーショーグン・チームの一同も、手がつけられないといった感じで呆然とたたずむしかなかった。
「これがおいらたちの力なんですね！」
スギサクの思わず叫んだ声が、レミーの耳に飛び込んできた。
……民衆の底力か……。まあ、ええじゃないの……
そう言おうとしたレミーの腕時計が突然、高鳴った。
……やだ、ええじゃないのなんて言ってられない！……
それは異常に高くなった核反応だった。
……ドクーガは原爆を爆発させようとしている……
一同はたがいを見つめあうと、頷いて、豪将軍に飛び乗った。
そしてわけは分からぬものの、沖田総司も後に続いた。
「俺たちに何ができるか分からんが、豪将軍発進！」
真吾が叫んだ。
倒れていた豪将軍が立ち上がった。
そして、今までのよたよたした動きがうそのように走り出した。
そのまま一キロ先の鉄塔にぶらさがっていた原爆に体当たりした。
その瞬間——、
すさまじい光が飛び散った。

あきらかに、それは原爆の爆発に見えた。
だが、次の瞬間、そこには原爆の惨状も、鉄塔も、そして豪将軍も消えていた。
群衆の前に広がるのは、放射能など何も残っていない富良野の、いつもどおりの緑の原野だった。

＊

豪将軍は乗員を乗せて時空移動していた。
「……なにが起こったの？　私たち、どこにいるの？」
レミーが呟く。
もうこれは、時空移動するときのレミーの口ぐせだった。
「おそらく……」
ブンドルが言った。
「原爆のエネルギーを、われわれの持つ腕時計の電池や、いや、われわれ自身がこの世界に持って来た時間のゆがみ、ひずみが、吸収したのかもしれない」
「で、どうなるわけ？」
「われわれがここに来たように、また時空移動をするんだろう。だが、瞬間移動できるほど強力なエネルギーではないらしい」
ブンドルは腕時計を見せた。

針が狂ったような勢いで回転している。
「時の動きが確認できるのは、瞬間とはいえまい」
「原爆（Aボンブ）はどうなるんじゃ？」
ケルナグールが聞いた。
「原爆（Aボンブ）のエネルギーはわれわれが吸収した」
「でも、しつこいドクーガさん、また次の原爆（Aボンブ）を造るかもしれないわね」
と、レミー。
「それなら安心してもらいたい」
元ドクーガで、しかも元アメリカ大統領のカットナルがにやりと笑った。
「ドクーガは失敗を許さない。新兵器が失敗した以上、よほどの理論的裏付けがない限り、再開発はせんよ……。たとえばアインシュタインのような、しっかりした理論がなければね」
「あの戦車君も、俺たち一人一人にやられるようじゃ当てにならんもんね」
キリーが肩をすくめた。
「やはり戦車は第一次大戦、原爆（Aボンブ）は第二次大戦さ……。歴史どおりになるんじゃないか？」
真吾は少し暗い表情で呟いて、続けた。
「ドクーガはこれからも日本を牛耳（ぎゅうじ）るだろうし、理論が完成したら原爆（Aボンブ）を日本で実験するだろう……、広島と長崎でね……」
誰も言葉がなかった。

「歴史どおりになったわけだ……」
　ブンドルが呟く。
「ちょっと待てよ。これじゃあ俺たち、原爆(Aボンブ)で歴史が変わっていったはずの日本や世界を、元どおりの歴史に戻したことになるのかよ」
　キリーが天を仰(あお)ぐようにして言った。
「面白くねえ……」
「まあ、歴史どおりだと、受験生諸君は助かるでしょうけどね……、確かに面白くはないわ」
　彼らとしては宇宙の意志ともいえるビッグソウルの思いどおりに動かされるのが、たまらなかった。
「受験生諸君をいじめるのは本意ではないが……」
　ブンドルが言った。
「そうでなければ、少しはわれわれにも自由が許されるかもしれぬ」
「えっ？」
　レミーが聞いた。
「われわれは今、ゆっくり時間を移動している……。今なら、何か、できそうじゃないかな。なにしろ、胸の病で消えるはずの沖田君がこの中にいる。少しは歴史が変わったことにはならないかな」
　ブンドルはフッと笑った。

＊

その後、新撰組局長の近藤勇は処刑された。だがその死体を見たものは誰もいないという。土方歳三は北海道で戦死した。だが、その死体も発見されなかった。山南も切腹したことになっているが、証人はもう生きてはいない。
坂本竜馬と中岡は暗殺されたが、死体がどこにいったか分からない。
高杉は病死……、これも墓の中の骨が本物かどうかは分からない。
岡田以蔵も処刑される前夜、行方不明だ。

＊

清水の富士を見つめながら、勝海舟は次郎長に呟いた。
時は、明治維新後のある日である。
「ま、いいんではないか？　歴史上にいなくなれば、死ぬも生きるも同じだ」
「わしらやくざは暗い裏街道をしたたかに歩けますがね、有名人（ビッグスター）はそうはいかねえ……。これでいいんですよ」
二人はふっと笑った。

＊

裏街道ではないが、時空のゆがみの中を豪将軍は飛んでいた。

死んだはずの幕末のスターが乗ってコクピットはぎゅうぎゅう詰めだ。

ブンドルが呟いた。

「ここにあるのは幕末のきら星ばかり、まさに幕末豪将軍だな」

「おもしろきこともなき世をおもしろく……」

高杉は、とっくりの酒をぐびりと飲んだ。

「……下の句は……、うむ……、まだ生きとるうちはやめておこう」

「なんにしろ、もう武器の時代じゃないぜよ。これからは、豪将軍を動かすようなエネルギーの時代ぜよ……。うむ……」

竜馬は、そういって自分に頷き、ニヤリと笑った。

「それでも、わしゃ、斬り続けちゃる」

以蔵は、相変わらずだ。

「これから、どこにいくんじゃ、われら、新撰組は……」

近藤は、処刑され、斬られたはずの首筋を叩きながら言った。

「ま、どこでもいいんじゃないですか？　どこに行ったってやる気はあるんですから」

沖田がニッコリと血の気のある顔で笑った。

「美学さえあればな」

土方が呟いた。

ブンドルが頷いて言った。
「どこにでも美学はあるのかもしれぬ。探す気にさえなれば……」
「どこだっていいよ。少なくとも、エゾを出て、キョートに行けて、おまけにニッポンを出れて、どっか遠くの世界に行けるんだもん」
スギサクは目を輝かしている。
「どこに行くにしたって……」
レミーがさりげなく言った。
「二十代の女性はおばさんじゃありませんからね。せめて、お姉さんって呼びなさいね、スギサク君」
レミーは、スギサクに微笑した。

＊

時計の針の回転がみるみる早くなる。
もう針の存在すら判別できない。
どうやら、時空の波のようなものに乗ったのかもしれない。
一同の意識はもう時を感じなくなっていた。
幕末豪将軍は、かなり番外篇の時空を、どこまでも飛んで行った。
AND……SEE YOU AGAIN

幕末豪将軍（完）

あとがき

首藤剛志

「この作品は基本的にフィクションであり、現実の歴史とは、なんら関係はございません」

などと、TV番組に流れるテロップのような、お断りをとりあえず、書いてみたりしてみます。

もっとも、お読みになった誰も、これを、受験参考書がわりにする人はいない、と思いますが……

でもね、あんがい作者としては、真面目にこの作品を書いていたりもしているのです。

なにしろ、世の歴史書ほど、あてにならないものはありません。その本が書かれた時代によって、歴史上のできごとなど、好きかってに書かれてしまいます。

教科書の日本史が、本当に正しいかどうか、きっぱりと言いきれる人が、いまいるでしょうか……

だから、あんがい、この幕末豪将軍に書かれている事が、真実の歴史なのかもしれません。

などといなおっても、誰も信じてはくれないでしょう。それで正解です。

えーっ、そもそもゴーショーグンの面々が幕末に現れたらどうなるだろうというアイデアは、

TV放映中の八年前から、冗談半分、真面目半分で考えていたことでした。
ですから、映画でいったら構想八年、製作日数一年の超大作ということになります。中国ロケこそしませんが、舞台は北海道から京都・伊豆、最後には、原爆まで登場する今の日本では、製作不可能な大作だといえます。
そんな作品に恐れもしらず、製作費は、原稿用紙代だけで、挑戦した作家（僕のことです）は、偉いもんだと思います。……ほとんど馬鹿です。
なにしろ、時代劇など、めったに書いたことのない作家なので、資料集めが大変でした。舞台になった北海道や京都に何度もいき、鉄製ロボット・ゴーショーグンが作られた伊豆には、今度、仕事場を作るつもりです。
北海道の積丹には、本当に女郎子岩がありますから、暇な方は訪ねて見て下さい。
北海道は、昔、アイヌという人たちの国だったのに、なぜ本州の義経の伝説が残っているのか……そんな歴史のうさんくささも、ちょっぴり感じていただけるといいのですが……
そして、このたわいないパロディ小説で、日本の幕末に興味を持たれた方は、ぜひ山ほど出版されている幕末関係の本を読んで下さい。一冊ではなく何冊も……
たぶん、そこには、歴史的事実だけではない、二十代、三十代前半で、時をかけぬけていった、オジンではない若者の姿があるはずです。
これから二十代をむかえる人。とっくに二十代、三十代を過ぎてしまった人へ……誰にも若い時はあるんです。そして、今のあなたがその時なのかもしれません。

そんなことを考えていたら、死んだはずの、彼ら（幕末の若者たち）を殺せなくなってしまいました。
まるで、企画当時は死ぬはずだったゴーショーグンのメンバーたちが、今も、生きて小説の中で活躍しているように……
幕末の若者たちは、ゴーショーグンの世界に、よく似合っている気がします。
いいえ、ゴーショーグンの世界が、幕末に似合っていたのかもしれません。
そして、一九八八年の今……どこかしら、幕末気分が、しませんか？……
で、もって、ゴーショーグンはまだまだ続きます。
本篇の続篇は「鏡の国のゴーショーグン」
そして、番外篇の続篇は、（もう幕末の若者たちは登場しません。皆さんの気持の中にしまっていただければうれしいのですが……）ルネッサンスのイタリアにゴーショーグンのチームが現れる「美しき黄昏のパパーヌ」。
なにしろイタリアですから主役はブンドル……
いまやマンネリになってしまった「美しい……」という台詞の本質が描かれるはずの、いささかロマンチックなラブストーリーという照れ臭いものを書くつもりでいます。
でも、つもりはいつものようにつもりで……いつできあがるか見当もつきません。
いつできあがるか分からないものに、辛抱強くつきあって下さる読者の皆さんに感謝しつつ、さらにつけ加えておきたいのは、小説は一人の力で作れるものでなく、辛抱強く原稿のさいそ

くに、そして作品のアドバイサーとして、よき読者になって下さった編集の高橋氏……
そして、彼に代わって、なまけ者作家の担当という地獄をしょいこんだ吉田氏……さらに、
今回はじめてさし絵を描いて下さったさかもとさん……いえ、ゴーショーグンという世界を作
りだした過去八年間のスタッフ、キャスト、全員にこの場でお礼をしたいと思います。
なに？……首藤らしくない言い方だ？……
なにしろ、病気で入院なんかしたものだから、いささか謙虚になっているのかもしれません。
ま、いいじゃないですか……
とりあえず、今日は飲みましょう。
幕末の若者たちのように……
原稿？……あの……ま、いいじゃないですか……

で、もって、

SEE YOU AGAIN

アニメージュ文庫

戦国魔神ゴーショーグン　番外篇
幕末豪将軍

N-033

1988年5月31日初版

著者　首藤剛志
発行者　尾形英夫
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四—一〇—一　〒一〇五—五五
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替　東京四—四四三九二番

印刷　大日本印刷株式会社
製本

〈編集担当　吉田勝彦〉

ISBN4-19-669583-3C0174(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメージュ文庫には5つの部門があります。

それぞれ背表紙の色がちがっていますので、買うときのご参考に!!

NOVEL

アニメ作品の小説化はもちろん、オリジナル作品もたくさんあります。

CHARACTER

人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

FILM

傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオールカラー版です。

PEOPLE

アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

THE BEST

コミック、絵コンテ集、ゲームブック、絵本など、よりすぐったアニメ周辺のアイテムをそろえました。

カバーイラスト＝さかもとえみ
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷(株)